

所謂“俗ラテン語”とロマンス語の初期の異化<sup>1</sup>

《ロマンス語言語学入門》

原題：

El llamado “Latin Vulgar” y las primeras diferenciaciones romances.

Breve introducción a la lingüística románica

Eugenio Coseriu

エウジェニオ・コセリウ著

## I. “俗”ラテン語

1. ロマンス諸語は、“ラテン語”からではなく、“俗ラテン語”または“民衆のラテン語”より派生した、とよく言われる。このように云うと、ローマ人の言語、形容詞のつかない“ラテン語”に対して、それとは多少異なる別の言語が対立していたようにみえることになる。実際に、19世紀のロマンス語学者は、俗ラテン語とはそのようなものであると想定していた、つまりローマ共和国またローマ帝国内で話されていた“別の言語”、言い換えれば、教養ある階層の言語、文学に使われるラテン語、また著述家のラテン語に対立する“民衆の”言語があるとしていた。そしてロマンス語学者は、下記の一連の事実をその基盤としていた：

---

<sup>1</sup> 訳注：Eugenio Coseriu がウルグアイのモンテビデオ国立大学に奉職していたときに、大学生用言語学の教科書としてタイプライターで打ち、謄写版で作った本で、発行年は1954年となっている。Copyrightの記述はない。この原著に、脚注はない。以後の脚注はすべて訳者がつけたもので、本来は“訳注”と付けるべきであるが、省略している。

Tübingen 大学の Kabatek 教授の Eugenio Coseriu Archiv(<http://www.coseriu.de/>)というサイトの“Publikationen von Eugenio Coseriu”によると、この著作は、B) VORLESUNGSNACHSCHRIFTEN に“Das sogenannte Vulgärlatein und die ersten Differenzierungen in der Romania”, in R. Kontzi (Hrsg.), Zur Entstehung der romanischen Sprachen, Darmstadt, 1978, S. 257-291; partielle deutsche Übersetzung von Nr. B 4, übers. von W. Oesterreicher.と記載されている。この講義用に作られ教科書は、1978年にドイツ語への部分訳がなされていることが分かる（ドイ

- a) 明らかにラテン語である単語が多く存在し、それらは、すべてのロマンス語に対応し、または少なくともロマンス諸語のどれかで見られるが、文学に使われるラテン語には見当たらない語が存在する；
- b) 同じラテン語の作家の作品の中にも、教養・文学的ラテン語(*sermo urbanus*), より自由で日常的ラテン語(*sermo cotidianus*), より民衆的で俗なラテン語(*sermo plebeius*, *sermo vulgaris*), または方言的で地域的なラテン語(*sermo rusticus*)が存在しているという事実がある；
- c) 古典時代以前の著作（例えば、Plauto）、碑文、また大衆向けの著作、またはキケロ(Cicerón)のような古典的著者による、ちょっとした文章（例えば、家族向けの手紙）などに見られる非古典的な単語とか形式が使われていること。

2. 俗ラテン語という概念を科学的に措定した最初の学者は、現代ロマンス語比較文法を確立した偉大なドイツのロマンス語学者である Frederico Diez である。Diez は、最初の比較文法（1835 年）とロマンス諸語の最初の語源辞書の著者であり、彼によって **Volkslatein** (*latín popular*, *latín del pueblo*: 民衆のラテン語)と呼ばれる語が、ロマンス諸語で使われるようになった、そしてこの俗ラテン語は、軍団の兵士、商人、入植民、行政官等によってローマ帝国時代に話されていた言語、つまり音声、形態、統辞、語彙面で古典ラテン語とは異なった言語である、とした。

事実、このような考え方を打ち立てるに際して、Diez は中世期より言われている伝統的な見方を採用し、ラテン語（所謂、古典時代の文学ラテン語）に対して俗っぽい言葉（ロマンス語）を対立させ、

この俗っぽい言葉は古典ラテン語の墮落したものである、または古典ラテン語の基礎になった古い形であると考えている。そしてこのような中世期の伝統的な見方は、紀元 4 世紀に既にあった昔からの見方から来ている。この 4 世紀に、ラテン語風に話すことと、俗っぽく話すこと (*latine*、*vulgo*)、また文学ラテン語と常用ラテン語とは明確にまた確然と異なるものであると初めて区別されたのである。

ロマン主義が“俗ラテン語”という概念を補強するに貢献することになった。それによって（言語学に関することばかりではなく）“民衆的であること”は、より正統であり、より純粹であり、またより意義深いと考える傾向が現われ、その結果として、“俗ラテン語”は、“真のラテン語”、“純正ラテン語”であり、形容詞が付かないラテン語であると考えられるようになり（例えば、Savj-Lopez の *Los orígenes neolatinos* <sup>2</sup>を参照）、文学上の多少とも“人工的”なラテン語に対立させるようになったのである。ロマンス諸語は、古典ラテン語の個性とはことなる別の固有性を有していた形容詞の付かないラテン語より派生したとするのである。

無論、これは疑問の余地のないことである。このことは“俗ラテン語”を別の言語であるとするときには、これはローマ帝国内の各属領で実際的に同じように話されている統一的で、多少とも同質的言語が存在したと考えることになるのである。それによってロマンス諸語の各形式を、この言語にまで遡ることが可能であろうとすることになる。**Hugo Schuchardt** の重要な著作“*Der Vokalismus des Vulgär-lateins*”, 1866-1869「俗ラテン語の母音構造」)によって“俗ラテン語”に具体的な固有性を付与することになった。しかしながら同書の中に、これに反するような言及が見られる。この時代は（印欧）比較文法において **Schleicher** の“系統樹”という概念、また“原言語” *Ursprachen* (初源的で起源となった言語：祖語) を再建するという考え方が支配的であった。この再建という考え方は **Schleicher**

---

<sup>2</sup> 書名は、以後イタリックで示す。

とは明らかに対立するが、少壮文法家の時代にも同じように精力的に追求されていた。それでロマンス諸語の一種の原言語として、“俗ラテン語”がそれに当たると考えられた。ロマンス言語学の泰斗 Wilhelm Meyer-Lübke は、(彼の語源辞書および文法書は Diez の著作に取って替わり、現在にいたるもロマンス言語学の基本書となっている) その著書 *Einführung in die romanische Sprachwissenschaft* (ロマンス言語学入門：ドイツ語版の 1 版、3 版よりの Américo Castro によるスペイン語訳あり) で、“俗ラテン語”の現実の諸相を考慮しながら、ロマンス諸語に基礎を置き“それを再建する”という仕事に取り掛かった。彼は多少とも同質な言語というものの存在があったとして研究を進めた、そして少なくともある一定期間はローマ帝国の属州間に継続的的交流があったので、帝国内のすべてのローマ化された地域で話されていた言語にある程度の一体性があったであろうと考えた。

このような考え方は、本質的には Diez のそれであり、“俗ラテン語”についての教本の基盤であり論拠であった。例えば C. H. Grandgent の *An Introduction to Vulgar Latin* (スペイン語訳あり、*Introducción al estudio del latín vulgar, Madrid, 1929*) とか、最近では、Carlo Battisti の *Avviamento allo studio del latino volgare* (Bari, 1949) などの著書がある。そして“俗ラテン語”を、‘ローマ帝国時代の中流階級によって話されていたラテン語’であると定義している。

3. 古典・文学ラテン語と俗・民衆ラテン語の一種の中間形とする考え方は、J. B. Hofmann の *Lateinische Umgangssprache* で記述されている。この著書では“日常の会話の言葉”に対して、教養的・書き言葉を対立させている。この日常の言葉とは、口頭で常用されている言語であり、“常用のラテン語”、つまり日常的に使われているものとは区別される。これは Spitzer によって研究され記述された現行のイタリア語 (“*Italienische Umgangssprache*”) また、Werner Beinhauer により研究された現行のスペイン語

（“Spanische Umgangssprache”）と同類である。この場合には地域的また社会的に異なる“言語”ではなく、文体、つまり文体において異なる（特に表現性または情緒性の程度によって異なる）“言語”、または文体-言語（*Stilsprachen*）というものが考察の対象となる。

別の見方が、K. Vossler の小著、*Neue Denkformen im Vulgär- latein* (俗ラテン語に於ける新しい思惟形式)の中に見える。この著書の中で古典・文学ラテン語に対して、年代的にまた社会的に異なる俗ラテン語だけではなく、世界観の違い、またそこで示される精神の違いによって区別される俗ラテン語というものを対立させている。

4. これらの研究によって、“俗ラテン語”という概念は修正されたり、意味が拡大されたり、また厳密さが縮小されたりすることになった、また同時に一般言語学の理論的发展（その多くはロマンス言語学の貢献による）は、**言語**という概念に根本的な修正を加えることになったり、また再建形、言語の歴史的継続性に関して新しい見方がもたらされた。

まず最初に、“言語”はもはや今日では、具体的で客観的なもの、話し手の外側にまた言語活動とは独立して存在している固有の生命を持つ有機体であるとは見られていない。ことば(*lenguaje*)とは、個人的な創造であり、継続的な運動である。そして、その唯一の具体的現実、個人の言語的活動という現実である。言語についての見方は、その基盤の上に抽象物として、また“等語線”(参照: *Pisani*)として構造化されるのである。ことばとして形成された“言語”、また等語線の体系の限界は、それゆえ慣例によるものであり、考察対象のことばを最大限に広く見たときの等語線に依存しているということになる。そうであるから、歴史的な契機にこだわり、ある等語線を最大限の範囲に取り、(文学的・民衆的ラテン語、また文語・

口語ラテン語、また教養的・常用的ラテン語等々を含む)すべてのラテン語を“言語”と捉えることができる、またこれに反して、ある等語線の範囲を狭く取ると、ラテン語の中に種々の“言語”を区別することもできる(それぞれの言語は、ある特定の等語線を示すのであるが、同時に同じ体系の属するほかの“言語”と共通する種々の等語線を示す)。“俗ラテン語”という見方をどこまで広げることができるかについては、それに課される慣習的な限界に依存している、しかしそれらの限界内に含まれる諸現象は、ラテン語の別の“形式”(例：所謂“古典ラテン語”)に属していることになる。

2番目としては、統一的言語また完全に同質的言語というようなものは今日では存在していないと考えられている。言語の統一性とは、その言語を構成する等語線を最大限の幅で考慮するときの所与のものとなる。しかしながらその言語の中にも常により小さな、しかし、より統一的な体系というものが形成されている。言語の中に違いがないような言語というものは存在しない。印欧共通祖語というものは、Meilletによると、再建された“諸言語”の原型(*prototipo*)ではなく、社会的に異なっている諸方言の総体である。

第三として、言語的再建形の結果としての形式は、歴史的に具体的に同時代的な現象であるとは考えられていない、そして再建された“言語”とは、ある時期のある特定の共同体によって話されている言語の全体性と同じものであるとすることはできない。再建形とは、それ自身が抽象形であり、考察されている継続的諸形式で使われている諸形式を含んでいるのすぎず、そして諸形式を説明しているのである。それで、例えばロマンス諸語を基礎とした時には、ラテン語の *octo* を再建することは出来ず、*oct-* (語末の母音は、*e* であるかまたは、*u* である)を再建できるにすぎない、また例えば *septem* について考えると、再建形としては *septe* という形式に到達できるにすぎない。更に、どのような方法で再建された再建形式も、どれも歴史的に同時代的なものであると考えることができる。ある形式は共通であった一方で、別の形式は既に区別されていたものもある。

ある形式と別の形式の違いの間には数世紀という距離があるものもある。それで例えば *flores* “花” という形式は西方のロマンス諸語を基礎にして再建され、スペイン語では今日までも保持されている。*septem* は *septe* 以前の形式である、つまり *septe* がいまだ *septem* または *septē*(鼻母音)であったときにすでにこのような形であった。一方、ある言語では古い形式が保存されることもあるが、別の言語では同じ形式が進化し続けることもある、それで例として、*multo* “多くの” は（ポルトガル語、古カスティーリャ語では共通の形式であるが、ポルトガル語では本質的に同じ形式のままであるが、カスティーリャ語では *mucho* という形式になってしまっている。再建された形式は、それゆえ同時代の体系を形成しているものではなく、時間をはずした体系を形成しているといえる。しかし再建形は、それぞれ対応する現実の形式がある歴史の瞬間を通過してきているので、同時に現実的な形式であるといえる。さらに、再建形式は、再建せんとする言語の全体性を表しているものではなく、再建形式の内のあるものは、考察されたある時期まで保存されていたものを表しているのである。それで再建された言語においては、既にまったく普通の、また常用である別の形式が存在していたという可能性がある。それでなんらの痕跡を残すことなく消失してしまった形式というものもある、例えば現代スペイン語には、*exir*<sup>3</sup>とか *remanir*<sup>4</sup>という動詞は保存されていないが、これらの動詞は、古スペイン語では常用の語であった。例えば現行のロマンス諸語だけを基礎として、もしルーマニア語とか、他の例えば地名に残されている形式を考慮しないとすると、ラテン語の曲用の属格 (*genitivo desinencial latino*) を再建することは出来ないであろう。属格は無論ラテン語の歴史のどの時代においても、また所謂 “俗” ラテン語においてはまったく普通のものであり、常用されていたものである。それで再建形は、

---

<sup>3</sup> *exir*: *salir* “出発する” p.235

<sup>4</sup> *remanir*: *quedar* “留まる” p.547

出発点として適用される諸要素によって変わってしまうのである。

最後に付け加えるべきは、言語の歴史とは、統一的総体の歴史としてではなく、言語そのものを構成する形式・単語の歴史全体と考えるべきである。さらに音声的また文法的現象は、どの地域においても一般的で並存的なものとは考えられない。これは言語地理学によって明らかにされているように、これらの諸現象は、ある中心地から、(最終的分析では) 創造的または革新的個人が源となって単語に拡散している。それである地域の形式と単語だけに注視してみると、古い形式がまだ保持されている場所もあれば、別のところでは革新形式がすでに拡散している場所もあることに気づくことができる。このような意味で“俗ラテン語”という考え方を解釈し、修正を加えたのは、イタリアの言語学者の **Matteo Bartoli** (*Per la storia del latino volgare*, Turin, 1927) である。彼は、2つの“言語”(“古典ラテン語”と“俗ラテン語”)の間の区別、また文学言語と口語言語の間に常に存在している違いについて論ずるのではなく、より古い形式とより新しい形式、保存的形式と革新的形式の違いというものを論じている。文学言語と口語言語というものは、太古の時代から存在していたものであり、文学言語とはつまり、選択された形式とか単語、または話されている言葉の中の無限の多様性を統一し、また固定するものであろう。実際に、古ラテン語で普通に使われ、またロマンス語の時代まで使われていた現象・形式が、文学ラテン語では決して使われていないものもある。

5. 古典ラテン語と俗ラテン語の違いは、年代と、それぞれの形式が使用されていた時期にもとづく違いである。初源の時期には(話されていた)“生きた”形式によって形成されていた古典ラテン語には、多くの保守的な語、(既に話し言葉から排除されてた)“死語”形式などを含んでいたであろう。一方“俗ラテン語”には多くの革新形を含んでいたと思われる。絶対的視点からすると、*pavor* “恐れ”というような語は、*metus* “恐れ”

よりも一般性が劣っていたとか、また勝っていたということではなく、この語が使用されるときに、単にこの語はより新しいということであつたにすぎない。*metus* は、イベリア半島に拡散した (esp. *miedo*) 時期にはまったく“民衆的”であつたということである。しかしながらガリアとかイタリアではこの語は、*pavor* と取って替わつた (*peur, paura*)。 *pulcher* (美しい) という語は、ある時期に話されていた“民衆的”で“生きた”ものであつた、しかしこの語はすぐに“死んだ”、つまり話し言葉から排除された。即ちこの語は、書き言葉にのみ保存され、常用の話し言葉では *formosus* に替つた。この後者の語はイベリア半島またダキア<sup>5</sup> (Dacia) で現在も使用されている (esp. *hermoso, rum. frumos*) ,更にこの語はガリア、イタリアではより新しい語、*bellus*(fr. *beau, it. bello*)に取って替わられた。(ロマンス諸語に連綿と引き継がれているという意味での)“俗ラテン語”であるとなみなされる形式の内にも、顕著な年代的な違いというものがある。ある語は他の語よりも新しいものである。すなわち、*formosus* と *bellus* という形式は、同じ名称としての俗ラテン語に所属していない。民衆ラテン語の *formosus* と *bellus* は、古典ラテン語の *pulcher* に対応しているとは言えず、書き言葉では死語となった形式である *pulcher* が保存されている一方で、常

---

<sup>5</sup> ダキア：現在のルーマニアに該当する地域：紀元前4世紀頃に、ケルト人によって侵入を受けた。紀元前70年に、部族連合の首長ブレビスタがダキアを統一し、ローマ帝国に抵抗を続けた。101年、ローマ帝国の皇帝トラヤヌスが、ダキアを征服するためにダキア戦争を始めた。106年、ダキアの王デケバルス(デチェバル)が自殺し、トラヤヌス帝支配下のローマ帝国がダキアを征服した。以後、多くのローマ市民がダキア地方に移住し、ダキアのローマ化が進んだ。

271年、東ゴート族とサルマティア族のダキアへの侵攻が激しくなり、それに耐えかねたローマ帝国の軍団がダキアから撤退した。その後、ダキアの地には西ゴート族、フン族、ブルガール人、アヴァール人、マジャール人など様々な民族が侵入した。

用的に話し言葉では *formosus* と言い、ある地域ではこれが排除されより新しい語形 *bellus* に取って替わられる、と言えるのである。このことは、考察する時期によって、常用の口語ラテン語は、文学ラテン語より離れるようになるということである。常用ラテン語は、ローマ帝国時代の初期から共和国時代の最後まで進展しながら保持されたが、同時に少しずつ異なったものとなりながら全体的な等語線の数を減らしてゆく。ラテン語は、（他の印欧諸語と比較して）紀元後 1 世紀までは、かなり古い段階にあったが、その後急速に発展し、異化が始まることになるので、ある時期（例えば紀元前 1 世紀に）には文学ラテン語から常用のラテン語を分ける等語線は、小さなものであったが、重要なものであった、これに反して、ラテン語の 2 形式が共通であった等語線というものがあった。それに続く時期（紀元 III~IV 世紀）に、違いが明確になったある等語線は、ほかの等語線よりも重要になり、また数が多くなるようである。それゆえ、異なる 2 つの“言語”、つまり（書かれた、教養的な）文学ラテン語と（話されている）常用ラテン語について論ずることができるようになる。一方で“常用のラテン語”だけを考慮すると、4 世紀また 6 世紀の始めまでこの常用ラテン語を形成していた一般的等語線は、体系というものをより広い意味で解したときに多少ともお互いに異なっている体系を構成していた等語線（常用のラテン語そのものが唯一の言語であるとすることもできる）よりも数が多く、より重要なものとなった。それに続く時代（紀元 VI~VII 世紀）には、この体系は内的にはかなり異なるものとなっていた（つまりこの体系を構成する等語線の数は少なくなり、地域的な変種に分かれた等語線よりも重要さが小さくなるのである）。それで大体系内でお互いに少しずつ異なりことになり、また特有の固有性を獲得するようになった種々の小体系を“言語（複数）”と考えるようになる、つまりこれが“ロマン諸語”またはネオ・ラテン語と呼ばれるよう

になる体系である。

さて、常用・口語ラテン語が、ほとんど文学ラテン語の合致していた時期に関して言えば、このときに2つの“言語”についてい云々するというのではなく、すべての言語で起きているように、さまざまに異なった唯一の言語について云々するということになる。つまり現実に対立しているのは、常用・口語ラテン語と文学・書記ラテン語ではなく、むしろ**進展しているラテン語**、つまり異化への持続的運動の中にあるラテン語が、**法規化されたラテン語**<sup>6</sup>、つまり紀元前1世紀に進展を実質的に中止した古典ラテン語と対立するのである。

6. “俗ラテン語”という概念についてのすべての修正は、言語学理論と方法論でのさまざまな変化によって、“外側から”きたものである。しかしまたこれは、この概念そのものの分析、またロマンス諸語の比較文法に適用するときに“内側から”出てきた修正と合致するものである。

この第2の視点から、次のような色々な要素を考慮しなければならない：

a) イタリアにおける方言的差異：

この方言的差異とは、ラテン語そのもの内での方言的差異ということであり、一方ではラテン語使用地域でのラテン語と征服地のラテン語との間での方言的差異である。つまりラツィオ<sup>7</sup> (またローマ)のラテン語と、イタリア諸方言また色々な出自の他の諸言語の上にあるとされるラテン語の間の差異などがある。このことによっ

---

<sup>6</sup> latín codificado

<sup>7</sup> Lazio: ラツィオ州、ローマがある州。この地方で使われていたラテン語が後に、ローマ帝国の標準語となる。ローマ帝国の拡大にともない、各属州において使用されるようになり、その後、各地で独自の言語変化してロマンス諸語となる。

て、あるものを同化したり、また排除したりすることとなる、しかしながらそれらのあるものから形式とか単語を採用したりすることがある。それ故、一つは、歴史的に限定できる基層というものが存在しないラテン語であり、他の一つは、歴史時代に知られていた基層を取り込んだラテン語ということになる。しかし次のことを考慮しておかなければならない、つまり本来的なラテン語とは実質的にローマの言語であり、この地域ではかなり異なった（ファリスコ(falisco)<sup>8</sup>のような同じ語族の）方言と共存していた。また *guerras sociales*<sup>9</sup> (90-89 a.c.)までイタリアの広範囲（南イタリア）では、言語的視点よりすると全般にオスク語(Osco<sup>10</sup>)が支配的であったのである。ラテン語の初期の碑文によると、ローマのラテン語と、別の“ラテン語の”（または“ラテン・ファリスコ語の”）方言 形式、つまりラテン語とイタリック方言との間での持続的動揺をみることができる。またいろいろな場所で顕著な方言的階層があった（例えば、Fíbula prenestina の碑文を参照）。Guerras sociales 後になってはじめて、碑文に使われるラテン語がより統一的で同質的なものとなったのである。

---

<sup>8</sup> ファリスコ語（古代イタリアでラテン語使用地域の北部にあり、ファリスコ人が住んでいたとされる地域で用いられていた印欧語系の言語）

<sup>9</sup> *guerras sociales*:

A principios del siglo I a.C. la República se verá envuelta en las llamadas Guerras Sociales. La divisiones internas enfrentaron a los partidos de los optimates y los demócratas encabezados por Sila y Mario respectivamente. El gobierno republicano se vera agitado por intereses de ambos partidos y por las influencias de personajes ambiciosos tanto a nivel político como militar que hará que el Senado vaya cediendo poder en favor de esos intereses. Toda esta situación tendrá gran influencia en la producción monetaria que, a lo largo de ese siglo perdió la estabilidad del siglo anterior, produciéndose fenómenos importantes como el cese en la emisión del bronce en la ceca de Roma junto a una intensificación en la producción de denarios aumentando su área de circulación, sobre todo durante las Guerras Sociales y Civiles causados por el fuerte incremento en los gastos militares y al inevitable aumento de los precios.

<sup>10</sup> osco

## b) イタリア以外から課されたラテン語の特殊形式（および北イタリアで課された形式）

ラテン語は共通語として各属州(provincias)に課され、ラテン語地域の他の方言と、またイタリアック方言と混合することはなかった(しかしながら、植民した人の出身地によって方言的要素がラテン語に混ざりこむことはあった)。これらについての論証にもとづき、ある学者(複数)は、イタリアとローマ化された他の国の間に明確な区分をすべきであるとしている。それで Mohl は、イタリアに関する“民衆的”ラテン語について云々する一方で、ローマ化された他の国については、イタリアのそれよりも教養的であるラテン語、行政官とか兵士達のラテン語というような“行政的”ラテン語について云々できるであろう、としている。多分この区別は Mohl が望んでいるように明確なものではない。しかしながら一般的により同質的である他のロマンス諸語と比較してみると、イタリア諸方言での顕著な種々性というものが存在しているので、少なくとも理屈があることになる。しかしながら重要性においてそれほど小さいものではないが、別の視点からしてイタリアはローマ人およびラテン人によってローマ化されたが、他の属領は大部分がローマ化されたイタリア系の人によってローマ化されたという区別をすることが出来るであろう。

## c) 種々の植民地間での年代的違い

事実、ローマ帝国時代のロマニア(Romania<sup>11</sup>)では既にある種の言語的統一というものがあつたであろう(つまりこの時代に話されていた口語ラテン語をロマンス諸語の基盤になったと考え、これは“俗ラテン語”と同一のものであるとする見方を許容するものであり、すくなくともこの見方を正当化するものである)、とすることができるかも知れないが、次のことを考慮しなければならない。ローマに

---

<sup>11</sup> Romania: ロマニア：ラテン語より派生したロマンス語が話されていた地域全域。

征服された属領に拡散した最初のラテン語は、それぞれ地域では同じであった。この征服された地域の初期のラテン語は、いまだ文学ラテン語以前のものであり、また統一されてはいなかったものであり、また文化的に言えば民衆的なものであった、例えばサルディニア島<sup>12</sup>のラテン語である。他の属領には、より統一され、またより洗練されたラテン語が広がる、例えばガリアであり、またイベリア半島に広がることになる。また他では最終的に、すでに別々と異化していたラテン語が広がったところ、ダキアがある。共和国時代の最後のころ、また帝国時代の初期には、行政および軍事で使われるラテン語は、例えてみればアメリカ（現在の USA）とか大英帝国に拡散した英語ほどには異なっていなかった、またはアメリカに拡散したスペイン語ほどことなっていなかったと考えることができるであろう。しかしローマ化は言語統一が比較的あった時代に遂行されたばかりではなく、ほぼ7世紀間にわたっておこなわれたのである。つまり紀元前272年（南イタリアの征服）から紀元4世紀（アフリカの完全なローマ化<sup>13</sup>）までの間に行われたのである、しかしギリシャと東方（オリエント）は除外される。Bartoli による地域規範、特に隔離地域と連続地域の規範というものが、この地域による分類に適用される。それで、例えば隔離地域の規範というものを考えたときには、大変に古い時代に征服された地域であり、現在まで古形が保存されているが、それらの古形は他の地域では消失

---

<sup>12</sup> Cerdeña : サルディニア島で使われているラテン語＝サルディニア語 (sardo) : El sardo (sardu en lengua sarda) es una lengua neolatina hablada en la isla y Región autónoma de Cerdeña. Clasificada como lengua indoeuropea románica y, en particular, como lengua neolatina occidental, está constituida por un conjunto de variantes dialectales y es considerada como la más conservadora de las lenguas derivadas del latín. Es hablada en toda la isla, con excepción de la ciudad de Alguer (en donde hablan un catalán arcaico), y en las islas menores circundantes, salvo en San Pietro y parte de San Antíoco (donde persiste el dialecto ligur tabarquino).

<sup>13</sup> romanizacion: proceso de transculturización por el que los pueblos conquistados por el Imperio Romano fueron adquiriendo las instituciones, las costumbres y, con todos ellos, la lengua de los dominadores.

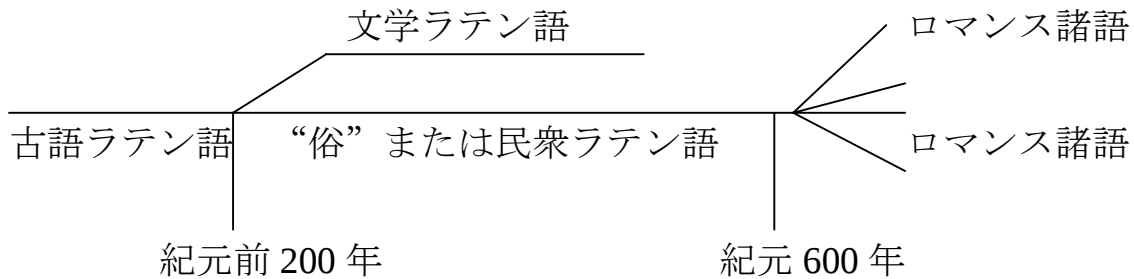
してしまっているような地域、サルディニアがある。同じ規範を適用できる別の地域として、ダキアがある、しかしルーマニア語で見られる保守的現象は、サルディニアほどの古形を保存していない。その理由は、ルーマニアはサルディニアより後に植民地化されたからである。ダキアに対して連続地域の規範を適用することができる、しかしながらこの地域は、ローマに征服された最後の属領であるので、植民地化された（紀元 2 世紀）時期のラテン語形式を拡散させた。しかしダキアはすぐに他のローマ属領<sup>14</sup>とは隔離されたので、ルーマニア語では、イタリアで出現し紀元 3 世紀以後に西方のローマ属領に拡散した新しい形式以前の（古い）形式を保存しているのである。

**d) ラテン語は決して完全に統一的なものではなかったという事実。** 古語ラテン語は、むしろ多くの変異形をもつ言語として示すことができる。そしていわゆる古典ラテン語で見られる相対的同質性とは、幾人かの作家によって比較的短い期間に固定化され、規則化され統一された文学ラテン語について云々しているという事実によるのである。強力に中央集権的な国家の公用語であったラテン語で完全に規範的な語形式が統一化また同質化へ向かう傾向というものは、学校によって、またより教養ある階級の人によって使われている言葉によって達せられたのである。しかしこの傾向というものは、通常の話し言葉と、教養人および行政官の言葉と合致することはなかった。そして古語ラテン語の中の異型と異質性の大部分は、話し言葉、特に教養の劣る人また粗野な雰囲気で使われる話し言葉で保存された。このような意味で、Grandgent は次のように考える：“俗”ラテン語は中間的な階級の人のことばであり、彼の考えでは古語ラテン語のまま持続していた（一方では社会的また文化的な上流階級によって書かれ、また話されていた“文学的”言語はこの古語ラテン語とは分離していた）、のであり、これが最終的にはロマ

---

<sup>14</sup> romanidad : ローマ的であること。

ンス諸語を形成することになるのである。その時期は、種々の地域の話し手の間での相互理解にとってのローマ帝国の言語的統一性が壊れたときである。以上のことは、次のような図でその状況を示すことができ、受け入れられるであろう。



**e) 文学的ラテン語それ自体も、共時的また通時的意味でも、完全に統一的なものではなかったという事実。**

事実、同時代の著述家の中にも文体的また文法的な差異というものがあつた。また限定的ではあるが“内的”完成へ向かう進展、また文学で使われるラテン語自身で見られるように、常用の話し言葉で使われる形式を採用するということがあつた。さらに“古典”ラテン語を、文化・社会的上流社会の人によって書かれ、また話されていた言語であると考えてみても、書かれた語形式と話された語形式の間には差異があつたはずであると認めなければならない。常用のまた通俗的話し言葉が取り入れられ、もっとも規範的な“古典的”著述家の若干厳肅性が劣る著作（例：キケロの手紙）にそれらの語形式が使われている。“民衆的”ことばの言いまわし、表現、単語等は、いわゆる古典ラテン語のどこでも出会う、このことは教養人のラテン語と非教養人のラテン語の間にはずっと深淵などはなかつたからである。それで例えばホラチウス（Horacio<sup>15</sup>）の言葉にも“民

<sup>15</sup> クィントゥス・ホラティウス・フラックス（Quintus Horatius Flaccus, 紀元前 65 年 - 紀元前 8 年）は、古代ローマ時代の南イタリアの詩人。一般には単にホラティウスと呼ばれる。アウグストゥスと同時代に生きたラテン文学黄金期の詩人で、ウェルギリウスとならんで評価される。作品に『風刺詩集』など。

衆的”要素が指摘されている（A. Ernout）。

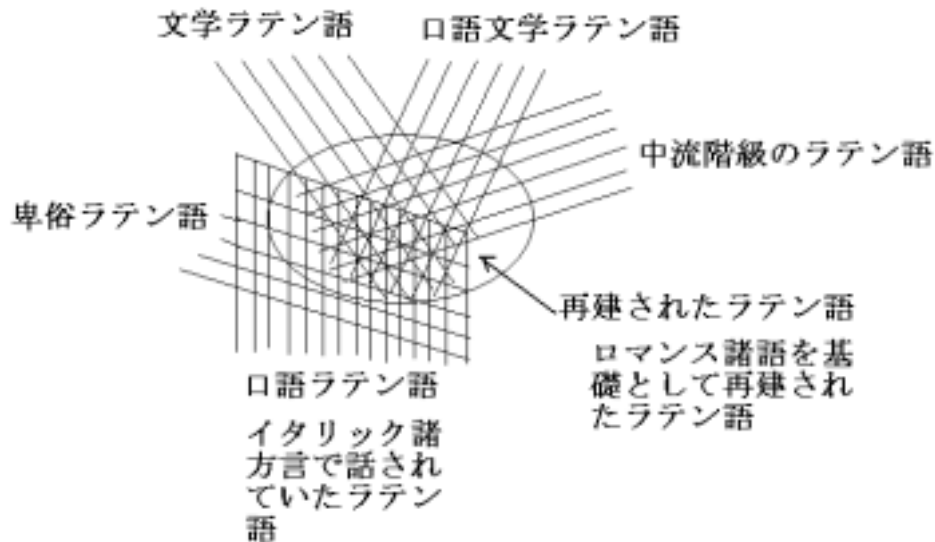
f) いわゆる“俗”ラテン語の長い歴史における新しい語形式の普及（既出の例を参照のこと：*metus-pavor, pulcher-formosus-bellus*<sup>16</sup>）。

これまで論じ、明らかにしたことによって、“俗”ラテン語は“古典”ラテン語とは常に異なる言語であり、古典ラテン語に対しては、“別の”ローマ人の言語であり、また統一的で同質的な言語、つまり“別の”ラテン語であると考えた伝統的な見方は、打ち破られることになる。Meyer-Lübke が研究している資料、また Grandgent（また Bouciez の *Éléments de linguistique romane*）が取り扱っていることを考慮すると、俗ラテン語とは、純正の“言語体系”ではなく、むしろ地域的にまた年代的に異なる語形式の総体として捉えていることがわかる。

7. 事実、“俗”ラテン語という概念を生み出す際に出会う困難さは、（共時的および通時的な概念である）“言語”という概念、また語の再建という問題をどのように捉えるのかを考えるとときに çık 出すことになる。純粹に言語学的視点よりすると、すべての“言語”は、習慣的に限定された等語線で区切られた体系であり、その体系内で、空間的、時間的またその言語を使用する社会によって異なる小体系（複数）というものを区別することが可能である。

ラテン語の歴史のどの時代においても、一連の小さな体系のすべてにおいてこれとは異なる、“共通ラテン語”と呼ぶことのできる範囲の広い体系というものを考えることができる。つまり、文字に書かれた文学的ラテン語、話される文学的ラテン語、中流階級のラテン語、卑俗ラテン語、イタリック方言を使う人によって話されたラテン語、等々（参照：Bruno Migliorini による“*Lingua letteraria e lingua d'uso*”, *Lingua e cultura*, Roma, 1948 に所収）。

<sup>16</sup> *metus-pavor* “恐れ”、*pulcher-formosus-bellus* “美しい”



これらの諸形式の各形式では、それ以外のすべての言語、またはそのうちのある言語と、一連の共通の等語線を示すことになる。そうすると、中流階級のラテン語を“俗ラテン語”と呼ぶことができるのであろうか。慣習というものを単純に考えればそうとも呼ぶことができる、一方ではこの中流階級のラテン語は、他のラテン語と、また古典ラテン語と共通の多くの等語線を共有している、そしてこの中流階級のラテン語は、卑俗語、イタリック語の要素を持続して保持し、“文学的”要素も多く保持しているので、(ルーマニア語を除いて)上記の諸語は、その言語史の全過程で教養あるラテン語の要素を採用し続けている、ということを考慮しておかなければならない。さらにある独特の現象を含む“俗”ラテン語について云々することはできず、文学的形式、民衆的形式、または常用的、卑俗的形式というもののついて云々できるにすぎない。

8. それでもし“俗”ラテン語は、ロマンス諸語を基礎として再建された言語であるとしようとしても、それぞれの等語線のすべてにおいて、歴史的に同じ瞬間にまで遡ることはできず、一方ある特

定の歴史的な瞬間の実際の言語は、ロマンス語では持続していない要素を含んでいるので、現実の歴史的な存在としての言語というものに到達することはできない。さらに各形式はそれぞれ歴史を持ち、時間と空間での境界があるという事実があり、これによって“俗ラテン語”を統一的で等質的言語であるとしてこれを再建するにいたることはできない。むしろ文学的ラテン語にだけ存在し、ロマンス諸語にその持続形式がなく、それゆえ“俗ラテン語”に帰することができない形式というものがある、例えば、*crus*, *pulcher*, *diu*, *aequor*, *cruor*, *iecur*<sup>17</sup>等々の語がある、また“俗ラテン語”に帰することができる形式、例えば *auricula*, *cantare*, *mesa*, *mesura*<sup>18</sup>という形式がある、これらは俗ラテン語の形式であり、対応する“古典”ラテン語の形式は、*auris*, *canere*, *mensa*, *mensura*<sup>19</sup>であり、ロマンス諸語で持続して使われている。しかしながら、*sidus*, *metus*<sup>20</sup>は古典ラテン語であり、*stella*, *pavor*<sup>21</sup>は“俗語”であった、その理由は *sidus* はイタリアの方言に保存されていて、*metus* はスペイン語で保存されているからである、としか言えない。また音声的側面のような体系的側面で、統一的体系を再建することはできない。事実、大部分のロマンス諸語とは異なり、ルーマニア語は、*ŭ*を *u* として保持し、サルディニア語では *ŭ*とか *i*を保存している（他のロマンス諸語ではこれらの母音は、閉音の *o*, *e* となった）ので、“俗ラテン語”には1つではなく、3つの母音体系を再建しなければならない、ということになる。一つはルーマニア語に、もう一つはサルディニア語に、また第3の母音体系は他のロマンス諸語に対応する（例：rum. *siccus*<sup>22</sup> > *sec*, しかし *gulu* > *gură*, *furca*<sup>23</sup> > *furcă*, また sard. *filu*, *pira*, *gula*,

<sup>17</sup> *crus* 脚, *pulcher* 美しい, *diu* 日中に, *aequor* 平原, *cruor* 血, *iecur*

<sup>18</sup> *auricula* 小さい耳, *cantare* 歌う, *mesa* 机, *mesura*

<sup>19</sup> *auris* 耳, *canere* 歌う, *mensa* 机, *mensura* 計測

<sup>20</sup> *sidus* 星, *metus* 恐怖

<sup>21</sup> *stella* 星, *pavor* 恐怖

<sup>22</sup> *siccus* 乾いた

<sup>23</sup> *furca* 熊手

*furca*)。同じように、(ローマ帝国時代にずっと常用されたラテン語と考えられる)“俗ラテン語”は子音グループ *ke, ki* の軟口蓋音を口蓋音化したとは言えない、なぜならこのような口蓋音化はレグドール・サルディニア語(*sardo legudorés*)では起らず、またダルマチア地方では一部でのみ起きていたからである。それで、語末の *s* に関して言えば、ロマニアの一部(イタリア、ダキア)ではこれを完全になくし、一方他の地域(ガリア、イベリア)ではこれを保持し、また古形ラテン語時代より語尾脱落させていた位置にそれを再度取り込んだところもある。文法体系に関しては、これは不安定であるといえる。それで例えば大部分のロマンス諸語では、*habeo*<sup>24</sup> を使う迂説法的未来形であるが、一方ルーマニア語では *volo*<sup>25</sup> を使って未来形を示している。またサルディニア語(*sardo*)では冠詞として *ipse*<sup>26</sup> より派生したものを使うが、他のすべてのロマンス語では指示詞 *ille*<sup>27</sup> より派生した冠詞を使っている。“俗ラテン語”に関して言えば、迂説法への傾向があると言える、つまりこの傾向とは、冠詞を介して語尾が決まるということである。それで“俗ラテン語”は、同質的形式、異質的形式によって形成された抽象物であるようである。俗ラテン語は、同質的傾向にまた単なる異質的形式によって特徴付けられている。これに反して、“俗ラテン語”は、すべてのロマンス諸語にもとづいて再建された統一的体系であると言い募ろうとするとしても、連続性を欠いてロマンス諸語に保持されている多くの要素を残しているので、この統一的体系という概念は、より抽象的なものとなる。

一方では、*mare, terra, campus, fortis, portare, ligare, iocare, facere, octo, decem*<sup>28</sup>(他の数百の語)等の語は、“俗”形式とは呼べない。そ

---

<sup>24</sup> *habeo*: 保つ、

<sup>25</sup> *volo*: 欲する

<sup>26</sup> *ipse*: 自ら

<sup>27</sup> *ille*: あの、彼の

<sup>28</sup> *mare* 海, *terra* 土地, *campus* 広場、平地, *fortis* 強い, *portare* 運ぶ, *ligare* 結ぶ, *iocare*,

の理由は、これらの語は、俗ラテン語とも言えるが、“古典”ラテン語と呼ぶ言語に所属していること、また時間を遡るとこれらの語の数は多くなり、実際に古典ラテン語のすべての語（純粹に文学的に形成されたものは除いて）は、ある時期には民衆的なものであったからである。

9. それで“俗ラテン語”は、現実の歴史的言語ではなく、ロマンス諸語に“引き継がれている”ラテン語要素（それぞれの時代にロマンス諸語によって“獲得”されたラテン語要素というものは除く：Ballyによる伝達された言葉(langage transmis)と獲得された言葉(langage acquis)の区別を参照）を説明するための抽象物にしかすぎない、という結論に到ることになる。これは、“古典ラテン語”という概念よりも幅の広い概念である、というのは俗ラテン語は、古典ラテン語のかかなりの部分を含んでおり、また文学ラテン語には決して属していない要素をも含んでいる。また俗ラテン語は時代によっては、より幅の広い概念として使われている、それでこれには、古典ラテン語以前の形式を含んでいて、より近代的形式と同じように、古典ラテン語には浸透しなかったものもある。すなわち、大いに違いがあったラテン語ということになる。実際に“古典ラテン語”と呼ばれる言葉は、大部分が非常に“標準的”言語であると捉えることができ、一方で、“俗ラテン語”の中には、地域的、社会的、文体的に顕著な差異を区別できる。そしてこれらの3つのタイプのなかにも年代的な差異というものがあつた。

10. “俗ラテン語”とローマ帝国の共通言語であるラテン語は、どのような意味で同定することができるのであろうか。帝国時代に“生きていた”（話されていた）形式の総体にかかわる、という意味で考えるべきである。同時代的なものとは考えられない形式とい

うものもあるし、その内のあるものは大変に古くからある形式であったりして、古語ラテン語(*latín arcaico*)に属していて、古典時代また古典期後にも保持されていたものもある。また別の形式は、後になって出現するものもある。これらの諸形式は“普遍的”、つまり帝国時代のある時期に話されていたラテン語に属していたものであると考えるのは正確ではない。それらの諸形式の多くは帝国のある地域にのみ使われていたものであり、別の形式はある限られた社会的・文化的な階層に属していたものであったのかもしれない。このことを考慮すると、少なくともロマンス諸語の異化を説明できるし、それらの諸語の特徴付けるのに役立つことになる。しかしながら、等語線のあるものは、地域的・社会的な相互理解を確保し、帝国時代に話されていたすべてのラテン語に帰属するものであった。等語線には、今日まですべてのロマンス諸語を結び付けているようなものもあれば、また異化、革新などによって太古または近年に壊れたような等語線というものがある。等語線の数は帝国時代の初期には多かったが、直ぐにその後には、その数を減じることになった。保存と革新との中間点を見出そうとすると、古典ラテン語時代のものとかかなり異なる等語線体系というものが、どこにあるかを探さなくてはならないであろう。しかしながら 3～4 世紀にはまだ統一的であったといえる。同じように、社会的視点から、より広範囲の統一的体系とは中間階級にあり、とするのは正当であり、彼等の言葉は、貴族階級の言葉（より保守的、より教養的、文体的にはより慎重な言葉遣い）と庶民・農民の言葉の間の中間的なものを表していた。このような意味で、“俗ラテン語”とは中間階級によって話されていたラテン語であると定義すべきであると云われることがある。しかしながら、この場合の中間階級のラテン語とは、もっとも広範囲な統一的体系であり、一方ではロマンス諸語にはこの中間階級の体系とは別の形式（ローマ帝国時代の共通ラテン語という視点よりすると“文化的”であり“粗野な”形式）が存続していたことを考慮しなければならないし、また（社会的、地域的な）小体系に属する

形式、また大体系に属するとされる形式（すべての社会的階層に属する、言い換えれば、中間階級と同時に貴族階層に属する、または中間階級と庶民階級に属する）というものを区別することになる。このような捉え方は、“俗ラテン語”の特徴付けと記述に際して考慮しなければならない。等語線が示されても、それらすべてが同じ社会的、地域的、文体的範囲内には、ないということを頭に入れておかなければならない。

1 1. “俗ラテン語”（または“民衆ラテン語”）という名称は、明らかに、最近の研究また考え方という観点よりすると誤解されやすい表現であり、それ自身で決定的な特徴というものを示していない。つまりもっぱら“卑俗な”ラテン語というものを指すものではない。この語は、われわれが限定せんとしている複雑な概念についての慣習的な名称として、伝統に対する譲歩として保存されているにすぎない。

1 2. 古典形式よりも、より民衆的、より活力溢れる、またより近年の諸形式をどのようにして知ることが出来るのか、ということが問題となる、つまりこれらの諸形式が所謂“俗ラテン語”と呼ぶものを形成しているのである。われわれが素描した概念を考慮に入れると、（古典ラテン語の文献に対して）“俗ラテン語”で書かれた文献が存在すると考えるのは不合理である。一方、書かれた言葉は、常に注意深いものであり、話し言葉より“洗練された”ものとして表される。洗練されていない人士でも常に何らかのモデル（規範）というものに適応しようとする。帝国時代のローマ人にとって、最善のモデルは無論、“古典”ラテン語であり、キケロ<sup>29</sup>風のラテン語である。唯一期待できるのは、“俗的”と呼べる形式をテキストの

---

<sup>29</sup> Cicéron: Marcus Tullius Cicero (紀元前 106～紀元前 43 年)：ローマの政治家、雄弁家、哲学者、著書に「国家論」、「友情論」などあり。

中にバラバラな箇所で見つけるか、またはそれについて言及している箇所を見つけるかである。作家とか著作家の教養によって、また彼等の書いたテキストの特性によって、俗語的形式は少ないこともあれば多いこともある。ある場合には、制限付きではあるが“俗的なテキスト”というタイトルを付けてもいいような多くの俗的形式が使われているものもある。それらは、“俗ラテン語”と題されている多くの選集とか、また模範文集とかに集められている。

“俗的”諸形式が見られる主要な源泉としては、次のようなものがある：

**a) 碑文 (inscripciones)。**

碑文の中では、文学的言語とは異なる言葉使いが用いられていて、当時に常用されていた言葉に近いものである。それで特に、石工が刻んだ語形式の変動と間違いなどが大変に重要なものである。単なる間違いというものを除外すると、多くは話し言葉をしばしば取り入れている。特に自然発生的な特性のものとしては、ポンペイの壁画に残る碑文がある。

**b) 文法家達の記述 (gramáticos)**

文法家はしばしば、民衆的、方言的等々の“正確ではない”形式を指摘している。そして、古典時代に固定された綴字を反映しているものとは異なる、当時通用していた発音について記述している。

**c) 中世の免許状、文書 (diplomas y documentos medievales)**

キケロ風の言語についての知識が減ずるに従い、通常使われている語形式が古典形式に取って替わることになる。

**d) 手書き文書の写本にある間違い (errores en las copias de manuscritos)**

碑文の場合と同じように、教養のない、またあやふやな教養しかない写字生が、本来再現しなければならない古典語よりも自分により馴染みのある発音とか語形式を反映する変形形式を書き残すことがあった。

**d) 古語をつかった文書 (escritores arcaicos)**

古典ラテン語が固定化される前の著作物の中に、古典語が拒絶した、しかしながら話し言葉、民衆の言葉に保存されていた形式に出会うことがある。それらの形式は、しばしばロマンス諸語でも使われていることもある。例えば、Plauto<sup>30</sup>の著作に、古典ラテン語の *loqui* の代わりに、*narrare*、*fabulari*(‘話す’)が使われている。

#### f) 古典時代の作家の残した小品 (*Ciertas obras menores de autores clásicas*)

“俗語的”(通常の、口語の)形式が、純粹に古典期の作家の気楽な文体で書かれた小品に現われることがある、例えば家族宛てのキケロ<sup>31</sup>の手紙などに散見される。

#### g) キリスト教に関する文書(*escritores cristianos*)

San Agustín などの非常に教養のある人が著したものもあるが、古典語のモデルとは違った言葉使いを採用し、伝えんとする大衆にも分かり易いように、当時常用されていた言葉を使っている。例えば、Tertuliano<sup>32</sup>, Lactancio<sup>33</sup>, Comodiano<sup>34</sup>などの著作がある。San Agustín

<sup>30</sup> Plauto : Titus Maccius Plautus (紀元前 254～184 年)ローマの喜劇作家。かれの喜劇作品は、紀元前 3～4 世紀のギリシャ「新喜劇」の翻案で、当時のローマの市民生活の様子が日常の民衆語による生き生きとした対話の中に反映されている。

<sup>31</sup> Cicerón: Marcus Tullius Cicero (紀元前 106～紀元前 43 年) : ローマの政治家、雄弁家、哲学者、著書に「国家論」、「友情論」などあり。他にアッティテクス、弟クイントゥス、ブルートゥス宛ての 800 通にのぼる書簡集が残されている。

<sup>32</sup> Tertullian, Tertuliano [Quintus Septimius Florens Tertullianus] (Cartago, hoy desaparecida, actual Túnez, h. 160-id., h. 220) Apologista cristiano. Los pocos datos acerca de su vida provienen de algunas referencias en su obra y de autores posteriores, por lo que están sometidos aún a debate. Al parecer, su padre era centurión, y Tertuliano recibió una esmerada educación en derecho, filosofía y retórica. Vivió un tiempo en Roma, donde probablemente ejerció como abogado, y se interesó por el cristianismo, aunque su conversión tuvo lugar a su regreso a Cartago, alrededor del 190. A partir de este momento, desplegó una notable actividad polémica contra los paganos y los herejes y en defensa del cristianismo, a través de numerosos escritos, entre los que cabe citar *Ad martyres*, *Apologeticus*, *De praescriptione haereticorum*, *Adversus valentinianos*, *Adversus Marcionem* y *De baptismo*, entre otros muchos. Tertuliano se convirtió en una figura destacada en la Iglesia del norte de África, aunque es dudoso que llegara a ser ordenado sacerdote. En sus escritos elaboró una prosa latina original y desarrolló el vocabulario que más tarde utilizaría el pensamiento

自身も説教文で常用のことばを使っていることがある。またキリスト教はその初めの頃には大衆に向けた教え、つまりより身分の低い民衆へ働きかける教えであったということを考慮しておかなければならない。

## h) 語彙集とか、(古典ラテン語という視点から見たときの)

### “誤用”形式についての一覧表

- i) “俗語の”テキスト：作家の無教養のため、またはわざわざ庶民、農民などの人間性を、よりリアルに表す為に、古典的モデルとは明らかにことなる通常の、また民衆的な言葉を使っているテキスト。

### I) ロマンズ諸語：

これまでに取り上げた諸文献に見られる多くの形式の他に、ロマンス諸語には、ローマ帝国のラテン語のすべての地域で、または一部の地域で活発に使われていた形式（しかし我々が手にすることができる文書では見られない）が存続している。これまでに取り上げた形式と同じようにように“俗的”な形式的と呼べるものは、再建されたものである（再建形式は、習慣としてアステリスク\*を付ける、例：*\*plattus*<sup>35</sup>, *\*toccare*<sup>36</sup>）。

テキストに見られる形式の中に、作家とか著述家による文法的誤用とか特有語法というものが多くある。しかしこれは決して普及することはなかったものである。またロマンス諸語に保存され、その後のテキストに現われる語形式がある。これらの語形はある時期の

---

cristiano.

<sup>33</sup> Lactantius : Lactancio 241 – 320 : Lactancio recibió la educación romana en Africa del Norte, destacando de manera rápida en la oratoria, llegando a ser maestro. Convertido al cristianismo, se dedicó a extender la fe cristiana entre los intelectuales, escribiendo una obra relacionada con las persecuciones vividas por los cristianos: "Recuento de las persecuciones".

<sup>34</sup> Comodianus : キリスト教世界に関する初期の詩人

<sup>35</sup> plata < \*plattus 銀

<sup>36</sup> tocar < \*toccare ～に触れる、～を演奏する

ラテン語で一般的であったモデルであったり、またはある社会的階層とかある地域で受け入れられていたモデルであったりすることがある。しかしそれらは、普及することのない近年の革新的形式であったのかもしれない。これらの諸形式について正確な年代を確定するのは実際的に不可能である。言語学的に確定することができることは、それぞれの形式が文書に初めて使われたのがいつであるのか（初めて出会うテキストの確実な、または概略の年代）ということにすぎない。形式の相対的年代は、文献学的手段によって確定されるが、純粹に言語学的手段によることもあるが、また比較方法・言語地理学的方法にもよらなければならない。再建形については、これは相対的年代を設定（つまり、ある形式は別の形式よりも、より古い、または新しいと）することにしかない、またこれは排他的に言語学的手段によることになる。一方ある語形をある歴史的時代に帰するは、まったく危ういものであろう、このことは特に、ある時期に他のローマ属領(romanidad)より切り離された地域について云々するのでないとすると、実質的には非常に危ういものである。

（例えば、ある形式がスペイン語とルーマニア語、またはフランス語とルーマニア語で保存されていたとすると、この形式はダキア<sup>37</sup>

---

<sup>37</sup> ダキア人は紀元前 1000 年頃から、ダキア地方（現在のルーマニア）に住んでいたトラキア系の民族のこと。現在のルーマニアでは、このダキア人とローマ人の混血した人々がルーマニア人の祖先であるとされている。

## 歴史

紀元前 4 世紀頃に、ケルト人によって侵入を受けた。

紀元前 70 年に、部族連合の首長ブレビスタがダキアを統一し、ローマ帝国に抵抗を続けた。

101 年、ローマ帝国の皇帝トラヤヌスが、ダキアを征服するためにダキア戦争を始めた。

106 年、ダキアの王デケバルス（デチェバル）が自殺し、トラヤヌス帝支配下のローマ帝国がダキアを征服した。以後、多くのローマ市民がダキア地方に移住し、ダキアのローマ化が進んだ。

271 年、東ゴート族とサルマティア族のダキアへの侵攻が激しくなり、それに耐えかねたローマ帝国の軍団がダキアから撤退した。その後、ダキアの地には西ゴート族、フン族、ブルガール人、アヴァール人、マジャール人など様々な民

がローマ属領より切り離される前に使われていた語形式であるということになる)。

多くの“俗語の”資料を提供してくれるテキスト（上記の h）と i)で示したもの）の内で特別に注視すべきものがある：

### A) Appendix Probi.

これは“正確ではない”語形のリストであり、紀元3または4世紀頃に、“良く話す”ための一種のガイドとしてローマで編纂されたものである。現在残っている写本は、ウイーンに保存されている7世紀または8世紀の羊皮紙に書かれたものである。これは、Probo (Probus) の文法書の付録として発見されたので、“Appendix Probi” (プロボの付録) と呼ばれている。この書には、“正しい”つまり古典語の形式と並べて、“間違えた”、正確には当時通用していた形式を示している。つまり、多くの人が使う語形の代わりに、古典ラテン語では“…と云うべき”であると指示している：*auricula non oricla*, *oculos non oclos*, 等々<sup>38</sup>

### B) Glosas de Reichenau <sup>39</sup>

Reichenau (ライヒェナウ) にあった手書き文書であり、現在は

族が侵入した。

<sup>38</sup> *oculos*(目)のスペイン語での変化は、次のようになる[R. Penny 2001, p.318]：

“*oculum* > *oclum* > /óilo/ > /ólo/ > /ózo/ > /ófo/ > /óxo/ , {ojo}”。

*auricula* ‘耳’ > *oricla* > *orecla* > /oréla/ > /oréza/ > /oréfa/ > /oréxa/, {oreja}

227 個の語彙が取り上げられている。下記のサイトで見ることができる。

[http://www.orbilat.com/Languages/Latin\\_Vulgar/Vocabulary/Appendix\\_Probi.html](http://www.orbilat.com/Languages/Latin_Vulgar/Vocabulary/Appendix_Probi.html)

<sup>39</sup> \*\*As glosas de Cásel e Reichenau.

Trata-se de listagem de palavras latinas da Vulgata e de outros escritores, cuja composição se deu no século VIII, tendo por objetivo a explicação da bíblia latina. As Glosas de Reichenau, originárias do noroeste da Gália, é formada de duas partes: a primeira é um glossário da bíblia latina; a segunda é também um glossário explicativo de termos latinos de difícil entendimento. As palavras se encontram em ordem alfabética. Sua denominação é devida à catedral de Reichenau. As Glosas de Cásel constituem-se de 265 registros romances e seguidos de registros correspondentes em alemão. Referem-se a partes do corpo humano, animais domésticos, utensílios e objetos pertencentes a casa, denominações de vestimentas, etc. Pertencem à biblioteca de Cásel. [[http://www.filologia.org.br/vcnlf/anais%20v/civ8\\_06.htm](http://www.filologia.org.br/vcnlf/anais%20v/civ8_06.htm)]

ドイツの Karlsruhe の図書館に保管されている。この文書には 2 種の語彙集があり、1 つは聖書に関する語彙集であり、他の 1 つは聖書-教父学に関するものである、この文書は、8 世紀頃（ある人によるともっと以前）におそらくガリア地方で編纂されたものである。この語彙集には理解するのに困難なものと思われる古典形式の語を、より民衆的で常用の語によって説明している：*imber-pluvia*, *ictus-colpus*, *flere-plorare*, <sup>40</sup>etc.

### C) Cena Trimalchionis<sup>41</sup>

これは、ペトロニウス(Petronio)の書いた有名な小説サティリコン(Satyricon)の断片である（皇帝ネロの時代、紀元 66 年に死亡した Petronio Arbiter であるかは疑問である）。この中でナポリ近くの場所（多分 Cuma<sup>42</sup>）での宴会の様子を記述している。そこである人士は文学的なラテン語を話し、別の人士である解放奴隷の Trimalción などは、“不正確な” また俗的な言葉を話している、これに教養のない階層のラテン語が反映されているのである。

### D) Mulomedicina Chironis

ギリシャ語より翻訳・翻案された 4 世紀頃の獣医学書であり、Chirón が書いたとされている。この人物は余り教養がなく、俗語

---

<sup>40</sup> *imber-pluvia* 雨, *ictus-colpus* 攻撃, *flere-plorare* 泣く：前者の語は、スペイン語では残っていないが、後者の語は次のように変化している：*pluvia* > *lluvia*, *colpus* > *golpe*, *plorare* > *llorar*。

<sup>41</sup> <http://duke.usask.ca/~porterj/CourseNotes/cena.html>

オペラ《サティリコン》の原作は、皇帝ネロ時代のローマ帝国の詩人ペトロニウス（?～A.D.66）が書いた、最低でも 16 巻ほどの（かつては 20 巻以上という説もあった）長編物語である。その大部分は失われてしまっており、辛うじて残されたものは、もっとも完全な形で現存する『トリマルキオの饗宴』を含む全 3 巻（第 14～16 巻）、内容的に大別して 5 つの部分だけである。描かれた年代はクラウディウス帝ないしネロ帝時代、すなわち紀元 40～50 年ころ、そして舞台はナポリ近郊のクーマエ（古代ギリシャ人がイタリアの土地に最初に築いた植民地）、ないしポンペイ近郊のプテオリ（現在のボッツォリ）とされている。<http://www.asahi-net.or.jp/~ib4s-cyuk/satyricon.htm>

<sup>42</sup> 考古学の遺跡が見られる箇所、現在考古学巡回バスなどがここを巡るツアーがあるとのこと。

を多く使っている。15 世紀の手書き文書としてミュンヘンの図書館に保存されている。

### **E) Peregrinatio ad Loca santa o Peregrinatio Aetheriae (Egheriae)**

この文書は、間違って *Peregrinatio Silviae* と呼ばれている。イスパニアで 381 年と 388 年の間に著されたもの（または 380 から 420 年の間、最近の研究によると 418 年頃）とされていて、*Eteria* または *Egeria* と呼ばれる僧侶によって書かれ、聖書に記されている場所への巡礼を記述している。ここで語られていることは歴史的に興味深い、特にパレスチナへの巡礼についての最初の著作である。この本の著者は、ある程度の教養があるが、彼の使う言葉は、当時の常用のものであり、古典ラテン語に対比すると、より自由な言葉遣いをしているが、全くの俗語的なものではない。

### **1 3. 俗ラテン語についての簡単な記述**

次に“俗ラテン語”のうちの主な語彙を示してみる。特に古典ラテン語とは異なる語彙に注視するが、内的な差異については触れない（ここで触れる等語線の内のあるものは、普遍的であるものもあり、別のものは部分的なものもある）。

言語を特徴づけるためには、通常は音声的側面から始めることになる。しかし音声体系は進展していて、言語学的に限定できる単位というものを欠いていて、また言語的音声は単に単語の中において存在していて、単語と共に普及するものであるので、次のものから検討を始めることにする：

#### **A) 語彙**

a) 無論、文学的（古典）ラテン語に共通の多くの語がある、一方ローマ帝国時代の常用のラテン語と共通の語というものがある。一般的なラテン語の等語線を形成する単語というものがある、これらは、社会的視点よりすると、すべての社会階層に属しているものであり、年代的な視点よりすると、俗ラテン語またロマンス諸語に帰することができる全時代にわたって共通に話されていた言語で活

発に使われ、保持されていた。例としては次のような語がある：

*homo*<sup>43</sup>, *filius*, *manus*, *aqua*, *panis*, *forum*, *rota*, *asinus*, *cervus*, *caelum*, *arbor*, *vita*, *dolor*, *bonitas*, *habere*, *dormire*, *videre*, *credere*, *rotundus*, *plenus*, *calidus*, *siccus*, *niger*, *novus*, *bonus*, *mater*, *pater*, *puteus*, *vacca*, *altus*, *longus*, *viridis*, *amare*, *audire*, *dicere*, *vendere*, *bene*, *male*, *si*, *in*, etc.

これらの単語は、現在に到るまで、ロマンス語としての単位を限定する一連の等語線に所属している、また同時にあるロマンス語の単位およびラテン語、すべてのラテン語に属している。つまりこれらの単語は完全に古典的なものであり、同時に“俗的な”ものである。例外は若干あるが、今日までこれらの単語は、すべてのネオ・ラテン語で保存されている。

b) 第 2 のカテゴリーには、前に引いた単語と同じ状況下にある一連の語、つまり（文学的）古典的であるものであると同時に常用である（“俗的”）語がこれにあたる。しかしながら、古典ラテン語にはもっぱら文学的な同意語(*sinónimos*)が存在している。ある場合には文学的ラテン語で使われている一対の単語の内の 1 つが、話し言葉では活発に使われているものがある一方、別の対は、すべてのラテン語（つまりあらゆる地域、またあらゆる階層のラテン語）には属しておらず、“俗ラテン語”とされる時代には、常用の言葉としては既に死滅していたものもある。つまりある語は、すべてのラテン語でまったく活発に使われたものである、一方の語は、文学言語の特徴として保存された現象とされ、教養語としてローマ帝国時代

---

<sup>43</sup> これらのラテン語に該当するスペイン語を記すと、次のようになる：

*homo*=*hombre*, *filius*=*hijo*, *manus*=*mano*, *aqua*=*agua*, *panis*=*pan*, *forum*=*foro*, *rota*=*rueda*, *asinus*=*asuno*, *cervus*=*ciervo*, *caelum*=*cielo*, *arbor*=*arbol*, *vita*=*vida*, *dolor*=*dolor*, *bonitas*=*bonita*, *habere*=*haber*, *dormire*=*dormir*, *videre*=*ver*, *credere*=*creer*, *rotundus*=*rotundo*, *plenus*=*lleno*, *calidus*=*cálido*, *siccus*=*seco*, *niger*=*nigro*, *novus*=*nuevo*, *bonus*=*bueno*, *mater*=*madre*, *pater*=*padre*, *puteus*=*puente*, *vacca*=*vaca*, *altus*=*otro*, *longus*=*largo*, *viridis*=*verde*, *amare*=*amar*, *audire*=*oir*, *dicere*=*decir*, *vendere*=*vender*, *bene*=*bien*, *male*=*mal*, *si*=*si*, *in*=*en*,

にまで遡るものである。ロマンス諸語には、(文学言語および常用言語で活発に使われた) 古典-俗的な単語が、連続性を切ることなく保存されている、一方ではもっぱら文学的な同意語が保存されていたのであろう。次のような例をあげることができる：

| “古典的” な単語 |   | 古典-俗的な単語         |         |
|-----------|---|------------------|---------|
| aequor    | - | mare             | 海       |
| tellus    | - | terra            | 土地      |
| sidus     | - | stella           | 星       |
| letum     | - | mors             | 死       |
| vulnus    | - | plaga            | 傷       |
| cruor     | - | sanguis          | 血       |
| tergum    | - | dorsum           | 背       |
| alvus     | - | venter           | 腹       |
| ager      | - | campus           | 地所      |
| tuba      | - | bucina           | ラッパ     |
| lorum     | - | corrigia         | 靴紐      |
| formido   | - | pavor            | 恐怖      |
| pulcher   | - | formosus, bellus | 美しい     |
| magnus    | - | grandis          | 大きい     |
| validus   | - | fortis           | 強い      |
| alius     | - | alter            | 他の      |
| omnis     | - | totus            | すべて     |
| edere     | - | manducare        | 齧る、噛む   |
| potare    | - | bibere           | 飲む      |
| ludere    | - | iocare           | >jugar? |
| ferre     | - | portare          | 運ぶ      |
| vincire   | - | ligare           | 縛る      |
| equus     | - | caballus         | 馬       |

|               |   |                         |          |
|---------------|---|-------------------------|----------|
| os            | - | bucca                   | 口        |
| domus         | - | casa, mansio, hospitale | 家        |
| aestus        | - | calor                   | 熱        |
| agere         | - | facere                  | 駆る、導く    |
| agna          | - | spica                   | 雌羊       |
| amittere      | - | perdere                 | 行かせる     |
| anguis        | - | serpens                 | 蛇        |
| armilla       | - | brachiale               | 腕輪       |
| ater          | - | niger                   | 黒い       |
| balteus       | - | cingulum                | 帯        |
| brassica      | - | caulis                  | キャベツ     |
| brevis        | - | curtus                  | 短い       |
| esurire       | - | famem habere            | 餓えている    |
| fluere        | - | currere                 | 流れ       |
| gramen        | - | herba                   | 草        |
| imber         | - | pluvia                  | 俄か雨      |
| ianua (janua) | - | porta                   | 戸、入り口    |
| lapis         | - | petra                   | 石        |
| linquere      | - | laxare                  | 残す       |
| plaustrum     | - | carrus                  | 荷車       |
| sus           | - | porcus                  | 豚        |
| diu           | - | longe, longum tempus    | 長く、日中に   |
| cum           | - | quando                  | そのときに    |
| ob            | - | pro, propter, per       | 前に、～向かって |
| sero          | - | tarde                   | 遅く       |
| ut            | - | quomodo                 | 如何に      |
| ab            | - | de                      | ～から、～より  |

同じように、文法の一連の機能的要素は、もっぱら古典的（現行

の話し言葉という視点からすると“死語”)な語である、例：*an*<sup>44</sup>, *at*, *autem*, *donec*, *enim*, *ergo*, *etiam*, *haud*, *igitur*, *ita*, *nam*, *postquam*, *quidem*, *quin*, *quoad*, *quoque*, *sed*, *sive*, *ut*, *utrum*, *vel*. etc.

しかしながら、“古典”形式の内のある語が、古くから植民地化された地域、他から切り離されている、また辺境に置かれている場所で散発的に保存され、地域的な活力を保持しているものもある。それで、*sidus* はイタリアのある方言で保存されている（意味が異なっているが）ものもある。*ager* > rum.*agru* また fr.*aire* ; *ianua* > sardo.*yanna*; *lorum* > sardo(logudorés) *loru* また port.*loro*; *magnus* > ant.esp. *maño* (*tam magnus* > *tamaño* を参照) および logud. *mannu*; *domus* > sard. *domus* (サルディニアの場合、孤立した場所で *loru*, *mannu*, *domu*, *yanna* が保存されている、これらは今日でも使われている)。これらの語形の内、*equus* の場合には興味深いものがある、この語の男性名詞は保存されず (*caballus* に交替した)、一方では女性名詞では *equa* > esp. *yegua*, sardo *ebba*, rum. *iapă*, ant.fr. *ive* などが使われている。これらの散発的に保存されている語形は、ある地域では古典-俗的語として、または別の場所ではもっぱら古典的語と考えられている。どちらにしろ、帝国時代では、これらの語は、日常的に話されていたラテン語の一般的な等語線を形成していたわけではない。

別の“古典的”単語（例えば、スペイン語の *pulcro*, *válido*, *magno*, etc) は、ネオ・ラテン語の相続遺産ではなく、教養的語彙、つまり文学ラテン語からロマンス語に後になって導入された“学的な”

---

<sup>44</sup> *an*=かあるいは, *at*=しかし、それに対して, *autem*=しかし、これに反して, *donec*=の限りでは, *enim*=なぜならば, *ergo*=それゆえ, *etiam*=またさらに, *haud*=なったく…でない, *igitur*=それで, *ita*=このようにして, *nam*=なぜならば, *postquam*=…の後, *quidem*=確かに, *quin*=どうして…でないか?, *quoad*=ほどに, *quoque*=…もまた, *sed*=（でなく）て, *sive*=あるいはもし, *ut*=いかに?, *utrum*=（であるか）または（それとも）, *vel*=…か（あるいは）か。これらの古典ラテン語は、スペイン語には残っていない。

要素である。

c) 最後に、第 3 のカテゴリーとして、古典ラテン語には見られないが特別に“俗的”な単語とされるものが多い。これらの語は、古典時代の後にも常用ラテン語で現われた革新形式がこれに当る。しかしながら、これらの語は、常用され話されていた言語の活力として組み込まれていたが、文学ラテン語では受け入れられていない親密な人の間で使われる言葉遣いとして残っていた古くからある語であり、民衆的であり、または方言的な語である。この第 3 のカテゴリーに属する語として次のようなものがある：*amma, atta, batalia, branca* (mano, miembro), *mamma, nonnus, nonna, \*finis* adj. (*honorum finis, pudoris finis* などの表現に現われる), *\*gentis* (*genitus* と *gentilis* の混合形式より現われる), *cucina* (lat. cl. *culina*), *tina, bastum, planca* (Paladic に使われている), *\*bilancia* (lat. cl. *libra*), *bisaccia* (Petronio の文書にあり ; lat. cl. *pera*), *drappus, rancor, pisinnus* (子供の言葉より、lat. cl. *parvus*), *bassus, \*plattus, praestus* (lat. cl. *paratus*), *battuere* (Plauto に残る), *\*toccare* (lat. cl. *tangere*), *titio* (Varrón の残る), *cortina* (Augusto に残る ; lat.cl. *aulaeum*), *grossus, septimana* (lat. cl. *hebdomas*), *camisia* (lat. cl. *linea*), *carricare, carcare* (lat. cl. *onerare*), *carcatus* (lat. cl. *onustus*), *\*auca* ( < *\*avica*; lat. cl. *anser*), *\*matraster* (lat. cl. *noverca*), *\*filiaster* (lat. cl. *privigus*), *patraster*(lat. cl. *vitricus*), *cattus* (lat. cl. *feles*), etc.

またこれらの場合に、古典形式がしばしば保存されることがある、しかしながら散発的なものである(例：*tangere* > esp. *tañer*, *vitricus* > rum. *vitreg*), 一方では“俗的”形式は、多くのロマンス語で保持されている。

“古典的”語彙から、“俗的”語彙を区別する現象は、実質的に 2 つ (選択 *selección*、革新 *innovación*) に還元することができる：  
**選択**：多少とも同意語の中から、話し言葉が、これまで保持され続

けているものを“選び取る”ことであり、一方で他のものを捨て去ることである。

**革新**：話し言葉の中で、語彙が派生、語構成、借用などによって新しいものに作り変える。

選択ということに関して、一般的に話し言葉はニュアンスが劣り、繊細さが劣るものを考慮し、同意語と呼ばれる語（または同意語ではないもの）の内から、ある語を捨て、意味を拡大しながらある語を保持することになるのである。それで、*lacrimare* ‘泣く’, *plorare* ‘叫ぶ’, *plangere* ‘声高に嘆く’ という語は、“同意語”の *lugere* ‘悲しむ’, *flere* ‘泣く’ を排除したし、また *videre* ‘見る’ は意味的に似た動詞 *adspicere*, *intueri* ‘一瞥する’, *cernere* ‘見分ける’ を排除した。(物質的に大きなという意味の) *grandis* は、*magnus* (物が‘大きな’, しながらまた道徳的、精神的に‘偉大な’) ということの意味するようになった。*alter* (2つの内の1つ) は、*alius* (別の、異なる) ということを目指すようになった。同じく、*iocus* (冗談)、*casa* (小屋、掘建小屋)、*apprehendere* (掴む、捉える、理解する) は、正確に対応する同意語ではないが、*ludus* (遊び), *domus* (家), *discere* (理解する) に取って替わるようになった。

一方で、逆の意味で話し言葉は、より大きな表現性への恒常的な傾向を示している。これによって話し言葉は、俚語形式、イメージ、反語的、比喩的形式など、つまりより大きな情緒的効果のある形式を好むのである。それで、*edere* ‘食う’ は古代ラテン時代の喜劇の大喰らいの人、*Manducus* より派生した *manducare* ‘大いに喰らう’ に交替した。(しかしながら、派生語 *comedere* はスペイン語では、*comer* として残っている) ; *equus* は、*caballus* (元来は‘駄馬’を指していた) に、*caput* は、*testa* (olla, tiesto) に、*crus* は、*gamba* (pata) または *perna* (jamón) に、*domus* は *casa* (cabaña) に取って代わった。

革新語形式に関しては、先ず最初に、ローマ帝国時代に日常的に話し言葉として使われていたラテン語では、表現性とか情緒性などの理由から、派生形式が好まれた（特に名詞においては、示小辞とか示大辞が、また動詞では、反復的、起動的形式が好んで使われるようになる）。それで、*avis* は、*avicellus* > *aucellus* (it. *uccello*, fr. *oiseau*) に、*avus* は、*\*aviolus* (esp. *abuelo*) に、*vetus* は、*vetulus* (esp. *viejo*) に、*auris* は、*auricula* に、*culter* は、*cultellus* (esp. *cuchillo*, it. *coltello*) に、*agnus* は、*agnellus* に、*canere* は、*cantare* に、*adiuvare* は、*adiutare* に、*genu* は、*genuculum* に、*sol* は、*soliculum* (一部の地域で、参照、fr. *soleil*) に、*mane* は、*maneana* (esp. *mañana*, port. *manhã*), または *matutinum*, (fr. *matin*, it. *mattino*) に、*dies* は、形容詞の *diurnus* (it. *giorno*, fr. *jour*) に、*talus* は、*\*talonem* に交替した。（見れば分かるように、民衆語、特に再建形式は、対格形式で示すことにする）。

派生語の形式的、意味的、文体的な検討をするに際して、“俗”ラテン語すべてを特徴付ける時には、何を優先的に考えているのかを考慮すべきである。これは、革新体系形成のための主要な手段の1つであった。実際に、文学的ラテン語のような、古典語のモデルの威信と権威によって、多少とも固定されている、また言語的發展が多少と押し留められている言語は、少数の新しい語形式を形成するに過ぎず、表現的必要性から多くの著述家が作った語形式は、総体としての言語にではなく、個人的文体に属するものであった。一方では、通常用いられる話し言葉は、言語体系によって与えられる同じ手段を使って、新しい語を創造し続けることになる。

“俗”ラテン語では、接尾辞によって派生語を作るのが多く見られる：

**-tor, -arius:** これらは、動作主の名称を作る。動詞から、また名詞、形容詞より作られる：*salvator, auditor, argentarius, operarius, furnarius, cultellarius*.

**-aculum, -torium:** 用具の名称を作る：*spiraculum, sufflatorium*.

- arium: 場所の名前を作る : *aerarium, granarium, apiarium*.
  - etum : 木の名前より派生した地名を作る : *salicetum* (sauzal),  
*fraxinetum* (fresneda), *quercetum* (encinar), *fagetum* (hayedo)
  - ale: 場所とか道具の名前を作る : *casale*
  - alia (pl. de ale), -men: 集合名詞を作る : *battalia, \*ossamen*(osambre)
  - mentum, -tura, -sura: 抽象的また集合的な名詞、動詞に係わる動作  
 に関する名称を作る (例えば lat. clás. *armatura, mensura*) ,  
 しかしながら名詞からも作られる : *iuramentum, capillatura*  
 (しかしながら *\*capillare* という動詞は存在しない)、  
*\*adventura, arsur*.
  - tio, -sio, -atio, -itio, -ntia: 動詞から派生した抽象的な名前を作る :  
*demoratio, custoditio, sufferentia, fragrantia* ( -ntia で終わる名前は、  
 基本的に現在分詞の中性複数形であるが、女性単数形と解されるようになる)。
  - itas, -itia : 形容詞より派生した抽象的な名称を作る : *\*amicitatem,*  
*\*bellitatem* (cf. lat. cl. *bonitas, caritas*), *longitia, \*proditia* (cf. lat.  
 cl. *pigritia, avaritia*).
  - ata: (物または、時間等の) 量に関する名詞を作る : *diurnata*  
*(jornada), annata, \*buccata* (bocada).
  - or, or/ura: 動詞より派生する抽象的な名詞を作る : *\*lucorem,*  
*\*laudorem* (loor), *fervor-fervura, rigor-rigura*; また *strictura,*  
*directura, etc.* などをモデルとして (分詞形の *strictus, directus*  
 と関連する未来分詞) は、形容詞・非-動詞からの -ura で終わ  
 る名詞を作る : *\*planura* (< *planus*).
  - ia: これは、古典ラテン語では、アクセントのないものであるの  
 で、生産的でない接尾辞であるが、帝国時代にアクセントのあ  
 るギリシャ語の接尾辞の -ia によって増強され、多くのギリシ  
 ャ語よりの借用語に用いられるようになる (*philosophía,*  
*democratía*)。
- 次のような示小辞で作られるのが多くある :

-*ŭlus*, -*icŭlus*, -*ucŭlus*: 古典ラテン語に多くある、しかしながら、アクセントのある-*ellus* よりもアクセントのない接尾辞-*ŭlus* が好まれた (*porcŭlus-porcellus*, *rotŭla-rotella* > *esp. rodilla*, *fibŭla-fibella* > *esp. hebilla*) : *anellus*, *vitellus*, *catellus*, また-*icellus* は -*icŭlus* という後より 3 番目にアクセントがあるものが好まれた (*avicellus*, *navicŭla-navicella*, *monticŭlus-monticellus*)。-*ellus* の他に、-*eolus*, -*iolus* が多く好まれた。しかし最後から 3 番目にあるアクセントがあるものから 2 番目にあるものになったものもある (\**aviolus*)。

また、-*o* (-*onem*), -*aster*, -*aceus*, -*uceus* などの接尾辞で作られる強調、増大、卑称的な派生語が多くある : *naso*, *nasonis* (*narigudo*), *cicero*, -*onis* (“鼻にニキビを付けた”、“*con un grano en la nariz*”), \**matraster*, \**filiaster*。

これまで挙げたすべての接尾辞（形容詞として使われる示小辞を除いて）は、名詞を作る。しかしながら形容詞への派生のために、多くの接尾辞を使っている : -*bĭlis* (*amabilis*, *credibilis*), -*ālis*, -*īlis* (*mortalis*, *hostilis*), -*osus* (*montaniosus*, 古典的モデルによって *herbosus*, *formosus*), -*īvus* (*tardivus*, 古典的例としては *captivus*), -*ātus*, -*ītus*, -*ūtus*, 分詞的な接尾辞は、それに対応する動詞は存在しないが、名詞に直接的に適用される : *barbatus*, *barbutus* (*barba* より)、*crinitus* (*crinis* より)、*cornutus* (*cornu* より)、\**pilutus* (*pilum* より)。

また、動詞派生の接尾辞というものが多くあり、生産的である : -*are*, -*ire* : （これは、特に動詞状名詞の語幹に適用され、また現在分詞、名詞、形容詞にも適用される）および -*escĕre* は、それぞれ反復動詞、起動動詞などを作る。（例 : 古典語の *plantare*, *vestire*, *maturare*, *florescere*) : *cantare*, *adiutare*, \**oblitare* (*olvidar*), \**ausare* (*osar*), \**refusare*, \**usare*, \**expaventare* (*espantar*),

*\*calentare, \*levantare, \*crepantare (quebrantar).*

*-iare* : *-is* で終わる形容詞に基づき形成された *-are* で終る動詞の形式にもとづき、それより離れた新しい接尾辞（例：*mollis* よりの *molliare*、*levis* よりの *alleviare*）、*-us, -a, -um* で終わる形容詞より新しい動詞が形成される：*\*altiare (alzar), bassiare (bajar), \*acutiare, \*captiare, \*directiare (esp. en-derezar, fr. dresser, it. drizzare).*

*-icare* : 形容詞また名詞より出来た動詞形式のもの：*amaricare (amarus よりの amargar), \*carricare, follicare (follis より、esp. holgar)*

*-izare* : ギリシャ語起源の接尾辞 (*-ízein*) , これは、特に医学用語、学術用語、またキリスト教関連の語彙として使われている：*cauterizare, pulverizare, baptizare, exorcizare, scandalizare*, これらは今日までロマンス諸語では異常なほどに生産的な接尾辞となっている。

*-itare* : 反復または繰り返しの動詞として：*vanitare (fr. vanter), \*taxitare (it. tastare).*

*-ulare* : 反復的動詞として：*ustulare (rum. usturá), \*misculare (mezclar), \*tremulare (temblar), \*turbulare (fr. troubler).*

(これまでに引いた殆どの例でも明らかなように、これらは、“内的”つまりラテン語の**体系**そのものによって容認されている発展形式とすることのできるような変革形式である。しかしながら、これは、古典ラテン語の**規範**に属するものではない。)

派生による語形成よりも頻度が少ないのが、語混合である。これまで述べてきたように、一般的にラテン語は、語混合を避けてきたのである。それで、(ギリシャ語のモデル、またはギリシャ語の影響による) 文学言語より構成された多くの語は、(キリスト教に関する語は除外して) 常用の言語には普及しないという意味で、活力

のあるものではない。しかしながら、語混合という現象は、“俗”ラテン語に存在していた、しかしながらこれは通常、連辞的な発展による語混合であり、固定した形式を用いて1つの語になるのである。しかし情緒的な意図というものはない。例：*sanguisuga*, *arcuballista*, *rosmarinus*, *avis tarda* (avutarda), *auripigmentum* (fr. *orpiment*), *alba spina* (fr. *aubépine*), *avis struthius* (avestruz), *bis coctum* (bizcocho), *medio die* (mediodía), *medio loco* (rum. *mijloc*, fr. *milieur*), *male habitus* (it. *malato*), *calce pistare* (it. *calpestare*), *crucifigere*, *inde fugere* (fr. *enfuir*), *intra videre*, *manu tenere* (mantener), *minus pretiare* (menospreciar), *mortificare*, etc. また週の名前が固定された形式として使われる（セム語起源の *sábado* は除外する）：*Lunae dies*, *Martis dies*, *Mercurii dies*, *Lovis dies*, *Veneris dies*, *Dominica (dies)*.

これは特に興味深いものであり、ロマンス諸語のうちで、名詞の *dies* の意味的統合性を残しているものがある（スペイン語、ルーマニア語では残しているが、ポルトガル語では特異な形式を示していて、他のネオ・ラテン語とは異なっている）。上で示した連辞の意味についての意識を保持しているが、週の名称からは *dies* そのものは排除するようになった。一方で *dies* という語を保存している言語もある（イタリア語とかフランス語：イタリア語の *dí* という形式は限定的に使われているだけである）。そしてこれに替わって派生語の *diurnus* (it. *giorno*, fr. *jour*) が使われ、上で示した意味的価値の統合的意識は失われ、次のような語になった：

| スペイン語            | ルーマニア語          | イタリア語            | フランス語           |
|------------------|-----------------|------------------|-----------------|
| <i>lunes</i>     | <i>luni</i>     | <i>lunedí</i>    | <i>lundi</i>    |
| <i>martes</i>    | <i>marti</i>    | <i>martedí</i>   | <i>mardi</i>    |
| <i>miércoles</i> | <i>miercuri</i> | <i>mercoledí</i> | <i>marcredi</i> |
| <i>jueves</i>    | <i>joi</i>      | <i>giovedí</i>   | <i>jeudi</i>    |
| <i>viernes</i>   | <i>vineri</i>   | <i>venerdí</i>   | <i>vendredi</i> |

これらの例は、ラテン語の語混合形成の意図を超えた過程についてかなり明確な概念を与えてくれるもので、興味深いものである。

ある分野では、語混合は、古典ラテン語よりも“俗”ラテン語でより幅広く使われている。とくに機能的要素（前置詞、接続詞、副詞）などの分野に見られる。帝国時代の口語ラテン語では、空間的、時間的な関連性についての、より厳密なことを意味するものが係わることになる。それで前置詞、接続詞、単純副詞などが殆ど失われ、別の混合語が創造された：*ab ante* (it. *avanti*, fr. *avant*), *in ab ante* (rum. *înainte*), *de unde* (esp. *donde*), *in de retro* (rum. *îndărăt*), *ad foras* (esp. *afuera*, rum. *afară*), *ad horam* (esp. *ahora*), *de magis* (esp. *demás*), *de in* (rum. *din*), *ad tunc* (rum. *atunci*), *ad hic* (rum. *aici*), *in tunc* (esp. *entonces*), etc.

また、*ad-*, *in-*, *de-* (古典語の *dis-* の代わりに)、*ex-*等の接頭辞を持つ動詞の複合語（実際には、派生語の形式である）がしばしば現われる：*adbattere* (*abater*), *\*accaptare* (*acatar*, fr. *acheter*), *ingluttire* (it. *inghiottire*, fr. *engloutir*, rum. *înghioti*), *\*invitiare* (rum. *învătă*), *\*advitiare* (*avezar*, it. *avvezzare*), *devestire*, *\*excambiare* (it. *scambiare*, fr. *échanger*, rum. *schimbă*), *\*exbattere* (it. *sbattere*, rum. *sbate*), *\*excadere* (it. *scadere*, fr. *échoir*, rum. *scădea*)。更に、派生語より出来た動詞、つまり接尾辞、接頭辞などを伴って二重派生したような動詞が、多く見られる：例：*adunare*, *impedicare* (rum. *împiedică*), fr. *empêcher*), *\*arripare* (fr. *arriver*, it. *arrivare*, de *ripa*, orilla, costa), *inodiare* (esp. *enojar*, de *odium*), *\*excaldare* (de *calidus*, esp. *escaldar*, it. *scaldare*, rum. *scăldă*), *\*attitiare* (de *titio*, tizón, esp. *atizar*, it. *attizzare*, rum. *âtită*), *aggenuculari*, *\*ingenuculare*, *\*disramare* (esp. *derramar*), *\*inuxorare* (rum. *însură*), *\*excappare* (esp. *escapar*, fr. *échapper*, it. *scappare*, *scapă*), *\*expanticare* (rum. *spintecă*), etc.

最後に、“俗”ラテン語の語彙は、他の言語よりの借用によって新しくなり、また豊かになることがある。また古典ラテン語には浸透しなかった外国語風の語が保存されている。場合によって、ラテン語風の表現で、またローマ文明では知られていないもの、また外

国起源のものが表現される時には、外国語起源の単語が、用いられるし、また場合によっては、借用語が、純正のラテン語の同意語と共に用いられることがある。またある時には、外国語起源の語が、それに対応するラテン語の単語を常用的使用から排除することもある。

しかしながら、(セム語からの借用のような) 余り数が多くないようなもの、また“イベリア語”からの借用語などを別とすると、主要なカテゴリーとしては次のものがある：

**a) イタリアック語(“osco-umbros”)よりの借用語。**

これらの語の殆どは、文学ラテン語に属し、常用されているものもある。(例：*portica*, *lupus*, *bos*, *asinus*, *caseus*, *ursus*, *furca*, *furnus*, *popina*, 純正ラテン語の *coquina* より)。また次のようなものもある：*rufus* (lat. *genuino ruber*), *sulfur* (lat. *sulpur*), *sifilare* > esp. *chiflar* (lat. *sibilare* > esp. *silbar*), *pomex* (lat. *pūmex*)。

**b) ギリシャ語**

ギリシャ語よりの借用は多く、大いに普及したのでラテン語の同意語が常用的に使われなくなったものもある；*petra* は *lapis* に、*chorda* は *funis* (これはイタリア語で *fune* またルーマニア語で *funie* として保存されている)に、*colaphus*(esp. *golpe*, fr. *coup*, it. *colpo*)は、*ictus* に、*spatha* は *gladius* に取って替わった。また次のギリシャ語借用語がある：*phalanga* (*palanca*), *mataxa*(*madeja*), *sagma*, *striga* (it. *strega*), *bursa* (*bolsa*), \**buxta* (gr. *pyxída*; it. *busta*, fr. *boite*), *cara* (esp. port. *cara*), *cata* (esp. *cada*), *thius* (esp. *tío*, it. *zio*, 一方フランス語、ルーマニア語では、ラテン語の *avunculus* は、*oncle*, *unchiu* として存続している)。

直ぐにそれと分かるギリシャ語というものがある、少なくとも意味的にはギリシャ語の内容で語形はラテン語風の“calque”(翻訳借

用語) というものがある、これらは、キリスト教に関する慣用語である (例 : *angelus, diabolus, basilica, ecclesia, presbyter, episcopus, propheta, apostokus, evangelium, asceta, baptizare, martyr, monasterium, coemeterium, diaconus, etc.*)。特に言及すべきものとして、*parabola* という語がある、これは聖職者の言葉使いより常用の言葉に移るときに、*verbum* <sup>45</sup>(esp. *palabra*, fr. *parole*, it. *parola*) という意味を持つようになり、また派生語として *parabolare* (fr. *parler*, it. *parlare*) が出来た。また *-izare* ( *-ízein* より適用) で終わる多くの動詞とか、 *-issa* (例 : *diaconissa*) で終る女性名詞などがある。これらの接尾辞は、ラテン語では生産性の高いものとなり、現在のロマンス諸語でも活用されている。

### c) ケルト語

シーザーによるガリアの征服後に、特に多くなる。しかしこれらのうちの多くは、それ以前の時代に遡るものもある。それらの多くは、技術的なものであり、文学ラテン語にも見られる (しかしキケロ風の古典ラテン語には見られない)。これらの多くは、外国語よりの借用語であると認識されている語、*Fremdwörter* である。しかし一方では、帝国時代の口語ラテン語で、真性の借用語、*Lehnwörter*(同化した借用語) となり、純正のラテン語語彙になってしまったものもある。次のような語がケルト語起源の語である :

*bracca, cucullus, basiare* (*besar*; Catulo の文献に残る)、*caballus, carrus, alauda* (*alondra* ひばり)、*betulla* (*abedul*)、*cervisia* (*cervesa* ビール)、*marga, leuga* (*legua*)、*cambiare*、また民衆的な語として、*beccus* (it. *becco*, fr. *bec*)、*\*caminus, camisia, gamba* (? )、*\*pettia* (it. *pezza*, fr. *pièce*.)。

### d) ゲルマン語

ローマ帝国時代のラテン語にも、幾つかのゲルマン起源の語が

---

<sup>45</sup> *verbum* : 言葉

浸透していた。例えば、*dives*(金持ちの)に替わって\**riccus* が使われ、また、\**blancus*, *ganta*, *aringus* (ニシン), *suppa* (スープ), *sapo* (石鹼：これはケルト語を介してラテン語に入った), *taxo* (狸), *burgus* (城、これは多分ゲルマン語の *burgs* とギリシャ語の *pýrgos* が混合したものである)。ゲルマン語からの翻訳借用語として、*companio* がある、これはゴート語 *gahlaiba* (*ga-*：‘一緒に’、と *hlaibs*：‘パン’) をモデルとして作られたものである。多くのゲルマン系の単語は、その後も、口語ラテン語のみならず(文学)“低ラテン語”(baja latín)などの西方ラテン語に侵入した、またロマンス諸語の形成期にも浸透した。しかしながらダキア地方とかバルカン地方のラテン語に古い時代のゲルマン語要素がまったく欠如しているので、これをネオ・ラテン諸語に伝えられているより広範囲な等語線体系であると解すると、“俗”ラテン語内にゲルマン借用語というものが使われていたとは考えられないことになる。ルーマニア語はその後の時代に、古いゲルマン語の単語のあるものを失ったとしても、そのゲルマン語の単語の多くは、紀元3世紀の後半期には、すでに一般的に使用されていなかったとすべきである。ここでは、それらの語の存在を示すことに限定し、スペイン語の中のゲルマン要素について詳しく見てみることにする。

しかしながら、ラテン語語彙は新しい単語を刷新するばかりではなく(このような語は多く、Meyer-Lübke の語源辞典には、再建形式は約千語位あり、登録されているラテン語語彙全体の10%にあたる)、内容が異なっているものを、古典語と類似の形式にあてることによって、新しい意味を得て刷新されている(アメリカのスペイン語の *lindo* ‘上手に’, *vereda* ‘歩道’ とイスパニアのスペイン語の *lindo* ‘可愛い’, *vereda* ‘小道’ の場合など)。“同意語”の選択における意味の拡張の例というものがある(例：*grandis* ‘大きい’ → ‘偉大な’, *apprehendere* ‘掴む’ → ‘認識する’, etc)。しかし、“俗ラテン語”は、真性の意味変化の多くの例を示している、このプロセスは、以前の語に似た意味を拡張することによって、ま

た新しい意味的な核に関する新しい**特殊化(especialización)**によると、説明することが可能である。実際に、もっとも特徴的な事実としては、**意味するものの核心の移転(desplazamiento del centro significativo)**というものがある。それでしばしばある語が獲得した新しい意味は、すでに以前に主要なものではなく、2 次的なものとして意味的領域に存在していたものである。特徴的な変化の幾つかを示すと：*bucca* は、“頬”という意味から、“口”に移転した。*nitidus* は、“輝く”から、“すっきりした、清潔な”、と替わった。*focus* は、“煙突”から、“火”へ、*camera* は、“丸屋根”から、“部屋”へ、*nepotem* “子孫、甥・姪”が“孫”、または“甥・姪”（参照。fr. *neveu*）へと意味が特殊化した。*sponsus* は“恋人”から“妻”へ、*causa* は、“訴訟”から“物”へ、*mittere* は、“命令する、送る”から“入れる、置く”へ、*hostis* は、“敵”から、“遠征、軍隊”へ、*tempestas* は、（良いまたは悪い）“気象”から、“暴風雨”へ、*sationem* は、“種蒔き、種蒔きの時期”から、一般的な“時期、成熟”に、*infans* は、“離せない人”から“子供”へ、*villa* は、“田舎の家、小さな農場”から、“場所、都市”へ、*parentes* は、“両親”から、“親族”へ（しかしながら、次を参照のこと：fr. *parents*, rum. *părinti* “両親”), \**arripare* は、（舟が）“接岸する”から、“到着する”へ、*cognatus* は、“親族の”から、“義理の兄弟”へ、*orbus* は、“…が欠けている、孤児”から、“盲目の”へ、*pacare* は、“和らげる”から“払う”（債権者を和らげる）へ、*machinari* は、“考案する、画策する、企てる”から、“粉にする”（it. *macinare*, rum. *măcină*）へ、*mulier* は、“女”から、“妻”（lat. *uxor* : 妻）という意味を獲得する。*robur* は、“力”という比喩的意味を失い、“オーク”という意味を保存する。*vectura* は、“運送”から“車”へ移転する。*flebilis* は“悲しい、残念な”から、“弱い”（fr. *faible*）へとなる。特に興味あるのは、比喩的な意図が明確な一連の意味的变化である、例えば、“*testa*” - ‘鍋、鉢’が、‘頭’（it. *testa*, fr. *tête*）という意味を獲得する。*follis* の意味は、“皮袋、遊戯用のボール”であったが、“馬鹿”（it. *folle*, fr.

*fou*) という意味を獲得する。*angustia* は、“不足、欠乏” という意味であるが、“苦悩” (it. *angoscia*, fr. *angoisse*) を指すようになる。*ingenium* は、“気質、心意気” を意味したが、“策略、審査” を意味するようになる。*talentum* は、“重量の単位、バランスを乱す重さ＝分銅” を意味していたが、“意図” (キリスト教のたとえ話を知るようになってその知識の影響により)、また“才能、機知” を指すようになる。*parabola*、“たとえ話” は、“語” を意味するようになる、等々。

同じく、*paganus* は、“田舎者、農民”、また (“兵士:militar” に対しての) “市民” を指していたが、キリスト教の影響によって、(キリスト者は、キリストの兵士と考えられていたので) “異教徒、不信者” をさすようになる。*plicare* は、“畳む、折り畳む” という意味であるが、イベリア半島では (接岸するのに帆船の帆を畳むという行為に適用され) “到着する” (port. *chegar*) という意味を獲得するようになる、一方ダキアでは (大テントを折り畳むという行為に適用され) “出発する、立ち去る” (rum. *plecă*) という意味を得る。比較的頻繁に起る別のタイプの意味変化は、口語の言葉のカテゴリーでの変化で、つまり形容詞が、文の中で使われているときに名詞の代わりに使われるようになる (例えば現代言語で: *tren directo* “直通電車” が *directo* に取って替わったり *bomba atómica* “原子爆弾” が *atómica* に替わるようなものである)。それで例えば、*fontana/agua* / - ‘泉の(水)’ が “泉” (it. *fontana*, fr. *fontaine*, rum. *fântână*) を意味するようになる。*hibernum/tempus* / - ‘冬の(時期)’ が “冬” (it. *inverno*, fr. *hiver*, rum. *iarnă*) となる。*focacia/pasta* / は、“パン生地” (it. *focaccia*) を指すようになる。*pellicia/vestis* は、’*tapado de piel*’ (it. *pelliccia*) を指す。*singularis/porcus* / は、“猪” (it. *cinghiale*, fr. *sanglier*) を、*necare/aguā* / は、“窒息する” (it. *annegare*, fr. *noyer*, rum. *înneacă*) を、*forestis/silva* / は、“柵のない森”、“森” (it. *foresta*, fr. *forêt*, しかし esp. port. *floresta* は、*flor* との混交現象がかかわっている) に、*collocare/in lecto* / は、“横たわる” (it. *coricare*, fr. *coucher*, rum.

culcá) に、*formatius/caseus*/は、“チーズ” (fr. *fromage*, it. *formaggio*) に、*ficatum/iecur*/は、“イチジク付きの肝臓(食べ物)”、“肝臓” (it. *fégato*, fr. *foie*, prov. *fetge*, rum. *ficát*)になる。スペイン語、イタリア語、フランス語、プロバンス語で使われているこの形式のアクセントの変化は、ギリシャ語の *sykōtón* に影響によるものである。

## B) 音声学

言語の音声を作る時の3つの聴覚的特質（音量、強度、音の高低、*cantidad, intensidad, altura musical*）の内の2つは、ラテン語において弁別的音韻価値を有していた：音量（音の長さ）と音の強度（アクセント）の2つである。

ラテン語のアクセントは、高低的、または強度的なものであったのかどうかについての問題は、まだはっきりと解決していない。少なくとも、古典時代においてもラテン語のアクセントは、ギリシャ語と同じように初期の頃には高低的なもの（つまり、音の高低と音調による）アクセントであったとしている言語学者がいる。この理論は、アクセントに関連するラテン語の用語に基づいていて、ギリシャ語の該当用語を単に訳したものであるからである（*accentus* という語そのものは、ギリシャ語の *prosōdía* に基づき模倣翻訳したものである）。それによって、アクセントはラテン語では音楽的抑揚であったとする文法家の指摘があることによる。まず、*Segio* の *De accentibus* に引かれている *Varrón* の一節、このなかでアクセントは、“*velut anima vocis*”であるとしている。更に、ローマ人は、ラテン語のアクセントは、ギリシャ語とは異なるとはしていないこと。強度のアクセントは、古典時代の後のラテン語で発展したのであるとするのであり、4世紀以前にはこの特性について気付いていなかったことには疑いない。このことは幾人かの文法家が明確に指摘している。*Servio* (4世紀)は、アクセントについて次のように述べている：“*in ea syllaba quae plus sonat*”, また *Pompeo*(5世紀)は、“*illa*

*syllaba, quae accentum habet, plus sonat, quasi ipsa habeat maiorem potestatem”.*

このような議論があるが、現在では大部分の言語学者は、ラテン語のアクセントは歴史時代以前より強さアクセントであったとしている。ラテン語文法の用語は、常に該当のギリシャ語をそのまま翻訳した。つまりこのことは、ラテン語文法上のあらゆる諸現象のそれと類似していたということを意味するものではない。更に、ローマ人は、ラテン語のアクセントはギリシャ語のそれとは異なっているとは観察していないという事実にもそれほど重要性を付与すべきではない、またローマ人はそれぞれ、自己の音韻的意識に適用して外国語の音声を解釈していたことはよく知られている。しかしながら、この第2の理論を有利にする導く議論は、歴史時代以前において、また歴史時代の初期においては、ラテン語は語頭音節に強度に関しては強アクセントを有していたということになる（ラテン語は、印欧語の自由アクセントを失い、多分エトルリア語の影響によるものであろう）。それで第2音節の母音の弱化（アクセントのある強音節後の音節として）を説明することが出来る。例としては、接頭辞を持つ複合語で：*capio-incipio, facio-inficio, arma-inermis*。

どちらにしても、この問題は、“俗”ラテン語の特徴付けに関してはそれほど重要なものではない。これまで見てきたように、帝国自体には、アクセントは強弱であったことは明らかである。さらにアクセントは、固有の音韻的価値を獲得し、母音の音量を消失することによって大変に重要なものとなる、一方では母音の音量は存在していたが、アクセントは、二次的な韻律的要素であり、後から2番目の音節の音量のポジションに依存することとなる。もしその母音が長音であるか、またはその単語が2音節の場合には、古典ラテン語では後から2番目の音節にアクセントがあった、また単語が2音節以上で、後から2番目の音節が短音であれば、後から3番目の音節にアクセントが来るのである。それで、音声的に同じような意義

素 (semantema<sup>46</sup>) を区別するのに、量的リズムで十分である。

ラテン語は量的リズムに基づく固定されたアクセントを持っていた時以来、それぞれの語は、次のようになる：a) 最後にアクセントがあるもの（単音節）、b) 最後から 2 番目にアクセントがあるもの（2 音節、または最後から 2 番目の音節が長音である多音節）、c) 最後から 3 番目にアクセントがあるもの（最後から 2 番目が短音である多音節）。

“俗”ラテン語とロマンス諸語は、次に見るような別の理由によってこのような状況を保持していない：通常、アクセントは、古典ラテン語に見られる音節と同じ位置で“俗”ラテン語でも保存されていた。

そして、ラテン語で最後から 3 番目にアクセントのある多くの語は、ロマンス語では、最後から 2 番目にアクセントが来る。しかしこれは、アクセントがその位置を変えたのではなく、“俗”ラテン語での強音節語の母音の弱化と消失によるものである（特に *c* と *l* の間で、また *r, l* と *p, m, d, t* の間で起るのである）。これらは、最後から 3 番目の音節にアクセントがあるものが、最後から 2 番目にアクセントが来るようになる現象である：*dóminus* > *domnu*, *víridem* > *virder*, *óculum* > *óclu*, *aurícula* > *orícla*, *tábula* > *tábla*, *cálidum* > *cáldu*, *álterum* > *áltru*, *sáeculum* > *seclu*, *perículum* > *períclu*, *cólaphum* > *cóplu*, etc.

これは、“俗”ラテン語で一般的な現象であり、これまで引いた

---

<sup>46</sup> **Semantema:** Parte esencial de la palabra que posee el significado léxico en abstracto, esto es sin concretar en ninguna clase o categoría sintáctica, por lo que se corresponde básicamente en el lexema ; p. ej. {ESCRIB} es el semema de una extensa familia formada por *escribir*, *escritor*, *escritura*. etc.

**Semema:** Conjunto de rasgos semánticos o semas que se reúnen en un vocablo lexicalizado; p. ej. el conjunto de semas [AMINADO], [HUMANO], [-VARÓN] y [ADULTO], forma el semema *mujer*. 【Dicc.de lingüística, R. Cerdà,1986】

ロマンス語での継続形式で明らかである。しかしながら、スペイン語、フランス語のような西方のロマンス語では最後から 3 番目の音節にあるアクセントを最後から 2 番目に変える傾向は、東方のロマンス諸語（イタリア語、ルーマニア語）よりの際立っている。東方ロマンス語では、最後から 3 番目にアクセントがある語を多く保存している（例：esp. *fresno, tabla, peine*, fr. *frêne, table, peigne*, it. *frássino, távola, péttine*, rum. *frásin, piéptene*）。

アクセントの位置についての別の変化は、多くの語末母音が脱落することによって起る、そしてフランス語ではすべての単語は、ラテン語からの受け継いでいる語で強音節後の音節の縮小によって最後の音節にアクセントがくるようになる。しかしながら、歴史的視点よりすると、言語の全体の体系に影響を及ぼしているような、明確な変化というものがある。一般的な規則は、アクセントが古典ラテン語にあるのと全く同じ音節で保持されている、というものである。

この規則に反する例外は、相対的に少ない：

- a) “俗”ラテン語では、*muta cum liquida* というよく知られている規則が適用されない（古典ラテン語での *muta cum liquida* とは、閉鎖音+r, l、という音連続は、“位置”を形成することにはなかった。つまり *muta cum liquida* の前では、自然に短母音であったものは、そのまま短母音のままであり、別の子音グループの前で起きているように、アクセントを強調せんとして最後に“位置によって長母音”になることはない。それで、-多音節の単語で、最後から 2 番目にアクセントがある音節について問題とするのであれば、それは、アクセントを持っていなかった。これによって（多音節の語で）最後から 2 番目の音節は、そこにある母音に 1 つ以上の子音が後続しているならば、常にアクセントがある：lat. cl. *íntēgrum* > lat. vulg. *intēgru* (entero), *cáthēdra* > *catēdra* (cadera), *ténēbras* > *tenébras* (tiniebla), *cólūbra* > *colúbra* (culebra)。

- b) 接頭辞付きの複合動詞では、アクセントは動詞の語根に残り、接尾辞へ移行することはない。それによって複合語であるという意識は常に保持されることになる：*renēgat* > *renégat* (reniega), *recīpit* > *recípit* (recibe), *implīcat* > *implícat* (emplea)。接尾辞にあるアクセントは、複合語としての意味を失うような場合にのみ保持されるのである：*comēdit* > *come*, *collōcat* > *cuelga*。しかしこのようなケースはノーマルではない、一般的には複合語としての意味は保持されるばかりではなく、複合動詞の分析を再度おこない、初源的形式をその語幹に回復させるのである：*attingit* > *attangit* (atañe), *displicet* > *displacet* (it. *dispiace*), *continet* > *contenet* (contiene)。
- c) 古典ラテン語の直説法の現在完了形の 3 人称複数の活用語尾の *-ērunt* は、*-ērun*t になり、*-ēre* で語尾が終わる形式との類推によってアクセントが付けられるようになる (*dixērunt* - *dixēre*, *fecērunt* - *fecēre*)、一方では“俗”ラテン語は、保持され古い形式を復元している、*fēcērunt*, *díxērunt*, これらによって次の形式を説明できる、fr. *firent*, *dirent*, it. *fécero*, *díssero*, rum. *feáceră* (古形)、*zíseră*。しかしスペイン語ではこのような場合には、*-ērunt* (*dijeron*, *hicieron*)で終わる古典形式を持続させている。
- d) *hiato*<sup>47</sup>の位置にある母音の *ī*, *ē* の場合には、アクセントは、次の母音へと移行する：*paríetem* > *parétem* (pared), *avíolum* > *aviólum* (abuelo), *filíolum* > *filiólum* (hijuelo), *mulíerem* > *muliérem* (mujer) 。もし *hiato* の位置にある母音が、*u* である場合には、この母音は、消失し、アクセントがその前の音節に移行するのである：*battúiere* > *báttere* (fr. *battre*, it. *báttere*, rum. *bate*), *consúiere* > *cósere* (rum. *coase*)。
- e) *iste*, *ille* の斜格の場合には、アクセントは最後の音節に移行す

---

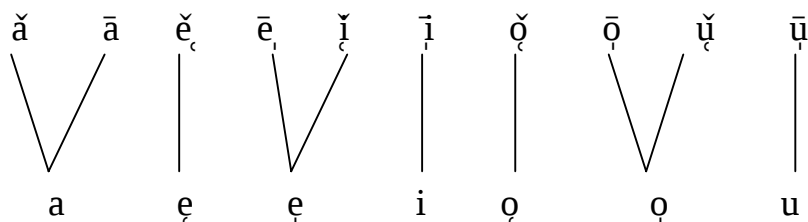
<sup>47</sup> *hiato*: [音声学] 母音分立(連続した母音が二重母音とならずに別の 1 個の音節を形成すること)

る傾向にある (Plauto に *illum, illúm* がある)。スペイン語では、*él, ella* は、*ille, illa* のアクセントを継続させているが、*lo, la* の場合には、*illúm, illám* をアクセントを継続させた。同じくことが、*hic, hac* (cf. esp. *allí, allá*) の影響によって、*illic, illac* (> *illic, illác*) に起きたのである。

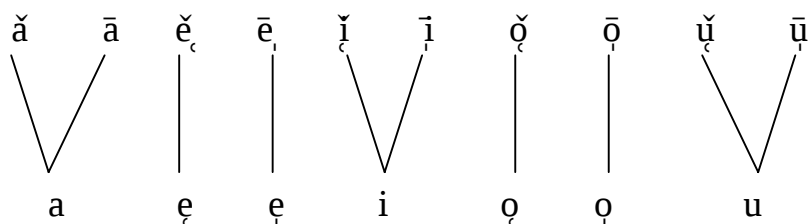
- f) アクセントの種々の変化は、動詞の語尾変化形式の変化によって起っている (三人称が二人称へ、またはその逆への移行) :  
例 : *cádēre* > *cadēre* (caer)。
- g) 最後として、アクセントが変化する例が少しではあるが、存在する。それぞれに対する説明は特有なものであり、単独の語で起きている。それで *secāle* は *ségalo* (cf. it. *ségala*, fr. *siègle*, しかしながらルーマニア語で、*secără*) へとなり、また *ficátum* は、ギリシャ語の *sykōtón* の影響によって *ficatum* (郷土) となる。(ラテン語で多音節の語で、最後の音節にアクセントがあるものは無いが、ギリシャ語の最後の音節にアクセントにあるものを、最後から 3 番目の音節にアクセントにあるものとする ; 例、*parabolē - parábola, epistolē - epístola*。 *trifólium* は、\**trífolum* (esp. *trébol*, fr. *trèfle*, しかし it. *trifoglio*, rum. *trifoiu* < *trifolium*) となった。ギリシャ語風のアクセント付けは、ラテン語の規範に反して、保持されている、例えば、*éremus* (*erēmus*), *bútyrum* (*butýrum*): esp. *yermo*, it. *ermo*, *burro*: 特にスペイン語関してみれば、*Isidro* (lat. *Isidōrus* > *Isidoro*), *Ebro* (lat. *Hibērus*)。

母音の**音量**は帝国時代の口語ラテン語 (紀元 2 ~ 3 世紀) では、失われた、そして**音質**へと替わった。これによってラテン語の母音体系は、根本的な変化を蒙ることになる。それで歴史言語学での特有の言語を理解する必要がある : このことは、音量がなくなったということではない。音量は多くの場合に規範として保存され、文体的な価値を伴って残ったのであり、音質が変化として発生したものではない。音質は以前から存在している (短母音は明らかに開音で

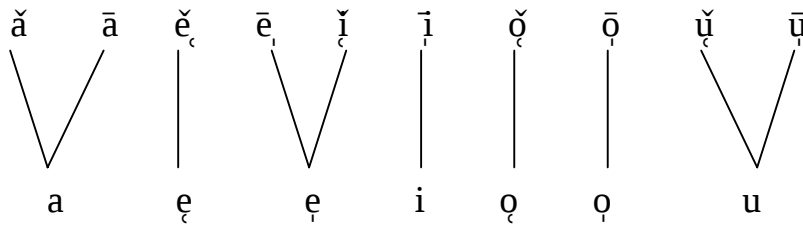
あり、長母音は閉音であった)、しかしながら、**音量は弁別的音韻価値を失う**、ということではなく、その逆に音質（以前は単に聴覚的な実現体の“非関与的”なものであった）が、弁別的音韻価値を得ることになる。これによって言語体系を根本的に変容することとなるのである。同時に、音調の類似性によって短音（開音）の *i* と短音（開音）の *u* が、それぞれ閉音の *e* , 閉音の *o* と混同されることとなる（碑文で、*carissimus, simul, minus, columnu* の代わりに *karessemus, semul, menus, colomn* が見られる）。このようなことで、古典ラテン語の 10 個の母音 (*ă, ā, ě, ē, ĭ, ī, ŏ, ō, ŭ, ū*) は 6 個になる (*a, ɛ, ɛ, i, ɔ, ɔ, u*) :



このような枠組みによって、スペイン語、ポルトガル語、カタルーニャ語、フランス語、プロバンス語、イタリア語の母音体系を説明することが出来るが、サルディニア語の母音体系を説明できない、この言語では、*ĩ, ŭ* はその音調を保持している（例：*pilu, pira, gula, furca, guta*。一方スペイン語では、*pelo, pera, gola, horca, gota*）、またダキアでは、*ĩ* は *e* (*siccus > sec*) になり、*ŭ* は *u* として（アルバニア語のラテン語要素に起きているような、*gură, furcă, gută*）が残存している。それでサルディニア語の枠組みは次のようなものである：



また、ルーマニア語では、



二重母音の *ae* と *oe* は、それぞれ  $\text{ȅ}$  と  $\text{ȋ}$  に単音化した: *quaerit* > *querit*, *caelum* > *celum*, *poena* > *pena*。(“俗”ラテン語の  $\text{ȅ}$  は、*e* また *ae* から、また *e* は、 $\bar{e}$ ,  $\bar{i}$  また *oe* から派生したのである)。これらの単音化は、“俗”ラテン語の時代とされる以前に既に一般的なものであった。また粗野な、民衆的な言葉ですでに単音化されていた2重母音 *au* は、多くの地域の話し言葉で *o* に短縮されていた: *auricula* > *oricla*, *aurum* > *oru* (しかしルーマニア語では現在まで、保存されている、*aurum* > *aur*: 同じことが、サルディニア語、南部イタリア、またプロバンス語の一部でも起きている)。次の音節に  $\bar{u}$  があると、この二重母音は、*a* へ短縮された: *Augustus* > *Agustus*, *augurium* > *aguriu* (esp. agosto 8月, *agüero* 前兆); 同時に、新しい二重母音の *au* が、母音間の子音の脱落によって現われてくる; *avica* > *\*auca*, *parabola* > *\*paraula*, *fabula* > *\*faula*, *cantavit* > *\*cantaut*。

また *hiato* に位置にある母音が縮小（または子音化、または脱落）する。それで、次のような縮小する語形がある: *prehendere* > *prendere*, *cohortem* > *corte*, *parietem* > *paretem*, *quietus* > *quetus* (*quedo*); *hiato* に位置にある  $\bar{i}$ ,  $\bar{e}$  は、通常 *y* (*i* 子音) へ変わる: *facĭo* > *\*fakyo*, *habĕat* > *\*abyat*, *sapĭat* > *\*sapyat*, *vinĕa* > *\*vinya*; *hitato* にある  $\bar{u}$  は、しばしば脱落する: *mortuum* > *\*mortu*, *battuo* > *\*batto*, *quattuor* > *quattor*, *ianuarius* > *\*ienariu*, *februarius* > *febrarius*。しかしある場合には、*hiato* が保持される; それで例えば、*diem*, *pium*, *fui*, *deus*, *meus*, *tuus*, *via*, etc。

古典ラテン語の子音は次のような枠組で示すことができる：

|        | 唇音           | 唇歯音 | 歯音・歯茎音 | 硬口蓋音         | 軟口蓋音 |
|--------|--------------|-----|--------|--------------|------|
| 閉鎖音    | p b          |     | t d    |              | k g  |
| 摩擦音    | w<br>(u 子音.) | f   | s      | y<br>(i 子音.) |      |
| 振動音・流音 |              |     | r l    |              |      |
| 鼻音     | m            |     | n      |              |      |

この枠には、子音の *h* は示されていない、これは綴字では保持されているが、すでにキケロの時代の紀元前 1 世紀には発音されなくなっていた。それで碑文では次のように表記されている：*omo (homo)*, *abere (habere)*, *hinsidias* (これは *insidias* を示すための書かれているもので、訂正のし過ぎ(*hipercorrectismo*)<sup>48</sup>などがある)。

このような枠組みは“俗”ラテン語で本質的に変容されることはなかった（唯一の重要な新規な音は、硬口蓋音が新たに出現したことである）、また単語内部で幾つかの転移ということが起きた：

#### P - 保存された

B - 2 世紀以後、この音は、*w(u 子音)* としばしば混同された、特に語頭に於いて、特にイタリア、アフリカで起きた。碑文では次のようなものが見られる；*debere, bene, voce* の代わりに *deuere, uene, boce* が使われている；(この現象はその後、スペイン語で特有なものとなり、このことがイベリア半島のラテン語は、アフリカのラテン語と多くの等語線を共有しているのは、興味深い点である)。

T - 民衆の言葉では、すでに古典時代において語末で脱落していた（キケロは、語末子音の *s, t, r* を発音しないのは、“粗野な”ものであると述べている）子音は、ほとんどすべてのローマ帝国内では消失していた：*cantat > canta, cantant > cantan* (北ガリア

<sup>48</sup> *hipercorrectismo* = *ultracorrección* 訂正のし過ぎ

とサルディニアでは保持されていた)。

D- 保存されている

K- *a, o, u* の前では *k* は保存されたが、*e, i* の前にある *k* は、ほぼすべてのローマ帝国内（例外としてサルディニア、ダルマチア）で調音点が前方へ進み、口蓋音化し、破擦音とか擦音になる（ $> t\check{s}, ts, s$ ）。後期の時代の碑文では、次のような形式をみることができる：*paze, fesit, Bintcente, intcitamento*（次の語の代わりに：*pace, fecit, Vincente, incitamento*），これらの綴字は、新しい発音を反映している。硬口蓋音化または擦音化の段階とか、これらの現象が何時起きたのかを正確に設定することは困難である。学者達は、3 世紀から 6 世紀の間に起ったであろうとしているが、その正確な時期については見解が分かれている、ほとんどの人は、4 世紀頃ではないかとしている。またこの調音点の移動はローマ帝国のすべての地域で、またすべての社会階層の発音で同時代に起きていたのかについては、はっきりしない。一方ではある話し手は、*tš* とまたは *ts* と発音していたろうが、別の人は、古典ラテン語時代の発音を保持し、軟口蓋音として *k* と発音していたのである。どちらにしろ、東方のロマンス語（イタリア語、ルーマニア語）では、今日まで *tš* を保存し（cf. it. *cielo, cena*, rum. *cer, cină*）、一方西方ロマンス語ではそれ以後の発音相（ $ts > \theta, s$ ）を示している。サルディニア語では、古典時代の軟口蓋音は、すべての母音の前では、不変のまま保存されている（logud. *kelu, kerbu* – *cielo* 空, *ciervo* 鹿）。また南方ダルマチア地方(Ragusa)でも同じことが起っているし、北方ダルマチア地方(Veglia)では *i* の前でのみ硬口蓋音化し、*e* の前では保存されている（cf. *kaina, plakar* – *cena* 夕食, *placer* 喜び）。

G- K と同じように、この *g* は、*a, o, u* の前では保持されたが、ほとんどのローマ帝国内では *e, i* の前では、調音点が前方へと進み、厳密に限定できないがその後、*y*(硬口蓋摩擦音)および *dž, ž* へなった。K と同じように、*g* の調音点の移動は、サルディニア語

とかダルマチア語では生起しなかった。

W- (*u* 子音 ; 綴字では、*u*, *V*) この音は、*b* また母音 *u* としばしば混同された (**Appendix Probi**<sup>49</sup>に、”*rivus non rius*”という表現がみられる)。

F- 保存された。

S- 紀元 2 世紀以後に東方ロマニア (Romania) (イタリア、ダキア) では、語末では *s* は消失したが、西方ロマニア (イベリア半島、ガリア、サルディニア) では保存された (これは、学問的影響、文語としての言葉の影響によるが、場合によっては、古ラテン語とか民衆の言葉では既に消失しているものもある)。これらの事実は、すでに見てきたように、名詞とか動詞の語尾変化に影響を及ぼすもので、非常に重要な現象である。語頭の *s* は、この音の後に別の子音が続いている場合には、紀元 2 世紀以後、母音 (*i*, または *e*) を前に置くようになる、特に母音で終わっていない語が前にある場合には、そのようなことが起る : *illa spatha*, しかし、*cum ispatha*; *illa schola*, しかし *in iscola*; *spiritum* > *espiritum*。この現象は、現在もガリアとかイベリア半島のロマンス語を特徴付けている。

Y- (*i* 子音 ; 綴字では *i*) この音や保持されている。

R- 一般的に保存される。ある地域 (ダキア、ルシタニア) では語末では消失する : *frater* > rum. *frate*; *mater, pater* > port. *mate, pate* > *mãe, pãe*。

L- 通常は、保存されるが、しかしながら、子音の前、または子音が 2 音連続しているときには ( *alba, alter, stella* ), *u* に近づき、より軟口蓋音の調音位置を取ることになる。

M- 語尾では消失する。すでに古典時代とか、また文学ラテン語で既に、発音されず、前の母音の鼻音化することになる (Quintiliano:

---

<sup>49</sup> [http://www.ling.upenn.edu/~kurisuto/germanic/appendix\\_probi.html](http://www.ling.upenn.edu/~kurisuto/germanic/appendix_probi.html) で見ることができる。

“*etiamsi scribitur tamen parum exprimitur*”)。また単母音の語の場合には、保存される (*quem*, esp. *quien*, *rem*<sup>50</sup>, fr. *rien*)。

N- 一般に保存されるが、語末の場合には消失する : *examen* > *exame*, *aeramen* > *aerame*。

ある子音グループでも重要な変化が起る :

NS > S: *mensa* > *mesa*, *sponsi* > *sposi*, *insula* > *isula*, *consuere* > *cosere*, *constat* > *costat* (cf. esp. *mesa*, *esposo*, *isla*, *coser*, *cuesta*)。

RS > SS: これは既に紀元 1 世紀にイベリア半島で起きていた (App. Pr. “*persica non pessica*”)

KS > S : (*ex* > *es*, *xt* > *st*): *dexter* > *dester* (inscr.)。

子音+Y : これは最も重要な子音グループであるが、これらは、安定感を欠いているものである。Y の影響によって、この音の前に来る子音は、しばしば硬口蓋音化 (cf. 俗的スペイン語の発音では、*Antonio* の代わりに *Antoño* とされる) されたり、または擦音化する。最も影響を受ける子音グループは、TY, KY, DY, GY, LY, NY-TY, KY であり、綴字で間違えているものが示しているように紀元 3 世紀より 1 つの硬口蓋音 (多分 *t'*) と混同されるようになる : *concupiscentia* の代わりに *concupiscencia* が、また *acaicia* の代わりに *acatia* に、また *mendacium* の代わりに *mendatium* に、また *eruditio* の代わりに *erudicio* に、また *patientiam* の代わりに *pacientiam* と記述されている。またその後 (4 世紀) に、硬口蓋音は、破擦音 (*ts*) となり、擦音となることもある、(綴字によると次のようなものがある、*proinse* (*provinciae*), *aecletiae* (*ecclesiae*), *Vincentza*, *Terensius*, *Laurenzio* などがある)。ty に関しては、Papirio (s.V) で興味深い文書がある : “*iustitia cum scribitur tertia syllaba sic sonat quasi constet ex*

<sup>50</sup> ラテン語 : *rēs* : 物、状態、動機の対格 ; フランス語の *rien* は、“何も…ない”、“無”を意味する。

*tribus litteris: t, z et i.*”。 *DY* とか *GY* はしばしば、1 個の硬口蓋音になる、綴字によると、*fastidium* の代わりに *fastigium* に、また *corrigiae* の代わりに *corridiae* に、*anoget* (<\*inodiat), また *Y* になることもある (cf. *corrigia* > esp. *correa*, *adjuto* > esp. *ayudo*; App. Pr. – “*calostegis non calosteis*”)。

しかしながら、かなり早い時期（2 世紀）より、*DY* は擦音化し、*Z* へと変わっていた。綴字によって推定できるのは、*hodie* の代わりに *oze* が、また *baptizare* (*Per. Aeth.*) の代わりに *baptidiare* となっている。またギリシャ語の *zeta* の文字を *di* で、またその逆に書いている (cf. *medium* > it. *mezzo*, rum. *miez*)。 *LY*, *NY* はローマ帝国時代に既に硬口蓋音化していて、それによって *L'*, *N'* という音になっている (*filia* > \**filya* > \**fil'a*; *vinĕa* > \**vinya* > \**viña*)。このことを示すかなり昔の綴字は存在しないが、ロマンス諸語の結果をみるとこれについての疑問の余地はない。

*KW*, *GW*- (書くときには、*qu*, *gu* となる) *a* の前では通常保存され、またこれ以外の母音の前では、唇音的要素(*w*)を失う。Appendix Probi で、“*coquens non cocens*”, “*coqui non coci*”, cf. *quando* > esp. *cuando*, it. *quando*; しかし *quem* > esp. *quien* (つまり *kyen*), *quis* > it. *chi*。

### C) 形態論

（ラテン語の以前の統合的形式の代わりに、分析的で迂言的形式へ向かう強い傾向に関して）基本的な変化は、ローマ帝国時代の口語ラテン語の形態論的体系で起きていた。このような根本的な変化が、完了したときには、印欧諸語では 1 世紀ころまで残存していた古いタイプから離れ、ラテン語の言語タイプそのものを根源的に変容することになるのである。若し言語的变化が精神性とか世界観の変化を反映しているとする、この変化はローマ帝国時代のラテン語の文法体系が受けた変容の中で論証することができるであらう。

う。このような変化によってネオ・ラテン語の多様性は、“古典”ラテン語を“別の”言語としてしまうことになる。

5 個の語尾変化は、3 個に縮小する : I, II, III。第 4 の語尾変化は、既に古典ラテン語に存在していたパラダイムの活用語尾の実詞（木の名称）などと共通する語尾活用をするようになり第 2 語尾変化と混同することになる。また余り多くなかった第 5 語尾変化の実詞は、一部は第 3 語尾変化に、また一部は第 1 語尾変化へと移行する。第 5 語尾変化は、語尾活用において第 3、5 語尾変化とある程度の類推形を示している（既に古典ラテン語では 2 つの形式を持つ実詞があった、一つは第 1 語尾活用であり、別の 1 つは第 5 語尾活用であった : *avaritia* と *avarities*, *calvitia* と *calvities*、しかしその後、第 5 語尾活用は排除され、第 1 語尾活用が保存される。

**斜格**(*casos obliquos*)は、**対格**(*acusativo*)と混同されるようになる、つまり文法的な格が 2 つに縮小するという変容を示していた : 1 つは、**正格**(*caso recto*)であり別の 1 つは、**斜格**(*caso oblicuo*)となる。

**中性**は、**男性**と混同する、特に（語尾の *m* が消失することによって）第 2 語尾変化と混同する。しかし一般的に、中性形式は、第 3、および第 4 語尾変化では無くなる（第 4 語尾変化の中性名詞のうちの若干のものは、第 2 語尾変化へと移行する）。

第 3 語尾変化では、形容詞の 3 種は、つまり **3 つの形容詞の語尾形式**は 2 つのカテゴリーへと移行することになる。また第 3 語尾変化の形容詞が第 1、また第 2 の語尾変化へと移行するものがある。Appendix Probi には、“*acre non acrum*”, “*pauper mulier non paupera mulier*” (cf. *Cena Trimalch.*, 古典語の *pauperum* の代わりに *pauperorum*), “*tristis non tristus*”。

-*ior*, -*ius* で終わる統合的な比較形の語形式は、消失し、*magis* とか *plus* をつける迂言形式に取って替わる（古典ラテン語の, -*eus*, -*ius*,

-uus で終わる形容詞でも既に普通であった : *idoneus*<sup>51</sup>, *egregius*<sup>52</sup>, *vacuus*<sup>53</sup> )。

数詞には、ある程度の標準化が導入され、*duo* の代わりに *du* が、また *ambo* の代わりに *\*ambi* という類推形によって、形容詞へ同化するようになる。17 から 19 までの数詞 (スペイン語の場合には、16 も) は、膠着形式から分析的形式へ移行する : *dece ac septe*<sup>54</sup>, *dece ac octo*<sup>55</sup>, *dece ac nove*<sup>56</sup>。10 個ごとの数詞では、短縮される : *viginti* > *venti*, *triginta* > *trenta*。

代名詞と代名詞的形容詞<sup>57</sup>の内、*ego* は、*\*eo* となる (sard. *eo*, esp. *yo*, port. rum. *eu*, it. *io*, ant. fr. *gié*, prov. *iéu*)。 *ille*, *ipse* は、第 3 人称の人称代名詞として使われるようになる。前接詞の所有形は、その数が少なくなる : *frater meus* > *meus frater* (しかし南部イタリアとかダキアでは起らなかった、これらの地方では前接詞的形式が保持された : cf. rum. *frate-meu*, *mamă-mea*); *vester* は、*oster* に対する類推によって古形式の *voster* になる。 *hic* は、しばしば *is* と交替し、また *ille* と交替することになる。 *idem* は、*id ipsum* と替わって、その後消失する。また大きな表現性を獲得するために代名詞が膠着することになる : *iste ipsa*, *ecce iste*, *\*metipse* (*istu ipsu* > it. *stesso*; *ecce istu* > rum. *acest*; *\*metipsum* > it. *medesimo*, esp. *misimo*, fr. *même*), etc. *Alter* は、*alius* の代わりになり、その後消失する。 *uter* は消失する。 *quidam* と *aliquis* は、それぞれ *certus* (*homo quidam* > *certus homo*) と *alicunus*

---

<sup>51</sup> *idōneus*: 適した

<sup>52</sup> *ēgregius*: 卓越した

<sup>53</sup> *vacuus*: 空の

<sup>54</sup> *dece ac septe*=10 と 7 = スペイン語 : *diecisiete* (*diez* + *y* + *siete*)  
 スペイン語の 16 は、*dieciseis* (*diez* + *y* + *seis*)

<sup>55</sup> *dece ac octo*=10 と 8 = *dieciocho* (*diez* + *y* + *ocho*)

<sup>56</sup> *dece ac nove*=10 と 9 = *diecinueve* (*diez* + *y* + *nueve*)

<sup>57</sup> *adjetivo pronominal*

(esp. *alguno*)と交替する。

また、動詞体系が、根本的に変容する。異態動詞(verbo deponente)は、能動態になる：*sequor*, *machinor*, *nascor* は、\**sequo*, \**machino*, \**nasco* (cf. *Cena Trim* で、*argutatur* の代わりに、*argutat* が、*loqui* の代わりに *loquere* が使われる)。多くの語尾変化形式が消失し、(助動詞を付け) 分析的形式に取って替わる：-*bo*, -*bis*, -*am*, -*es* で終わる未来不完了形は、*habeo* または *volo* を伴って迂説的形式に取って替わる (*cantabo* に代わりに、*cantare habeo*, *cantare volo*, その後には、*habeo* が膠着して、*cantar-é*となる)。完了形の *feci* がある一方で、*factum habeo* または *habeo factum*(*he hecho*)という完了形が出現する。未来命令形は消失し、現在命令形がこれに替わる。また接続法の命令形が消失する (しかしサルディニアでは保存され、ダキアでは一部保存される)。完了不定詞は、消失し、迂説的に表現されるようになる (lat. *cantavisse* – esp. *haber cantado*)。未来能動分詞は、動詞としての価値を失い、単なる (形容詞的) 語彙の要素となる。また動詞的中性名詞<sup>58</sup> (所謂、未来能動的分詞) は、消失し単なる動名詞と混同される、またこれによって受動的、能動的な迂説的語尾活用が消失する。

また語尾活用が別のものに移行することがある。第3語尾活用の -*io* で終わる動詞 (*capio* のようなタイプ) は、*audio* タイプとの類推で (これによって多くの形式が共通になる)、第4語尾変化になる：*cupěre* は、*cupire*(古ラテン語であった語形)になり、また *mori*<sup>59</sup> は、*moriri*(すぐに *morire*)になる。cf. App. Pr. “*fugere non fugire*”。俗ラテン語にすでに *ēo* > *īo* という変化があったが、第2語尾変化は、

<sup>58</sup> gerundivo=Participio pasivo de futuro con flexión casual que en latín desempeña la función de adjetivo atributivo o de predicativo; p.ej. lat. *cupidus videndae urbis*, deseoso de ver la ciudad.

<sup>59</sup> morior, 私は死ぬ、verbo deponente

第4語尾変化に替わる (*ēre* > *ire*)。ロマンス諸語では、この語形を保持し、\**florire*, \**implire*, \**lucire*, \**putrire*, \**putire*, \**languire*。一方、(*ĕre* で終わる)第3語尾変化の動詞は、-*ēre* で終わる動詞と混同され、第2語尾変化へ移行する : \**sapĕre*, \**cadĕre*。また逆に、-*ēre* で終わる動詞が、(*ĕre* で終わる)第3語尾変化へと移行する : *ridĕre*, *tondĕre*, *respondĕre*, \**mordĕre*, *augĕre*, *miscĕre*, \**torquĕre*。変則不定詞の、*posse*, *velle* は、語が長くなり、語尾変化でしめす語形に基づいて、規則化することとなる : *potui*, *volo*, *volebam* (\**potere*, \**volere*)、また同じく、*esse* は、\**essĕre* となる ; *sufferre* > \**sufferĕre* > \**sufferire*, *offere* > *offerĕre* > *offerire*, *sequi* > \**sequĕre* > \**sequire*。

-*ĕo*, *io* で終わる現在形は、しばしば *y* という要因は消失する : \**sento*, \**dormo*, イベリア半島また東方では、*morior* > \**morio* > \**moro* (しかしながら、一連の動詞で *y* は、保持 *s* れている : *debeo*, *doceo*, *iaceo*, *maneo*, *placeo*, *soleo*, *taceo*, *teneo*, *valeo*, *video*, *audio*, *salio*, *venio*, *frugio*, *capio*, *sapio*, etc)。-*isco* で終わる起動動詞の形式が作られる : (*floreo* <sup>60</sup> > \**florisco*, *oboedio* <sup>61</sup> > \**oboedisco* )。複数形の語尾変化は、-*are* で終わる動詞の語尾と混同する。非常に使われる動詞、つまり *habere*, *stare*, *dare*, *vadĕre*, *facĕre* などは、“俗”ラテン語は、ロマンス諸語より推測されるところによると、古典語とは異なり、直説法現在形の固有の形式を持つようになる : それで *habeo* から、\**hayo*, \**has*, \**hat* … \**habunt*; *stare* より、\**stao* が、*dare* より \**dao*, \**daunt* が、\**vadere* より \**vao*, \**vaunt* が、*facere* より \**face*, \**fao*, \**fas*, \**fat*, \**famus*, \**fatis*, *faunt* が作られた。 *posse* と *velle* の現在形は、(\**potere* や \**volere* から) 規則的になる。これに反して、*esse* より作れた直説法現在形は保持される。

---

<sup>60</sup> 花盛りである

<sup>61</sup> 従順である

命令形と直説法の現在形の4つのタイプは、3つに縮小される。直説法の不完了計は、*-bam, -bas, -bat* という語尾変化がある一方で、次のような語尾変化が現われる：*\*ía(m), -ías, -íat, -iámus, -iázis, -íant*。直説法の完了形の*-avi* または*-ivi* は、*-ai, -ii* へ短縮する。*dedi* をモデルとして、*vendidi* という類推形式が作られる。第3語尾変化の完了動詞の語尾*-ui* と*-si* が混同される：*\*movui, \*comovui, \*bibui, \*recepui, \*repui, \*stetui, \*fransi, \*tolsi, \*volsi, \*quaesi, etc.*

*cantaram, cantasem* などの収縮した形式は、*cantavěram* とか *cantavissem*(アウグスト以後、短縮形が通常のものとなる)などの長い形式を排除し、大いに普及する。

受動形式は、*esse* を助詞として使い、完全に消えてしまう（この *esse* は完了形のために古典ラテン語でも使われている）が、新しい基礎に基づいて作れる。受動相の内に残存形が残ることがある：*-atus, -itus, -utus* で終わる過去分詞は今日にいたるも、過去の意味ではなく、受身の意味が保存されている。この分詞形では、*-tus, -sus* で終わる語形が多く作られることになる：*\*offertus, \*persus, \*faltus, etc.*

結論：現行の発展ばかりではなく、ラテン語の動詞体系での真の革新というものを目撃することになる。(En conclusión: más que a una corriente evolución, se asiste a una verdadera revolución en el sistema verbal latino.)

（これまで見てきたように、代名詞に加えて）直示的語<sup>62</sup>や、活性詞<sup>63</sup>や、関連詞<sup>64</sup>に関して見ても、根本的な変容が介入する。それで（複合語によって）数が増えることになる、**場所の副詞**では、

<sup>62</sup> déicticos

<sup>63</sup> actualizadores

ある場所に存在していることと、ある場所へ向かう運動を指す副詞の区別がしばしば失われる (*locus ubi* と *locus quo* との間の区別、つまり、まさに問題となっている場所と方向性との間の区別)、また古典ラテン語での別のニュアンスなどがある。時間に関する副詞に関しては、*hodie* が保存されている (esp. *hoy*, port. *hoje*, it. *oggi*, fr. *hui* [*aujourd'hui* においての])、または失われることがある、*cras* は *mane* からできた *mane* に交替し (rum. *mîne*, it. *domani*, fr. *demain*) ; *nunc* や *olim* は余り使われなくなる。

やり方に関する副詞は、若干保存されているもの (*bene*, *male*) を除けば、それに対応する形容詞の中性形式を取るようになる。それで、(語尾の *m* が脱落して) 第1と第2の語尾変化の形容詞から派生した語は、形容詞の男性形と混同する、そして第3語尾変化の形容詞からの派生語は、*e* で終わることになる(これによって、*fortiter* > *forte*)。更に、(キリスト教の影響によって)個人の精神的活動に拘ることによって、形容詞の女性形とか、実詞 *mens* の奪格などを伴い新しい副詞的形式が創造された (*clara-mente*, *fortemente*)、これらの形式はその後、膠着化し、スペイン語であるとか、西方ロマンス語のすべてで通常の副詞的形式となる。

“俗”ラテン語で非常に特有なのは、空間的で時間的に限定するために作られた新しい“統合的”前置詞がある：*abante* (it. *avanti*, fr. *avant*), *in-abante* (rum. *înainte*), *de subtus*, *de foris*, *de intus*, *de trans*, *de retro*, *in contra*, etc。

## D) 統辞論

動詞体系で受けた変容に似ている革新は、統辞論においてもみられる。ラテン語の文のすべての構造は根本的に変容された。一般的には、文は複合的倒置法を捨て、より単純なものとなる。単純化し

---

<sup>64</sup> relacionados

た文章は、既に古典ラテン期に文学語となっていて、従属文よりも並列文を好むようになる。語順はより固定されるようになり、統合的な連辞は、分析的なものとなった。

話し言葉では、限定詞としては新しい形式が現われる：*ille, unus* は、冠詞またはほぼ冠詞としての価値をもって使われるようになる。それで *Vulgata* では、*homo ille* は、“その男”を指すのではなく、単に“男”を指すようになる。

斜格の語尾変化が、対格と混同したので、属格の代わりに *ex, ab*, また *de* を対格に付けて使われるようになる：*urbs Romae, timor Dei* というような連辞で使われる。与格（間接補語）の代わりに、前置詞 *ad* を付けて対格（または一般的斜格）が使われる。

3人称の所有形、*suus, sua, suum* などの複数形は、指示詞の *is, ille* の属格に交替する、しかし *suus, eius, illius* の間での違いは失うことになる。

これまでも見たように、形容詞の比較形は、まず *magis* を伴って作られ、その後は *plus* を伴うことになる（ダキア、イベリア半島などのローマ帝国の外縁部では、*magis* が保存され：*rum. mai, esp. más, port. mais*、一方イタリア、ガリアでは、*plus* が使われる：*it. più, fr. plus*）、また比較級の補語は、奪格で構成されることはなく、*quam* とか *de* が使われる（*magis fortis quam, magis fortis de*）。*-issimus* で終わる最上級は、使われなくなり（しかしこれはその後教養語の影響により再導入されるようになる）、また *maxime* の代わりに *multum* が分析的形式で使われる（cf. *esp. muy bueno, it. molto buono*）：最上級の補語は、*de, de in (ex, inter* の代わりに)を伴って構成される。

不定詞付きの対格は、通常 *quia* を伴い通常の従属文に取って替

わる (cf. *Cena Trimal.* “*dixi quia mustela comedit*”<sup>65</sup>)。

場所の補語では、ある状態にあることと、運動していることの間の区別は、(それぞれの副詞で) しばしば混同され、前置詞なしの場所の補語は使用されなくなる (*Rome, Roman* は、*in Roma, ad Roma* に移行する)。一般に、前置詞のない補語は珍しいものとなる：持続に関する補語は、名詞グループとして保存される (*rognamit tres annos*)、また価格とか価値に関する補語が保存される (*constat tribus assis*)。原因に関する補語は、*ob, propter* と奪格とか対格で作られるのではなく、*pro* (esp. *por*) を伴って作られる；道具に関する補語に表現は、前置詞の *cum* を使い、同伴に関連する補語と混同される。

形態論と同じく統辞論に関連して興味あることは、動詞の迂言的表現である。未来形を作る時に、*habeo* とか *volo*(または *debeo*)を伴う表現は、膠着し“単純な”新しい未来形が作られる。類似の迂言的表現は、過去分詞を補語とするものである：*habeo coltellum compratum*<sup>66</sup> (文字通りに“私は、買った小刀を持っている、小刀を買って持っている<sup>67</sup>”)、これによって合成過去分詞の起源となる (esp. *he comprado*)、そして、動詞の *habere* はその意味素の価値を段々に失い、単純助詞になる；つまり *habeo hoc factum* は *hoc feci* と同価となる。動詞の迂言的表現とか、再帰的形式は、単に受動相を表すようになる：*(dicitur > se dicit, prohibetur > se prohibet)*。

また同じように、基本的な変化が、文の形式に介入することにな

<sup>65</sup> “イタチが食べていると、(私は) 云った”。

<sup>66</sup> *coltellum*= 古典ラテン語：*cultellus* 小刀

*compradum* = *comparāre* ‘買う’の完了分詞形

<sup>67</sup> スペイン語での表現は、次のようにされている：*tengo un cuchillo comprado, tengo comprado un cuchillo*

る。

否定文では、*non* が一般化し、ほかの否定詞、*haud* などは完全に消失し、これに取って替わる。また（古典ラテン語では許されていなかった）二重否定という形式が一般的になる：*non respondit nihil* (lat. cl. *nihil respondit*), *non vide neminem* (lat. cl. *neminem vidi*)となる。またより表現性を大きくするために、小さな物とか短い行為を指す名詞を添加して否定をしめすことになる：*res, gutta, mica, punctum, pluma, passus* (*non video rem, non video guttam, non video punctum, etc.*); これらの名詞は、すこしづつその意味素の価値を失い、否定についての単純な形態素となる (cf. fr. *rien, pas, point*, it. *mica*)。 *nisi* の代わりに（否定での例外を示すために） *non...magis*（ちょっとだけ）が使われる。

禁止的文章では、否定付きの命令形は使用されず、*noli + infinitivo* (*noli tangere* – “触るな”) という形式は使用されなくなる。この代わりに、*ne + subjunctivo presente*(接続法現在形)が使われ (*ne plores* – “泣くな”)、または *non+infinitivo* (不定詞) (*non cantare* – it. *non cantare*, rum. *nu cîntá*)が使われる。

疑問文は単純化し、疑問用の多くの小詞 (*utrum, an, ne, num, nonne* など) は消失する。そしてこの代わりに、古典ラテン語で示されていたものは消失した、また言い換えれば、このようなニュアンスの表現は、文脈とかイントネーションがその責を担うことになる。

疑問文に対する返答としての文章では、古典ラテン語で行われていた質問者が使う動詞を繰り返す (*Fecisti hoc?, Hoc feci, sic feci; Dixisti? Dixi*) ことはなくなり、単に *hoc* (*Fecisti hoc? Hoc*) と短くしたり、副詞の *sic* (*Fecisti? Sic*)ですませることとなり、肯定的小詞が使われる(esp. it. *sí*, port. *sim*, prov. *oc*, フランス語では次のようにな

る、*hoc illum* > *oïl* > *oui* )。疑問詞の *modales, quomodo* は、\**quomo* に短縮し(esp. port. *cómo*, it. *come*, rum. *cum*)。場所の疑問詞では、*ubi* は *quo* を排除し、方向性を示すのに用いられる (*Quo vadis?* > *Ubi vadis?*) ; 時間とか量に関する疑問詞は、*quando* とか *quantum* が使われる (esp. *cuándo, cuánto*; it. *quando, quanto*; fr. *quand*; rum. *cînd, cît*)。

等位的な小辞は、古典ラテン語のそれと同じく保持される (しかしながら、*et* は意味的に同じような別の繫辞的接続詞に交替する、*ac, atque, -que*; *vel* は *aut* と交替する : esp. it. *o*, fr. *eu*; *seu* は場所によって保持される ; rum. *sau: sed, at, verum, potius* は、その機能を *magis* に譲る : esp. *más*, port. *mais*, it. *ma*, fr. *mais*) などがあるが、これまで述べてきたようにより頻繁に使われるようになる。

接続法的な小辞は、古典ラテン語より使われることは少なく、またかなりこれらとは異なるものとなる。以下に最も重要な変化を示す :

間接的疑問詞は、(不定詞付きの) 補完詞 (*completiva*) に替わる : *nescio quid dicam* > *nescio quid dicere, nescio quo eam* > *nescio ubi ire*。2重間接的疑問詞では、*utrum* と *an* は、*si* と交替する : *nescio utrum Romanus an barbarus sit* > *nescio si Romanus aut barbarus es*。接続詞の *ut* は、消失し、*quod* と交替する ; 時間に関係する *cum* は *quando* と交替する ; *dum* は、*dum interim* と交替する (*domentre, dementre* – esp. *mientras*, it. *mentre*) : *quoniam* は *quia* に交替し、また *quod* に交替する ; *sicut* と *quemadmodum* は *quomodo*(\**quomo*) と交替する、*sic quomodo* (*sic* \**quomo*) esp. *como, así como*: 比較形の *ut* は、*sic, quod* と交替する ; *quamvis, etiam, quamquam* などは、使用されなくなる。条件文では、意図と蓋然性との間の微妙な古典的区別を失い、*nisi* は、*sinon* と交替する。

古典時代の口語に現われた多くの革新形は別に置くとして、これまでのことをまとめると、次のようになるであろう。ローマで使われていた言語で受けた早い時期の進展についての概念を得るためには、古典時代からすこし経過した時代に話されていた言語が、ある程度の統一性を持ちながら、キケロのラテン語が示しているようなものではなく、むしろ現在のロマンス諸語によって示されるタイプにより近いような言語的タイプが使われていたのかどうかを理解することが必要である。事実、これまで示してきた要素の大部分は、今日にいたるロマンス語を特徴付けていて、ロマンス語という単位を確認している主要な等語線の大部分を形成している。

1 4. “俗ラテン語” についてのこの小著では、これを多少とも統一的な言語であると考えてきた。また更にこれは抽象的なものであり、また一方では、空間と時間に広がる等語線の体系をつくり、必然的に地域的、社会的、文体的、年代的な違いを示していることを無視するものではない。これまで見てきたように、古典ラテン語と“俗ラテン語”を対立させると、俗ラテン語と古典ラテン語との間を区別する等語線として、その後のロマンス諸語を特徴付ける現象を論証するできる。

ネオ・ラテン語の諸方言で、“俗ラテン語”が分化する際の主要な境界線を示そうと思う。

実際には、我々の対象とするものは、依然として“俗ラテン語”そのものについてである。これまでは主に、古典ラテン語とか、その固有性を特性付ける等語線とは異なるものをについて焦点を当ててきた。また純粋に言語学的視点からは、俗ラテン語は、古典ラテン語とは異なる“別の言語”であるとする考え方を正統化している。習慣的に限定される等語線の体系というものは、どれをとっても、純粋に言語学的な視点よりすると、“言語”と呼ぶことができる。

これ以後も、“俗ラテン語”自身の中で現われる、また確認できる**内的相違**<sup>68</sup>というものについて検討することになる。所謂“俗ラテン語”という大体系の中に別の小体系を明らかに示すような等語線を示すことになる。この内的相違は、どの話し言葉でも常に存在している、これと同じように日常的に話されていたラテン語と文学ラテン語の間には、どの時点でも常に相違というものは存在していた。しかしながら、ローマ帝国時代までは、“俗ラテン語”というような特殊な概念が使われていなかった（この時代までは、単に“口語ラテン語”として言及されていた、それで“口語ラテン語”と所謂“古典ラテン語”との間には、普通に話し言葉と書き言葉、常用のことばと文学的事ことば、また日常的事ことばと教養人のことばの間に存在しているもの以上の大きな違いではない）。また“俗ラテン語”の中により小さい体系を区別しようとするのは正当なものではなく、俗ラテン語とは多少とも統一的なものであったと見られる。俗ラテン語内での小さな体系といったものは、まだ不十分であり、その後にネオ・ラテン語の言語的境界線となるものについての初期の輪郭図を示すことは出来ない。“俗ラテン語”はどのようにして、またなぜ、種々の言語へ分かれていったのか、または“俗ラテン語”の中にその後、目立つようになる違いが、どのようにしてある時期には多少とも統一的なものと考えることができる体系へ一連の分裂を繰り返しながら、1つの言語と考えられるほど顕著なものになったのか。これらの内的相違を検討してみると、“古典”ラテン語とは違う言語として“俗ラテン語”を考えなければならない言語的枠というものが、その後の時期に見られるようになる、それは多分、4世紀～6世紀である。

最近の研究によると、“俗ラテン語”は多少とも統一的なものであるとする考え方は、紀元3世紀頃までに、または4世紀初頭まで

<sup>68</sup> *diferencias internas*=言語構造内の内的変異音・形など。

にはあった。この時代には、日常的に話されているラテン語での地域的違いは、間違いなく存在しており、だんだんと、より顕著なものとなっていたであろうが、帝国内の諸地域間での相互理解を困難にしたり、また障害となるほどには本質的なものとはなっていなかった。この時代以後には、日常の口語ラテン語の進展のテンポは、益々早くなる（それによって、日常の言語と文学的・教養的言語の間の違いは深くなっていった）。そしてまた、分岐的運動はますます促進され、同じ日常の言語自身の中でも、重要な地域的境界というものが作られることになる。6世紀以後では、この地域境界線によって区切られるそれぞれの小体系は、新しい“言語”と考えられるようになるほど、大きなものとなる。言い換えれば、ロマンス諸語とは、進展している途上にある**同一のラテン語**である、と云うのであれば、それらのロマンス諸語に共通している等語線に言及しているということであり、またロマンス諸語を区別している多くの要素は、その同一のラテン語に共通の基盤に出会うことが出来るという事実を指している。一方では、別の言語と同じく、種々のネオ・ラテン語のバリエーションについて云々するときには、これは先ず最初に、お互いに区別される特有の等語線について言及することになる。

15. 勿論、これまで書いてきたことは、ローマ帝国の歴史と独立して起きた、ということではない。口語ラテン語の分裂は、歴史的要因によるものであり、これは、ローマ帝国属領の政治的・文化的歴史と緊密に関連している。それで、言語的要因がどのように言語的進展に反映されているかを見る前に、これらの言語的要因を手短かに考えてみるのが重要である。

紀元 107 年、Trajano 帝<sup>69</sup>の時にローマ帝国は、ダキアも征服し、

---

<sup>69</sup> Marcus Ulpius Traianus

領地が最大限にまで広がることになる。この時代以後は、ローマ帝国の生活の方向性が変容されるようになるということができる。つまり、新たな征服地に目が向くことはなく、多くの民族との最前線、つまり東方ではパルト人<sup>70</sup>と、またヨーロッパではゲルマン人との対峙が問題となる。

ダキアの征服に続く2世紀余りの内に、(ギリシャとギリシャ語使用地域、またギリシャ化されていた場所を例外として)すべての属領は、根本的にローマ化されることになる。ローマは、政治的および軍事的側面だけではなく、言語的また文化的にその帝国を支配したのである。しかしながら同時に、厳格に中央集権化された巨大な国であるので、すでに政治的にも経済的にも脱中央集権化への動きが始まることになる。この脱中央集権化の最初の兆候は、帝国内のイタリアまたローマの威信の失墜として現われてくる。イタリア内のローマ帝国の覇権が確立した初期のころ、またほぼすべての共和国時代には、ラテン人と *laciales*<sup>71</sup>だけがローマ市民であった。紀元前90年には、すべてのイタリアの民族に市民権が与えられた。一方では、帝国時代でもまた、共和国時代において、属州はローマ市民権を持つ人によって植民地化された。ローマ人は、属州に向かい、そこに住み、行政官、兵士、商人、土地所有者などとして生活するようになり、各地方の民族と関係を保ちまた、混合するように

---

Nacido en el 53 en Italica es el primer emperador que no tenia origen Italico aunque su familia tenia raices en la Umbria. Su padre, de su mismo nombre, fue Gobernador de la betica, y durante la guerra de Judea llegó a tener el mando de la X legión. Se le puede considerar como el Emperador que mayor gloria dió al imperio romano en toda su historia. su Esposa fue Pompeia Plotina gobernó del 98 al 117 en el que murio , tambien como Nerva de un ataque, en Selinos, Asiamenor, recibió sepultura al pie de la columna que mandó erigir y que es conocida con el nombre de Columna Trajana

<sup>70</sup> Los Partos : パルト人 (現在のイラン地方に住んでいた民族)。イラン語派のパルト語を使っていたとされているが、現在は死語となっている。

<sup>71</sup> *laciales*: ラシアル人 :

なる。それで、多くの市民権を持つローマ人が属州で生活するようになり、また属州生まれの市民などが多くなり始めることになる。同時に、他民族と接する前線の防衛のために、ローマ帝国は益々多くの兵士を必要とするようになる。最初の頃は、兵士はすべて *laciales* であったが、引続く戦争のゆえに、イタリア人が軍団の戦列に加わるのが要求されるようになり、またすぐに属州の人間もまた外国人も戦列に加わるようになる。彼等は、ローマ帝国の兵士であるという事実によって、ローマ市民権を得るようになる。時間の経過に伴い、軍団の中での属州の人間とか外国人などの数が、益々増加し、これに比例して逆に野望を持つラテン人やイタリア人の数は少なくなる。**Vespasiano**<sup>72</sup>皇帝は軍団内でのイタリア人の数を正式に少なくし、それからは *laciales* とイタリア人の兵士は、近衛兵として、イタリアに留まるようになる。一方、前線で戦う軍団は、そのほとんどが、属州出身とか外国出身の兵士によって構成されるようになる。

一方、(特にイスパニアとガリアの) 属州は、徐々により大きな経済的重要性を得るようになり、イタリアより豊かになる。このようにして、ローマ帝国内でのローマの特権と威信は、さらに小さくなることになる。ローマは、常に帝国の首都であったが、ローマは単に皇帝の居住する場所であるということにすぎなかった。**Julia** 王朝の皇帝は、通常ローマに住み、**Flavios**<sup>73</sup>はローマと属州に住んだが、軍人出身の皇帝は勝利を確認し、祝福するためにのみこの首都に立ち寄るにすぎなくなる。皇帝は、軍団と戦う前線で布告を出

---

<sup>72</sup> Tito Flavio Vespasiano, (ローマ皇帝 : 9-79 d.c.)

<sup>73</sup> Flavios : Flavio Eugenio fue emperador romano entre los años 392 y 394.

Generalmente es considerado como un usurpador.

Flavio Eugenio (345? - 394) fue proclamado augusto de Occidente tras la muerte en oscuras circunstancias de Valentiniano II, pero, al no haber sido reconocido por el colega de este último, Teodosio I, suele ser considerado un usurpador del trono imperial.

し、軍隊と共に属州で生活していた。同時に、属州出身の市民権を持つ人は、帝国内の経済活動とか、政治的・文化的活動で最も活発な人であった。Claudios<sup>74</sup>まで、ローマは、帝国の商業的中心地であった。その後、属州は、属州間の相互交易路を作った。それで例えば、ガリアは、Panonia<sup>75</sup>との交易を開始するようになると、ローマを介して行うことなく、イタリアの北部を経由して直接に行うようになった。そしてすぐに、ローマ内での最も豊かで文化的な要素は、特にイスパニアとガリアという当時の最も進んでいた属州を起源としている。よく知られているように、イスパニアからは、Trajano<sup>76</sup>帝、Adriano<sup>77</sup>帝などの皇帝を輩出し、また二人の Séneca<sup>78</sup>,

---

<sup>74</sup> Claudios: Claudio (Tiberius Claudius Drusus Germánicus)(1 de agosto 10 adC - 13 de octubre (54), emperador romano (41-54), perteneciente a la dinastía Julia- Claudia.

<sup>75</sup> Pannonia is an ancient country bounded north and east by the Danube, conterminous westward with Noricum and upper Italy, and southward with Dalmatia and upper Moesia. Pannonia was located in the territory of present-day countries: Austria, Croatia, Hungary, Serbia and Montenegro, Slovenia and Bosnia and Herzegovina. Today, the term Pannonia is usually used for what is called Transdanubia (Dunántúl) in Hungary and for the northern parts of former Yugoslavia which are located in the Pannonian plain.

<sup>76</sup> Marco Ulpio Trajano (18 de septiembre de 53 - 9 de agosto de 117). Emperador romano (98-117), nacido en 53 d.C. en la ciudad de Itálica (Santiponce) a escasos kilómetros de Hispalis (Sevilla) y perteneciente a la más rica y próspera provincia de la Hispania romana, la Baetica.

<sup>77</sup> Publio Elio Adriano (Roma, 24 de enero de 76 - Baia, 10 de julio de 138).

Emperador romano de la dinastía de los Antoninos.

Procedente de una familia hispana de Itálica (cerca de Sevilla) que había alcanzado el rango senatorial, quedó huérfano a los ocho años y recibió una esmerada educación bajo la protección del emperador Trajano, que era pariente suyo; su casamiento con una sobrina del emperador y su amistad con la emperatriz Plotina fortalecieron ese vínculo.

<sup>78</sup> Hispania supplied the Roman Empire with food, olive oil, wine and metal. The emperors Trajan, Hadrian and Theodosius I, the philosopher Seneca and the poets Martial and Lucan were born in Iberia. Emperor Trajan Marcus Ulpius Nerva Traianus (September 18, 53 - August 9, 117), Roman Emperor (98 - 117), commonly called Trajan, was the second of the so-called five good emperors of the Roman Empire. ... Emperor Hadrian Publius Aelius Traianus Hadrianus (January 24, 76 - July 10, 138), known as Hadrian in English, was Roman emperor from 117 - 138, and member of the

Quintiliano<sup>79</sup>, Lucano<sup>80</sup>, Marcial<sup>81</sup>等の高名な文人を輩出している。これらのことは、すべて帝国の歴史での基本的な出来事を事前に準備していたようなものである。いわゆる 212 年に *Constitutio Antoniana*<sup>82</sup> 法によって、Caracalla<sup>83</sup> 皇帝は、ローマ帝国内のすべての住民にローマ市民権を与えるようになる。

Caracalla のこの勅令により、ローマ帝国の脱中央集権化が促進されることになる。そのすぐ後で、このような脱中央集権化を増長するような外的要因が介入することになる。257 年にローマ帝国は重要な領地を最初に失う：つまりゴート族がダキアに侵入し、271 年に Aureliano<sup>84</sup> は、この占領を公式に認証せざるを得なくなり、この属領を放棄し、軍団や行政官をダキアから立ち退かせることにな

---

gens Aelia. ... Flavius Theodosius (Cauca (modern Coca, Segovia, Spain), January 11, 347 - Milan, January 17, 395), also called Theodosius I and Theodosius the Great, was a Roman emperor. ... Seneca the Younger Lucius Annaeus Seneca (often known simply as Seneca, or Seneca the Younger) (c. ... Martial (Marcus Valerius Martialis), Latin epigrammatist, was born in one of the years AD 38–41, for, in book x. ... See also Earl of Lucan Marcus Annaeus Lucanus (November 3, AD 39 - April 30, 65), better known in English as Lucan, was a Roman poet, and is one of the outstanding figures of the Silver Latin period. ...

<sup>79</sup> Marcus Fabius Quintilianus (Calahorra, circa 35 - Roma, circa 95), retórico y pedagogo hispanorromano.

<sup>80</sup> Nació el 3 de noviembre del año 39 dC. en la ciudad de Córdoba, en la Bética española. Su padre, Marco Anneo Mela, era hijo de Anneo Séneca y pertenecía, por tanto, a la clase de los caballeros.

<sup>81</sup> Cayo Valerio Marcial, fue un poeta satírico del Imperio Romano. Nació en Calatayud, la antigua Bilbilis Augusta aprox. 40 dC el 1 de Marzo (mes del dios de la guerra: Marte) de ahí que se le conozca como "Marcial" y murió aprox. 104 dC.

<sup>82</sup> Caracalla 帝は、ローマ帝国内の自由民すべては、市民権を持つとの布告を出す。これが *Constituto Antoniana* である。

<sup>83</sup> (Marco Aurelio Antonino Basiano) Emperador romano (Lugdunum, Lyon, Francia, 186 - cerca de Edesa, 217). (El nombre de "Caracalla" hace referencia a un abrigo de origen germano "caracallus" que solía llevar este emperador)

<sup>84</sup> Aureliano (9 de septiembre de 214 - 275), fue emperador romano (270 - 275).

る。

その後、ゲルマン人は、前線に圧力をかけ、ローマ帝国の長官達自身が、1つの行政組織では、このように広大な国を統治するには大きすぎることを認識するようになる。それによって、**Diocleciano**<sup>85</sup>は、**Maximiano**<sup>86</sup>と組んで“**Augusto**”となる。それで皇帝が2人になり、それぞれの皇帝は、“**César**”<sup>87</sup>となる。皇帝は、4人の長官を支配し、ローマを4つの地域に分割する：1つは、首都をミラノに置く **Itálica**、2つは、首都を **Tréveris**<sup>88</sup>（現在のドイツの **Trier**）を置く西ローマ（**Oeste**）、3つは、**Sirmio** に首都を置く **Balcanes**、4つ目は、**Nicomedia**<sup>89</sup>(284 年)に首都を置く東ローマ（**Oriente**）であ

---

<sup>85</sup> Diocleciano (245-313) fue emperador romano (284-305). Durante su imperio creo una tetrarquía para la administración del Imperio, y se desarrolló una de las últimas persecuciones a los cristianos.

<sup>86</sup> Marcus Aurelius Valerius Maximianus (250 - 310), fue emperador del Imperio Romano (junto con Diocleciano: emperador romano (284-305).) desde el 1 de abril de 286 hasta 305.

<sup>87</sup> César Augusto o Augustus (Cayo Julio César Octaviano) Primer emperador romano (? , 63 adC - Nola, Nápoles, 19 de agosto de 14 dC). Procedía de una rica familia del orden ecuestre de Veletri (su abuelo fue banquero y su padre, pretor de Macedonia). Por parte de madre era sobrino-nieto de Julio César, el cual le adoptó en el 45 adC y le designó su heredero. Tras la muerte de César (44), entabló la lucha contra el que había sido su lugarteniente, Marco Antonio; para ello contó con el apoyo de Cicerón y de los republicanos del Senado de Roma, que esperaban dividir a los cesaristas enfrentándoles entre sí; también contó con el apoyo de los grandes financieros (como Mecenas), lo que le permitió costearse un ejército propio.

<sup>88</sup> Considerada la ciudad más antigua de Alemania, en 1986 fue declarada Patrimonio de la Humanidad por la UNESCO. Oficialmente, fue fundada en el año 16 adC por Augusto bajo el nombre de "Augusta Treverorum". No obstante, existe un mito según el cual fue fundada unos 1300 años antes del nacimiento de Roma por Trebeta, hijo del rey asirio Ninus.

<sup>89</sup> Nicomedes I of Bithynia founded the city of Nicomedia (modern İzmit), at the head of the Gulf of Astacus (which opens on the Propontis), in 264 BC The city has ever since been one of the chief towns in this part of Asia Minor. It was the metropolis of Bithynia under the Roman empire (see Nicaea), and Diocletian made it the chief city of the Eastern Roman empire. Owing to its position at the convergence of the Asiatic roads to the new capital, Nicomedia retained its importance even after the foundation

る。284 年、ローマは実質的にローマ帝国の首都ではなくなることになる。Constantino<sup>90</sup>は、一時的に帝国の再統一を計るが、東ローマに首都として Bizancio<sup>91</sup>を建てることにより、分裂への新たな動きを与えることになる。そして最後に、大分の地域がローマ化されていないギリシャ影響下の Oriente と西方 (Occidente) の間の対立は、392 年 Teodosio 帝<sup>92</sup>によって政治的に処理され、ローマ帝国は、皇帝の 2 人の息子 Arcadio と Honorio に分け与えられることになり、Arcadio には、Bizancio(Constantinopla)を首都として Oriente を、また Honorio には、首都をローマではなく Rávena<sup>93</sup>に置いて Occidente を与えることになる。このようにして、Oriente はローマ化された地域の影響を取り除くことにより、ギリシャ風のものが残ることになる。それで、皇帝も宮廷内および高級行政官などは、当初はラテン語を話していたが、すぐにギリシャ語に取って替えられるようになる。“Imperio Romano de Oriente”(東ローマ帝国)と称してはいるが、この“ローマ”は単に名称にしかすぎなくなる。一方でこの東ローマは、バルバロ（異邦人）による益々強くなる攻撃に曝され、ゲルマン民族を前にして毎年のように領土を新たに失うようになる。そ

---

of Constantinople and its own capture by the Turks (1338).

<sup>90</sup> Constantino I, el Grande (nacido como Cayo Flavio Valerio Claudio Constantino) (Naissus, Dacia, actual Serbia, h. 280 - Ancyrona, Ponto, actual Turquía, 337) Primer emperador cristiano de Roma.

<sup>91</sup> Nombre que se daba antiguamente a la ciudad de Estambul.

Colonia griega desde la antigüedad, fue refundada por el emperador Constantino I el Grande en 330, recibiendo el nombre de Constantinopla. Durante la época tardía del Imperio Romano, y después de la caída del Imperio Romano de Occidente, fue el centro de la cultura clásica y capital del Imperio Romano de Oriente o Imperio Bizantino.

<sup>92</sup> Teodosio I el Grande (Flavio Teodosio) (n. Cauca, (hoy Coca, Segovia), Hispania, h. 346 - Milán, 17 de enero de 395), Emperador romano de Oriente (379-395) y de Occidente Occidente (394-395), impulsor del catolicismo como religión oficial.

<sup>93</sup> Rávena (en italiano Ravenna) es una ciudad al norte de Italia en la Emilia Romagna, es la capital de la provincia homónima, surge en la llanura nororiental de la Romagna a pocos kilómetros del Mar Adriático. Tiene una población de 138.000 habitantes.

して終に、476 年ローマ帝国の最後の自由民の住む領地 (*restos libres del Imperio*) またローマ市そのものも、ゲルマン民族の支配下に落ちることになる。

西ローマ帝国の没落後に、東ローマ帝国による再征服の試みが幾つかあり、Justiniano<sup>94</sup>帝の時代に成功したことがあり、イタリアを再征服し、Rávena に総督 (*exarcado*) を設置した。しかしこのような軍事的、政治的な動きによっても、西ローマの進展するゲルマン化を阻止したり、押し留めることは出来なかった。

西ローマへのゲルマン民族の侵入は、素早い軍事的征服という側面もあるが、平和的で段階的な浸透という側面もある。ゲルマン人は、まずローマ軍団の兵士として入り込み、その数を増やしローマ帝国時代の最後年には“バルバロ”だけによって構成された軍団が存在するようになる。そして、その後にもまた、ローマ前線地帯に、仕事、平和また安全を求めて、植民として入り込むようになる。特にガリアでは、多くのゲルマン系の農業に携わる植民地が作られる。そして最終的に、この多くのゲルマン人がローマ帝国に対する直接的攻撃を開始することになる。この攻撃は、すでにゲルマン化が比較的進んでいないところにも見られた。西ローマ帝国の崩壊した後に作られた国は、ゲルマン風の組織で貴族配階級はゲルマン人が支配したが、ゲルマン人の住民の間での割合は少なく、部分的にゲルマン化されていたに過ぎない (イタリアの、Ostrogodos<sup>95</sup>,

---

<sup>94</sup> Flavius Petrus Sabbatius Iustinianus o Justiniano I ([11 de mayo]] de 483–13/14 de noviembre de 565) fue emperador de Oriente desde el 1 de agosto de 527 hasta su muerte. Uno de los principales gobernantes del Imperio Bizantino, destaca especialmente por su reforma y compilación de leyes y por la expansión militar del territorio imperial que tuvo lugar bajo su reinado, sobre todo gracias a las campañas de Belisario.

<sup>95</sup> Hacia el 370, a partir de las invasiones de los hunos, los godos se dividieron en dos ramas separadas. Los ostrogodos constituyeron un vasto reino al este del río Dniéster, en las tierras alrededor del mar Negro (lo que hoy es parte de la actual Ucrania y

Longobardos<sup>96</sup>, Normandos, ガリアの Francos<sup>97</sup>, Burgundio、イスパニアの Visigodos<sup>98</sup>など)。

しかしながら、ゲルマン人は、西方のロマニアの歴史にとっては重要であるが、言語的にローマ帝国をゲルマン化するには到らなかったが、全面的にローマ化されていなかった地域、例えばライン河の北の地域、南ドイツ、現在のスイスなどにゲルマン語が浸透する。しかし、ほかの場所では、ゲルマン人に支配・統治されているローマ人に段々と飲み込まれ、ローマ化された。ゲルマン人は長くローマ人と共生したが、ゲルマン語の影響は、ネオ・ラテン語の言語体系とか構造にはなんら実質的な変容を及ぼすことはなかったのである。しかし、ロマニアの言語史に関して言えば、ゲルマン語の実質的重要性は、ロマンス諸語を別の個別的なものとして形成するのに大きな貢献をしたことである。ローマ帝国時代に既に形成されていた地域的な言語的違いとか言語的前線が、“内的な”理由によって、深化するようになり、ゲルマン人の行為（領土への侵攻）により

---

Bielorrusia). Los visigodos fueron los godos del occidente, cuyo dominio territorial se extendía desde el Dniéster hasta el Danubio.

<sup>96</sup> Longobardos: Lombardía es una región del noroeste de Italia, entre los Alpes y el valle del Po, cuya capital es Milán. Su población es de aproximadamente 9 millones de habitantes.

Origen etimológico

Hoy en día, la región de Lombardía continúa denominándose con un término referente a los Longobardos, tribu bárbara que dominó el norte de Italia después de los Godos durante más de 200 años.

<sup>97</sup> Entre los años 355 y 358, el emperador Juliano volvió a encontrarse con las vías fluviales del Rin bajo el control de los francos, y una vez más volvió a pacificarlos. Roma les concedió una parte considerable de la Galia Bélgica, momento a partir del cual pasaron a ser foederati del Imperio Romano. Todavía hoy se siguen hablando en Flandes (Bélgica) y Holanda el holandés, una lengua de origen germánico. De este modo, los francos se convirtieron en el primer pueblo germánico que se asentó de manera permanente dentro de territorio romano.

<sup>98</sup> En el año 476, los visigodos ya se habían asentado en la península Ibérica y en el 490 termina el grueso de las migraciones desde el norte.

設定され、また変容されることになった。ゲルマン人がどこに侵攻したのか等の影響力により、ある言語的前線は消滅することもあり、また新たに作られたこともある。ロマンス諸語の形成にとってのゲルマン人の侵攻という（歴史的）行為は、言語そのものの要素とか構造、“内容物”にとっては外的な出来事であるが、ロマンス諸語がお互いに区別される主要な等語線の範囲とその境界線、また歴史的に形成発展してきた様式の中で、自律的で多少とも等質的な体系を形作り発展させたという事実に関わっている。これらは、ゲルマン人が一部であれ **Romanidad**（ローマ性）に及ぼした影響であり、またロマニア（ラテン語通用地域）をゲルマン人の国に分割したという歴史的事実である。

**Romanidad** に対するゲルマン人の影響は、**Ernst Gamillschegm** の主著の “**Romania Germanica**” で詳細にわたって、研究されている。また、ロマンス諸語の形成と区分については、**Walter von Wartburg** によって、現在のロマンス語の種々の語形を区分している言語的前線は、ゲルマン人の外的な刺激によるものであるとされている。また彼によると、ラテン語の歴史のある時期に獲得した方向性というのは、ラテン語自身の“内的”誘因によるものであるばかりではなく、また、**Romania** のゲルマン人による征服によって決定づけられた諸誘因の発展の可能性（革新と後退がどの地域に拡散していったのかという可能性）によるものである、としている。

。 。 。 。

16. ラテン語が分割されるようになる“内的な”理由、言い換えれば、ラテン語とは違う自律的で歴史的体系としてのロマンス語の形成の内的な理由の探求は、ロマンス言語学の基本的な問題の1つである。この問題は、ここ数10年、統一的で同質的な言語としての“俗”ラテン語という考え方を止め、その代わりに比較的な統

一的ラテン語(*una unidad latina relativa*)という考え方に取って替わり、これが方法論的基盤として使われている。

しかしながら、ロマンス諸語の形成に関する現在の考え方のあるものは、“俗”ラテン語は、画然とした統一的な言語的現実と見なす時代に現われたものであり、古典ラテン語と俗ラテン語を対峙させている。

17. ロマンス諸語の進展的異化を説明するために、先ず最初に取り上げられたのは、ローマによる占領、また諸属州の植民地化の年代そのものを、つまり**ローマ化の時代の違い**をその理由とした。

“俗”ラテン語は、進展している統一的な言語と捉えられていると云える、そして最も古い時代にローマ化した属州は、遅くにローマ化された地域とは違ったラテン語を受け入れたと考えられている(例えば、ダキアに拡散したラテン語は、数世紀以前にサルディニアに拡散したラテン語とはかなり異なっているはずであるとするのである)、そしてこのような占領時期の違いによる言語的違いというものは、ローマ帝国が言語的に統一されたものであってとしても、存続していたのである。しかしながらこのような説明には、真実の一端があるが、すべて真実ではない、ということに疑問はない。ローマ化の時期の違いというものが、ロマンス諸語の形成を説明するための十分は理由とはならない。このような見方によって、サルディニアとか南イタリアなどの地域で保存されている語形の現象を説明することができるが、イベリア半島に残る類似の現象を説明することはできない(例えば、*miedo, seso, hermoso, comer, hablar*などの語は、ガリアばかりではなくイタリアではより新しい語形と交替しているのである)。ガリアは紀元前50年に征服されたが、例えば、*equa* > a. fr. *ive* となるが、イタリアにはより新しい語形、*caballa* > *cavalla* がある。一方では、ガリアでは *pl, gl, cl* という子音グループは保存されているが、イタリアでは *py, gy, ky* と硬口蓋音化してい

る)。またダキアでは紀元後 107 年に征服され、例えば *ū* は *u* として保存されている。

18. 基層語理論<sup>99</sup>は、最初イタリアの言語学者の **Graziadio Isaia Ascoli** によって強力に唱えられた、これがロマンス諸言語の違いについての新しい可能性のある理由付けとして指摘された。かれによると、“俗”ラテン語は、進展している統一的言語として捉えられたが、そしてこの統一的言語は、ローマ化されたそれぞれ異なる地域の異なる基層語の上に重なる（重層化）ことになるとしている（中南部のイタリアのオスコ-ウンブリア語、ガリア、北イタリアのケルト語、イスパニアのイベリア語、ダキアのトラキア語などがこれに当る）。基層語は、語彙に関することばかりではなく、音声的側面においてもラテン語に影響を与えたのであろう。ロマンス諸語には、“ラテン語以前の”単語が残存しているし、またローマ化された色々な民族によってその昔に話されていた言葉に特徴的な調音的習慣（各地域でそれぞれ異なる習慣）が残っている。言い換えれば、基層理論は、ロマンス諸語の異化の核心的理由を、ラテン語そのものではなく、（ローマが植民地の言語として課した）ラテン語に対して被征服民族の言語が及ぼした影響というものに、その責を負わせることによって、問題を解決せんとするのである。

それで例えば、（基層理論の研究が最も成功し、確実性についての蓋然性が大きいものであろう）語彙において、ラテン語以前の種々の言語の残存要素を同定し、また基層語の“積み重なり”を設定するようになった。このように考えることによって、イスパニアとアルプス地方とのある種の語彙の一致は、ラテン語とかイベリア語以

---

<sup>99</sup> これまでに出版された最も浩瀚なイベリア半島の言語に関する“基層語”に関する著書として、Fredrick Jungemann の *La Teoría del Sustrato*, 1954, Gredos がある。

前の言語である基層語としての“リグリア語”<sup>100</sup>に帰している。これに関して、最も興味深い語として、**W. von Wartburg** が“*Orígenes de los pueblos romanicos*<sup>101</sup>”で論じている語、*camuza (gamuza)* ‘アルプスカモシカ’がある。この単語は、カンタブリア・ピレネー地帯とアルプス地方にのみ存在する動物を指し、ラテン語には存在せず、スペイン語(*camuza, gamuza*)、ガリシア-ポルトガル語(*camaça*<sup>102</sup>)、フランス語(*chamois*<sup>103</sup>)、イタリア語(*camoscio*)にのみ見られる語である。この頃から類推できるのは、この語は、昔はアストリアから、ピレネー山脈、南フランス、北イタリアを含むアルプス地方まで広がっていた *ligur*<sup>104</sup> という名称が付けられている前印欧語<sup>105</sup> 基層語と云うべき言語的基層に属していたのであらうということである。

ピレネー山脈地帯では、*camuza* が使われている地域は、北アフリカの言語で見られる語に対応し、意味が同じであるバスク語の *isart*

---

<sup>100</sup> Grupo étnico, de las tribus de los iberos. No se conoce casi nada del lugar de origen de los ligures; al parecer, proceden de la región asiática de Georgia y llegaron a la parte occidental de Europa cerca al Mediterráneo, estableciéndose en las regiones de España, Portugal, Italia y el mediodía de Francia.

Idioma hablado por los ligures, probablemente indoeuropeo, aunque otras teorías lo vinculan al euskera.

Perteneciente o relativo a la Liguria.

Idioma de los celtas lepónticos que ocuparon la Liguria, también llamado celto-ligur o lepóntico.

<sup>101</sup> 「ロマンス語を使う民族の起源」

<sup>102</sup> ポルトガル語では、*camarça*, ガリシア語では、*camaça*

<sup>103</sup> フランス語、*chamois* [ʃamwá]

<sup>104</sup> Hasta la invasión céltica (siglo VI a.C.) los ligures habitaban un territorio muy amplio que iba más o menos del Ródano al Arno y comprendía una parte del Piamonte, de Provenza, de Lomabrdía y de Emilia, y especialmente la región que todavía se llama Liguria, a más de Córcega, pasada luego a los etruscos.

La lengua ligur era hablada en el siglo III a.C. en la región que hoy corresponde a la Liguria actual, entre los ríos Ródano y Arno. Su filiación genética no está clara pues el material disponible es muy escaso: topónimos y otras palabras aisladas.

Es obvio que no hay que confundir esta lengua con el dialecto de la lengua italiana actual denominado ligur o genovés. [<http://www.proel.org/mundo/ligur.htm>]

<sup>105</sup> substrato pre-indoeuropeo 前印欧語基層語

が間に入っていて切断されている。このような状況を考慮すると、リグリア語の言語的統一性というものが、アフリカからの浸透、つまりイベリア族の侵入によって分割されたと推測できる。このような推測は、一連の類似例にも当てはまる、例としては、*aran* ‘谷’ (*Valle de Arán*<sup>106</sup>という冗語地名に見られる) がイスパニアではイベリア語の *ibar* (この語は *Ebro* という名称、また *Iberos* という名称になった) と取って代わった。また *arrugia* (esp. *arroyo* ‘小川’) は、アルプス地方では (piam. *ticin. rugia*, trent. *rogia*) が見られるが、これもリグリア語に帰せられている。類似の状況は、サルディニアでも論証できる: “リグリア語の” *aran* という単語が使われる地域は、縮小し、イベリア・アフリカ語の *ibaica* (sard. *bega*, esp. *vega*) によって島の中央部に押しやられたのである。またサルディニアではアフリカの民族が前ラテン語の時期に既に侵入していたので、“リグリア人”を圧迫し、島の中央部へ追いやったと推測することができる。それで、これらのサルディニアでは少なくとも2つの前ラテン語時代の基層言語による階層があったといえるようである。つまり所謂、“リグリア語”とイベリア語の2言語があった見られる。それでこの地域の残るラテン語語源に帰することのできないロマンス語系の種々の単語は、漠然と“地中海的”と呼べる基層語に帰することができる、つまりリグリア語とイベリア語の2言語がこれに当たる。また特にフランス語に残る多くの教養語の状況については、はっきりとしている。

語彙以外で、前ラテン語の言語の影響が少なくともあるように見られるのは、基層論的な研究では、確実性が少ないようなものである。しかしながら、幾つかの音声変化を基層語に帰すものであるとして、示すことのできるものがある。それで、例えば子音グループの *kt* は、ケルト語が基層となっている地域 (ガリア、イスパニア、

<sup>106</sup> *Valle de Aran*: 直訳すると“谷の谷”となる。

Galia Cisalpina<sup>107</sup>) ではケルト人の調音的習慣によって、かなり早い時期から *xt* になっていた。このような変化を考慮すると、中間的な変化相の西方ロマンス語の継起的形式を説明できる (参照: cf. *octo* > fr. *huit*, port. *oito*, esp. *ocho*)。より限定された地域の中で、ゴール語の基層語でフランス語での変化 (lat. *ū* > *ü*) を説明するものがある。この現象は、ゴール地方の古代の言語では、*ū*は既に *ü*になっていたという事実とは独立してはいなかったと考えられる。しかしながら、我々が今問題としているラテン語の *ū*は、この地方ではまだ、*ü*には移行しておらず、多分 *u* と *ü*との中間的な音相、*ü*へ移行しようとする傾向 (つまり調音点を前方へ移行させようとする傾向) があつたのすぎなかった。同じように、古い時代にオスコ・ウンブリア語が使われていたイタリアでは、オスコ・ウンブリア諸方言で特徴的な同化現象 (*mb*>*mm*) が見られる。またバスク語が基層語となっているカンタブリア地方<sup>108</sup>、ガスゴーニュ地方<sup>109</sup>では、バスク語では語頭では *f* が無かったということを考慮するながら非常に興味深い現象である、語頭の *f* が *h* へ移行するという現象が見られる。これらの例は、ロマンス諸語が異化する時の最も特徴的な現象の幾つかは、どのようにして基層理論によって説明することが出来るのかを示す数少ない例である。ローマの諸属州におけるローマによる植民地化の密度の違い<sup>110</sup>という理論が、基層理論と関連させることがある。**Amado Alonso** の観察によると、ローマ化の密度と基層語の影響力は、逆にはたらくようなきつかけとなつたとされている: つまり基層語が余り多く残存していない時には、ローマ化

<sup>107</sup> República Cisalpina, desaparecido estado al norte de Italia, creado el 9 de julio de 1797, por Napoleón Bonaparte. Su capital fue Milán.

Comprendía un territorio de 40.000 km2 aproximadamente, atravesados por el río Po y con Milán como sede del gobierno. Estaba provista de un ejército integrado por tropas francesas.

<sup>108</sup> Cantabria=イベリア半島の北中央部

<sup>109</sup> Gascuña=フランス南西部 (ガスゴーニュ語が使われている)

<sup>110</sup> la distinta intensidad de la colonización romana

の程度が益々大きくなり、その逆に場合もある。これより明らかになるのは、ローマ化の程度というようなものは、ロマンス諸語の形成について関係ないものとすることはできない、ということである。つまり、ローマによる植民地化の密度が小さく、先住民族の数が多いような場所では、土着の形式が多く残存したと期待できることになる。それで、例えば特に民衆的で粗野なことばに関しては、スペイン語でイベリア語起源とされている単語と、フランス語の多くのケル語起源の単語を比較することはできない。というのは（歴史的に文献で確かめられるものについて云えば）イスパニア（カンタブリア地方を除いたとしても）のローマ化は、ガリア地方（特に北ガリア地方）よりも、より密度が高く、全体的なものであった。またイスパニアのローマ化は、**Recia** よりもより密度が高かったのは明らかである。また逆に、他の属州よりと比較するればローマが遅い時期であったダキアは、より強くローマ化されていたようである、というのは、歴史家によると、多くに地域で土着民の人口が少なく、また多くの住人がローマの支配を耐えるよりも、むしろ他国へ移民するのを選んだことによるものであろう。

基層語が、ロマンス諸語の形成においてある程度の重要性があったのは、間違いない。しかしながら、基層理論は、ラテン語の分割に関するすべての側面を説明することはできず、またどの側面でまたどの要素が基層語の影響に帰すことができるのかについて学者の間で一致した意見はない。まづ最初に、基層理論の形成期には、世代とか時代が違っても示すことのできるようなある限定的調音習慣の生物学的タイプの遺産というものを誰も受け入れていた人はいない。実際には、すべての学者は、ある現象は基層語に帰すことができるであろうが、基層語がまだラテン語と共に話されていた時期、つまり二言語併用の個人がいた時期の傾向として生起したに違いないということでは一致している。第2としては、基層論にすっかり納得している学者は、ほとんど凡ての現象を基層語で説明しようとする

る。そして基層語はしばしば便利がラベルとなるが、実質的には意味を欠いているので、他に十分に明確な説明をすることが出来ない現象、またラテン語の単語を使って満足すべき方法で説明できないすべての語などの問題を単に避けているにしかすぎない。それで基層理論に反論する学者は、ほとんどの場合には（音声変化に関しては）生理的音声学に基づいて、またラテン語の内的側面から説明できるとして、基層語の重要さは最小限に見積もっている。このことは、基層論者によるほとんどの確言は、文献的に跡付けることは非常に難しい理由による。更に基層論者の中でも、基層語の影響力の範囲について全く一致していない。それで、**Harri Meier** は、フランス語とか、またスペイン語の音声組織にとって基層語の重要性は認めているが、スペイン語の語彙に関しては認めていない、またイベリア語またはリグリア語起源とされている語（**arroyo**<sup>111</sup>とか**balsa**<sup>112</sup>などの語も）の多くは、ラテン語の要素として説明しようとしている。

19. それで、ロマンス諸語の形成の問題、“俗”ラテン語を、歴史的（年代的）に異なった言語として、また地理的、社会的、文体的に異なった言語と認識できるようになった時に、またローマ化の歴史と考慮してラテン語の分化の歴史というものを考える時に明らかにされるのである。それでこのことに関する根本的な質問とは、次のように言い換えることができる：種々のローマ化された国に広がったラテン語は同じラテン語であったのか、または違ったラテン語だったのか。これに対する回答は、否である。その理由は、植民地化の時期はそれぞれ異なっていたことにもよるし、また“俗”ラテン語自体に存在していた違いがあったことによる。**Walter von Wartburg** は、言語の歴史は、民族の歴史とは独立して形成される

---

<sup>111</sup> arroyo=小川

<sup>112</sup> balsa=バルサ材、筏

ことはないという方法論的原理を保持し、種々の属州をローマ化した社会的カテゴリーはそれぞれ異なっていたことを強調することによって、**社会的また文化的違い**の重要性を示した。サルディニアでは、ローマ化は、特に役人達によって行われたのである、これは言語的視点よりすると、“行政的”とでも呼ぶことのできるラテン語を介して行われたといえる。一方、イタリアでは農民などの身分の低い民衆によってローマ化が進められたのであり、またローマ帝国また共和国時代に、彼等に征服した土地を分配したのである。つまりかなり“粗野な”ラテン語が広がったのである。またガリア地方、イベリア半島では、社会的に上位にある人や、商人、中産階級、軍人などによりローマ化が進められたので、より“洗練”されたラテン語が拡散したのである。またダキアでは下層階級出身の植民とか退役軍人などの使う“民衆的”ラテン語が広がったのである。

**Wartburg** によると、これらの入植民達の社会的、文化的な違いによって、ロマンス諸語間での最も古い時代の基本的な異化を説明することが出来るとしている。それで彼は語末の *s* の保存と消失について言及し、この *s* の名詞形態素としての機能の重要性を考慮すると、各ロマンス語での語形変化の取り扱かたの違いが見て取れるとしている。事実、古ラテン語とか、民衆ラテン語では、語尾の *s* は、その後に子音が続いていても、または短母音が前にあっても、すでに発音されていなかった。しかしながら、文学・教養言語を特徴付けている統一化と標準化への熱意を持つ教養ラテン語は、*s* がどの場所にあってもこの *s* を復活せんとした。それでローマ帝国のある地域、つまり社会的に下層の人によってローマ化された東方のイタリア、ダキアでは、子音の前の *s* だけではなくすべての位置にある語末の *s* を消失させた。これに反して、社会的により上位にいた人によって植民地化された地域であるイスパニア、ガリアでは、どの場所にある語末の *s* をも保存し復活させたのである。このために西方ロマンス語は、複数形ではラテン語の3つの語尾変化を保持

し、対格の形式を複数形として一般化した、一方東方ロマンス語では2個の語尾変化のみを保持し、主格の形式を複数形で一般化したのである（参照：esp. *casas, moros, luces*; it. *case, muri, luci*）。言い換えれば、（その初期においては、統辞的音声現象であった）音韻現象が、形態的現象の価値を獲得し、形態的（形態素的）現象を引き起こしたのである。これらの社会的・文化的理由による言語的傾向の分岐は、Wartburgによるとロマンシアに言語的一体性にとっての最初のまた根源的な分裂を作り出したものである。

20. ローマ化を進める人の中のこの社会的な違いというものに加えて、ここ最近の数十年間に Gerhard Rohlfs、Ramón Menéndez Pidal, Iorgu Iordan, Max Leopold Wagner 等の学者によるロマンス語比較方言学の成果を考慮する必要がある。彼等は、属州のロマンス諸方言をイタリアの諸方言と比較研究し、イタリア半島以外の言語と（特に南フランスの）イタリアの諸方言で合致している点とか、口語ラテン語に既に存在していた方言的違いを示した。言語として個別的なものとして定義されるロマンス諸語とは別に、イタリア諸方言と非イタリア系のロマンス諸語との間に顕著な合致点があることが示された。またあれやこれやのロマンス語の個別性を特徴付けている現象のうちのあるものは、イタリアの方言に見られる。またラテン語を過去に遡ればさかのぼる程、単なる偶然の一致ではない合致点（共通点）があり、これは、口語ラテン語で既に存在した方言的異化によるものばかりではなく、入植民の出身地の違いによるものとして説明できる。事実、入植民は、社会的階層によるものばかりではなく、民族的起源によっても区別できる。彼等は、*laciales* であり、またローマとかラシア（Lacio<sup>113</sup>）等のラテン語とは違った地域的ラテン語を話していたウンブリア人、サビヌス人<sup>114</sup>、サムニタ

<sup>113</sup> Lacio es una región del centro de Italia, que limita con la Toscana, Umbría, Abruzzo, Molise, Campania y el mar Tirreno. La capital de la región es Roma.

<sup>114</sup> sabelios, samnitas

人などがいた。彼等は、出身地で話されていた口語ラテン語の固有の現象を各属州にもたらすことになる。それで、例えば昔にイタリアでオスコ・ウンブリア人が住んでいた人の出身者のことばに存続している現象、言い換えれば、その昔にオスコ・ウンブリア地域であった所の現象が、この地域出身の人が植民した属州でも観察されることがある。これに関する論考は、Jaberg と Jud<sup>115</sup>の *Atlas lingüístico ítalo-suizo*<sup>116</sup>によって確認されている。それでこの著作の中で、オスコ・ウンブリア語の音声的現象である *mb* が *mm* へ同化することとか、また鼻音の後にある閉鎖音の有声音化 (*campo* > *cambo*) は、オスコ・ウンブリア民族がその昔に占拠した地域に対応していることが、示されている。これと同じ現象が、Menéndez Pidal の研究によってスペインのある地域（歴史的資料によると、古くオスク人が入植した）、*Huesca*<sup>117</sup>（古くは、*Oscā* と呼ばれた）の中央部に見られる。また別の特徴的なこととして、ロマンス語の母音体系の幾つかのタイプをあげることが出来る。すでに示したように、“俗”ラテン語では、長母音と短母音の間の音韻的区別を失い、その代わりに開母音と閉母音の区別となり、10 個のラテン語の母音は7 個の母音となる。しかしこのような変化は、すべての“俗”ラテン語で同質的に生起したのではなく（現代のロマンス諸語より推測される）、3 つの異なる変化を経てきた。先ず最初に“俗”ラテン語では、*ī* と *ē* は、*ē*（閉音の *e*）、*ō* となり、*ŭ* は *o*（閉音の *o*）となる（この変化はほとんどのロマンス諸語で現われる）。また次にルーマニア語で起きた変化である、*ī* は *ē* と混同される、しかし *ŭ* は *o* とならず、*ū* と混同された（cf. *siccus* > rum. *sec*, しかしながら *furca* > rum. *furcă*）。そして3 番目としては、サルディニア語で起きたことであるが、このような合一化は認められず、*ī* は *i* として、また *ŭ* は *u* として保存さ

<sup>115</sup> karl Jaberg, /Jakob Jud: ドイツの言語学者

<sup>116</sup> 「イタリア-スイス言語地図」

<sup>117</sup> スペインのアラゴン州の北西部

れた (cf. *sardo*, *pira*, *gula*)。Jaberg と Jud の言語地図で、このようなタイプの母音組織は、南イタリアのごく限定された地域で3つともみることができる。つまり種々のロマンス語母音組織は、口語ラテン語の(地域的)方言的母音組織を示しているのである。それでこのことは、特に Harri Meier によって支持されているロマンス言語の異化の原則的理由としてのラテン語の方言的違いについての理論を基礎付けるのである。

21. ローマ化の異なる傾向についての論証は、ラテン語内での地域的違いの論考(及び社会的違い)と関連している。ローマ化の違いは、属州内でのローマの行政区分とかローマ化の中心地などにその重要性を帰している。またその昔には Antoni Griaer<sup>118</sup>によって、また Harri Meier などによって最近では支持され、また研究されている。Griaer は、イベリア半島にローマ化について2潮流があったとする説を唱えている。その1つの潮流は、ガリアまた、イタリア北部、中央部より出てきた“地続きの<sup>119</sup>”イベリア半島北東部(Nordeste=NE)に残り、その変化結果は、カタルーニャ語となった、もう一方の潮流は、“海を介する<sup>120</sup>”もので、アフリカまた南イタリアより来たものでイベリア半島の南部と南西部(suroeste=SO)に侵入した、それでこれは“アフリカ-ロマンス”潮流と呼ぶことができる。このラテン語の変化結果は、スペイン語でありまたポルトガル語である。Griaer によると、カタルーニャ語と、スペイン語・ポルトガル語との間の前線は、イベリア半島内で最も古い時代に作られた違いであるとしている。この説は、W. Meyer-Lübke により批判され、かれは、カタルーニャ語と luso-español<sup>121</sup>との間には前

---

<sup>118</sup> Antoni Griaer の主著 : *L'Atles Lingüístic de Catalunya* (1923-1964).

<sup>119</sup> terrestre (corriente terrestre de la romanización)

<sup>120</sup> marítimo (corriente marítimo de la romanización)

<sup>121</sup> luso=lusitania ルシタニア人、現在のポルトガルに住んでいた先住民で、ケル

線があるという説を受け入れているが、この違いは、入植民での社会的階層の違い（イベリア半島の北東部では、軍人と農民による植民地化と、一方の南部及び南西部では都会の人間による植民地化）によるものとしている。Amado Alonso は、カタルーニャ語は、非イベリア的ロマンスとして特徴付けられるとの考え方を拒否している、そしてその理由として次のような事実を挙げている：カタルーニャのローマ化は、南ガリアのローマ化より 1 世紀以前に、また北ガリアの 1 世紀半前に開始されたのであり、現在のアンダルシアまたレバント地方の植民地化は、アフリカの征服の 200 年以前に始まったということを挙げている。いずれにしろ、ローマ化には 2 つの潮流というものが存在していたということはあったのであろう。

。 。 。

22. これまで取り上げたすべての要因は、ある程度ラテン語の分割を、またそれに従い、ロマンス諸語の異化に寄与したことは間違いないと思われる。しかしながら、問題の全体的なことを理解するためには、上記の要因に加えて、以下のローマ化の状況をすべてを考慮しなければならない：

- a) 各属州のローマ化は、それぞれ異なる時期に起きた（例えば紀元 1 世紀を取り上げると、イスパニアは既にローマ化された地域であったが、一方ダキアはまだ征服されていなかった）
- b) それぞれの属州では、ラテン語は、ロマンス語に様々な残存物を留める色々な基層語の上に課された。
- c) ラテン語化は、それぞれの地域で同じテンポで遂行されたわけではない（ダキアとかイスパニアのほとんどの地域では、ローマ化は素早く行われたが、これに反して、アフリカのローマ化

---

ト系の人ではないかとされている。

は、非常にゆっくりとしたものであった)、またそれぞれの社会階層とか、同一の地域であっても色々が地区によってもことになっていた。例えばガリアでは、上流の都市生活者は、紀元1世紀にはすでにローマ化されていたが、地方ではケルト語が3, 4世紀まで保持されていたし、**Helvecia**<sup>122</sup>では紀元5世紀まで保持されていた)。

- d) ラテン語化は、同じ密度で遂行されたわけではない(カンタブリア、北ガリア、**Recia**でのローマ化は、他の地域と比較するとそれほど深いものではない。
- e) ローマにより征服された各属州の人口密度は、同じではない(ガリアでの征服に伴う戦士の犠牲者の数は、イスパニアよりも多かったし、またダキアは、この地域の土着の人口が大変希薄となってから、征服されたので、ダキアのローマ帝国の民族の基盤となったのは、ローマ化された土着民よりもむしろ、イタリアからの入植民によるものであった。
- f) 様々な社会階層出身の入植民は、社会的にまた文化的に異なったラテン語を話していた。
- g) 入植民はすべて民族的にラテン人ではなく、イタリアのラテン化された色々な地域よりやって来た(ダキアなどの遅い時期に属州になった所には、それ以外の地域より来た人もいる)。
- h) ローマ化は、各地のローマ化の潮流によってそれぞれ違っていた、このローマ化の中心地は異なっていたし、またローマ帝国の行政区分によって影響力の波及方向はことになっていた。

23. これらのことは、明らかであり、これを否定するひとは誰もいない。ラテン語の分化の問題については、まだ完全に解決したわけではなく、これらの各要因の重要性、またその実効的結果

---

<sup>122</sup> Helvetia es de la tribu de los Helvéticos la derivación de la neulatinica significación para Suiza y una alegoría de la imagen de la mujer, la que representa Suiza.

などについて学者間での普遍的同意というものはなく、当面は、どの要因もラテン語の分割に関わっているといえるにすぎない。それで、それぞれの学者は、これらの要因のあるものを無視し、ある要因の重要性だけを取り上げ、他の学者が他の要因であるとしている現象を、実際に働いた要因であるとしたりする。

それで、例えば **H. Morf** は、特に基層語の重要性を強調し、現在のフランスの言語的境界線は、シーザーがローマ征服時代にガリアに住んでいたとする3つの種族 **Belgas, Aquitanos<sup>123</sup>, Galos** の居住地域と合致しているとする。

**Walter von Wartburg** は、口語ラテン語内の社会的、文化的違い、また基層語に、特に重要性を見ている。

**Amado Alonso** は、基層語またローマ化のそれぞれの地域での密度の違いの重要性を強調している。それで彼はフランス語が他のロマンス諸語とはかなり違っているのは、北ガリアは、他のロマニアの属州のほとんどの場所ほどには強力にローマ化されていなかったという事実によるものとしている。つまり北ガリアでは、“基層語”の要素が多く保存されていたので、フランス語は西ロマンス語の中では最も反抗的なことばであった、としている。

**Harri Meier** は、他の学者のほとんど凡ての視点に批判的であり、ロマンス諸語の異化の諸要因の重要性についてはそれほど重くみることなく、入植民の出身地の方言的な違いという点を特に

---

<sup>123</sup> Aquitano: Lengua prerromana hablada en el suroeste de la actual Francia y el extremo occidental de los Pirineos, conocida por una serie de textos votivos y funerarios en latín que contienen unos 400 nombres de persona y 70 nombres de dioses.

強調している（また **Menéndez Pidal** も南部イタリアとスペインの北東部で“オスコ・ウンブリア語”タイプの現象を指摘している）。またローマの行政的区分と植民地化の拡散の中心地などに依存しているローマ化の潮流というものを重視している。つまり **Meier** は、やり方は違う原則的に **Griera** の述べている原理を受け入れているように思われる。事実、ポルトガルから、スペインの中部とか南部を介してカタルーニャまで広がったイスパニアの古い時代の言語的統一性を示すことができるが（このことは、**Ramón Menéndez Pidal** によって“*Orígenes del español*”で示されている）、**Meier** は、一連の特徴とか対応形などを集めている。これらの異化が始まったのは、非常に古い時期にまで遡及させることができる。ローマ化の2つの潮流の結果として異化が始まり、1つは **Tarraconensis**<sup>124</sup> というローマ属州であったイスパニアの北東部を中心地とするものであり、もう1つは **Bética**<sup>125</sup> を中心とするものである。カタルーニャ語の個別性は、**terraconense** の言語潮流の特質によって区分されているし、ポルトガル語の個別性は、**bético-lusitana** の潮流によって他と区分される。しかしながらスペイン語では、この2つの言語潮流の（言語現象の）結果が合流することになる（以下で、スペイン語はある面でカタルーニャ語と合致しているが、別の面では **gallego-portugués** と合致しているものがあることを検討することになる）。**Harri Meier** は、植民地化によるラテン語（イタリアのラテン語）の方言的側面に重要性を付与し、彼は、“古典”ラテン語と“俗”ラテン語の他に第3のタイプのラテン語である方言的ラテン語をいうものを措定するようになる。**Meier** は、**Meillet** の云う（“紀元後3世紀でも、他の

---

<sup>124</sup> **Tarraconensis**

<sup>125</sup> Nombre que procede de Baetis, apelativo latino para el río Guadalquivir y que se refiere a una de las provincias en que los romanos dividieron Hispania, cuya capital fue Corduba (Córdoba).  
Esta provincia romana comprendía aproximadamente lo que actualmente es Andalucía.

属州のとは若干異なるアクセントで話されていたラテン語があった<sup>126</sup>”)を受け入れている。しかしながら、このラテン語は、属州に唯一存在していたものではなく、このラテン語は、“地域的に異なる言語的基盤”であったのであり、ロマンス語は、Meilletの言うラテン語より出現したということではなく、“ローマ帝国の時代のこの方言的語形を基盤とする継続形”である、としている。

。 。 。

24. これまで指摘したすべての要因は、いわゆる“俗”ラテン語の分割にある程度は貢献したとは云える。これらは、ロマンス語の分岐の特有な側面、状況、条件、また異化の特有の現象の理由としての単なる“要因”であるが、一般的現象としての異化の“第一義的原因<sup>127</sup>”として貢献していない。これらの諸条件が顕現することなく、ある言語的進展にとって最善の条件と見られる潜在的で、(体系にとって)無害な誘因といったものと比較することができるかもしれない<sup>128</sup>。ラテン語の分割に係わる真のそして根源的な原因は、ラテン文化の衰退であったといえる。共通言語は、文化的事実であり、文化状態を反映している。また文化が活発であり、繁栄していれば、社会的また地域的に色合いをことにするかもしれないが、言語は多少とも均一的に保持されることになる。どの言語も“活発な”なものとして存在していれば地域的、社会的な色合いというものは、共通言語としての一体性に影響することなく、この共通言語は、実際にそれぞれの個人の使

<sup>126</sup> “au IIIe siècle après J.C., il y avait encore un Latin, parlé seulement avec des accents un peu différents d’une province à l’autre”

<sup>127</sup> *causa causans*

<sup>128</sup> *se pueden comparar con fermentos latentes e inocuos que en cierto momento encontraron las condiciones optimas para su desarrollo y su accion, aun sin haber provocado ellos mismos dichas condiciones.*

う言葉の完成度は異なるかもしれないが、常にモデルでありまた話し手の概念的規範となる。つまり共通言語とは、活発な文化の表現形式であり、地域的語法、方言形式、俗語形式、革新形式などを同化するようになり、国民的威信を付与することになる。しかしながら、共通言語は、文学とか文化的制度などを介して育成、保持、改変され、ある限定的心情的、概念的なものを反映させる。また偉大な作家の作品などを権威とすることによって、言語の理想的モデルをある社会的階層に置くことがある。

このような社会的基盤とか、文化的活力などがラテン語で欠如してくる。それで、紀元後の2, 3世紀間は、ラテン文化の漸進的衰退、ローマの精神性の基本的変化、また古典時代の生活についての理想像の衰微などが増すことになる。それによってローマ帝国は、オリエンタル化、またゲルマン化する。ローマの威厳、また節度は華美なものへと向かい、ローマの習慣が緩慢なものとなり、下卑た観念を助長するようになる。古い時代のローマ上流階級は、道徳的にまた精神的に退廃し、また経済的にも活力を失い、すべての安定性が失われるようになる。引続く戦争、豊かな属州の著区民地化、また恣意的な嗜好などによって、富裕さとか金銭による文化的に劣り、お互いに異質な上流階級が形成されるようになる。文化的施設は、その威信を失い、衰退する。ラテン文学は、市民権が与えられるに足らないものであるが、革新的なものが全体に拡散することになる。それで、これらは話し言葉だけに残り、一般的特徴を得ることなく口語に広がることになる。同時に、文化的施設の欠如とか、社会階層の不安定さなどによって、共通言語の理想的規範についての明確な意識を持つ人が、段々と減じるようになる。すると言語へ基準を課すことが出来なくなり、革新形式の中から何かを選択するということが必要なことになる。このような基準がなく、また効率的な言語の規範が欠如しているので、ラテン語の黄金時代、キケロの時代の言語的規範にそ

れを求めるようになる。偉大なものについての突き動かされた唯一のものとしては、キリスト教がある、これは当初は“上流階級の”（言語学的視点よりすると）運動ではなく、謙虚さという道徳律を持っていた下層階級の運動であった。キリスト教は、軍隊に浸透し、布教者の多くは外国人（特にギリシャ人）であった。これによって、多くの著述家が記しているように、“キリスト教”で使われるラテン語を区別するときには何らかの疑問があるときには、口語ラテン語に対してキリスト教が及ぼした“民衆への普及者の”影響を無視することはできない。

25. これまで論じてきたところによると、その結論としては、実際に生じたことは起ったことである、つまり口語ラテン語は、古典ラテン語のモデルから離れながら、“普及し”、単純化されるようになる、ということである。しかしながら、もしローマ帝国が強力に中央集権化したままで持続し、またローマが“世界の頭目”という権威を保持し、また遠隔の地にある他の属州とも恒常的に関係を維持していたとすると、口語ラテン語としての言語は、多分、比較的一体性を保持したいたであろうし、また文体的な衰退（ローマ帝国の言語は、首都の言語と共に“大衆化”したであろう）というものを論証できたであろう。しかしながらこれによって、言語的分割ということにはなっていなかったであろう。これに反して、実際には、これまで指摘した理由とか状況などによって、ローマは、政治的なものばかりではなく、経済的、文化的な分野で、属州の益々大きくなる自発的發展によって、ローマ帝国としての威信が徐々に失われた。ローマの衰退によってローマの言語的基準というものが失われることになり、各属州で、共通言語内での単なるニュアンス的違いであったものが地域的特有性をモデルにまで高められるようになる。このようにして、入植民が属州に持ち込んだイタリアの方言的語法、俗語語法、古語語法また属州で使われるラテン語、特に語彙に持ち込んだ土着的要因

などは、堅固な言語的統一性、共通言語の理想像、また地域的なもの以上の言語的規範が存在しているときに起るように、徐々に排除されるということではなく、その逆に、属州の個別性の特徴的側面として、それらは属州に根を張り、拡散することになる。また地域的中心部から出てきた革新的形式は、単なるニュアンスの違いというようなものとして残るのではなく、また（属州の中心地が政治的、経済的また文化的にローマを凌ぐようになったときには）地域的なものを越えるようなものとはならず、共通言語でのモデルと同じようにますます広い地域に拡散する。（Augusto より Diocleciano までの時期に該当する）ある時代には、ローマは帝国内で言語的主導権を保持していたが、この時期以後の主導権は、口語ラテン語内の遠心力が働き、それぞれの属州へ移行することになる。それで、各属州の革新的形式は、それぞれことなる放射線状に拡散することになる。これが“俗”ラテン語の比較的一体性を破る最初の裂け目となり、ローマ帝国の崩壊後に作られた諸国家がこれを固定化させ、決定的な分割の先駆けとなる。

**Walter von Wartburg** によると、**母音間の無声子音の有声音化**とか、また**軟口蓋音の K, G の硬口蓋音化**などの現象は、属州の主導権によるものとする事が出来る、としている。

紀元2世紀には、既にイベリア半島での碑文で、*immutavit* の代わりに *imudavit* (母音間の *t* が *d* に替わる)が見られる。また3世紀には、その例が多くなり、母音間の *p* が *b* に替わるという現象が見られる。母音間の無声閉鎖音の有声音化という現象は、このスイスの学者によると、イベリア半島を起源とする西部地方より出発した革新形式であり、ガリア、アルプス地方また北イタリアへ拡散し、部分的であるが中央イタリアにまで広がることになる。しかしこの現象は、コルシカ島、サルディニア島、南イタリアとかダキアまでは到達することはなかった。この現象は、ロマンス

語前の時代にも起きていたものであるが、今日では、スペイン語と文学イタリア語（*toscano* 語）を対立させるものとなっている。例えば、*saber-sapere*, *fuego-fueco*, *poder-potere*, *mudar-mutare*, *seguro-sicuro*, etc.がある。（しかしながら、トスカーナ語では次のような有声音化の例が見られる：*acu* > *ago*, *locu* > *luogo*; cf. rum. *ac*, *loc*）。

軟口蓋音（特に *k*）の場合も同様で、変革はガリアより始まり、古い発音を保持している南ダルマシア<sup>129</sup>、サルディニア、コルシカとか、変革が部分的にか確認できない北ダルマシアを除いて、ほぼすべてのロマニアに広がる。北ガリアでは、*K* は *e*, *i*, また *a* の前でも硬口蓋音化し（cf. *caelum* > fr. *ciel*, *cilium* > fr. *cil*, *canem* > fr. *chien*）、他のロマニアすべてで（esp. port. prov. ital. rum.）*e*, *i* の前で硬口蓋音化するが、北ダルマシアでは *i* の前でのみ硬口蓋音化する。南ダルマシアとサルディニア（また前ロマンス語の時期のコルシカ）では、軟口蓋音をそのまま保持し、どの場所でも硬口蓋音化しなかった。

。 。 。

26. これまでに示してきた事実を基礎としてはっきりと云えること、また類似の事実などは（地理的言語学の研究によって）、それぞれ異なった中心部からの一連の“革新の波”を明らかにしている。ローマ帝国時代に全体的にことばの平準化があったという観念があるが、これを受け入れることは出来ない。また更に多くの革新的な誘因が口語ラテン語の中に存在していたということを認めなければならない。**Walter von Wartburg** によると、この

<sup>129</sup> ダルマシア：現在のクロアチアのアドリア海沿岸部：Región geográfica en la costa adriática que pertenece a Croacia. Su gentilicio es dalmata.

誘因によって、紀元 3 世紀頃に既に初期の重要な変化結果があったとする。この 3 世紀に **Spezia-Rimini** 線にほぼ対応する重要な前線というものがあった。この線とは、(北)大陸に属するイタリアと(中央-南部)半島に属するイタリアを区分けするものである。これによって、ローマ帝国は 2 つの明確に特徴がある地域に分けることができる。この地域の北部と西部 (**Galia Cisalpina**<sup>130</sup>、**Recia**, ガリア、イベリア、アフリカ) では、語末の *s* を残している。また母音間の無声閉鎖音は、有声音 (また母音間の *s* も) になるのである。また複数形はラテン語の対格で作られた。この線の南部と東部 (中央-南部イタリア、**Iliria**<sup>131</sup>, **Mesia**<sup>132</sup>, ダキア) では、語末の *s* を保存していない、また複数形は、ラテン語の主格の形式で作られている、また *s* と母音間の無声閉鎖音は、無声のまま保持されている。この 2 つの地域外のコルシカ島、サルディニア島では、保守的な特性を保っている。また別の 2 次的な前線

---

<sup>130</sup> Algunos autores la llaman también Galia Itálica, y es también llamada Galia citerior o togata. La conformaban todas las tierras del norte de los ríos Arnus (Arno) y Rubico (o Rubicón). El río Po transcurre por este territorio de Este a Oeste trazando una divisoria geográfica natural. En aquella época la divisoria del río era muy importante pues existía una gran diferencia entre los habitantes de una orilla y de otra. Las gentes al sur del río estaban muy romanizadas y muchas tenían incluso los mismos derechos que los romanos. En el norte del río, las gentes y las ciudades eran más celtas que romanas. En el siglo I sólo las ciudades de Aquilea y Cremona tenían derechos latinos; incluso hablaban otras jergas y tenían el latín como segunda lengua. En general la Galia Cisalpina no participaba casi de los asuntos romanos y no gozaba de las ventajas de los aliados itálicos. Ni siquiera se reclutaban a sus habitantes para la infantería romana.

<sup>131</sup> Antigua región de Europa que, en su mayor extensión, incluía la parte occidental de la península Balcánica a orillas del Mar Adriático. En 1807, Napoleón se apodera también de Eslovenia, Trieste y los territorios croatas de Zagreb. Todas estas provincias, las reagrupa y forma con ellas las llamadas "Provincias Ilirias".

En 1816 es constituido el Reino de Iliria, como parte del Imperio austriaco con las provincias ilíricas restituidas a Austria por Francia.

Obtenido de "<http://es.wikipedia.org/wiki/Iliria>"

<sup>132</sup> Mesia Antica regione comprendente il territorio esteso sulla riva destra del Danubio, fra la Dacia a nord, la Dalmazia a ovest, la Tracia a sud e il... [http://it.encarta.msn.com/encyclopedia\\_981531255/Mesia.html](http://it.encarta.msn.com/encyclopedia_981531255/Mesia.html)

が、西部ロマニアで見られる、1 つは、*kt > xt* (ケルト語基層により)の前線があり、イベリア半島とガリアが含まれるが、*Galia Cisalpin*(北イタリア)全部を含まれない、またもう一つの前線として、*u > ü* (ゴール語基層による *ü* へ向かおうとする *u* より)の前線がある、これには北ガリアのみが含まれる。このような言語的な特性は、(*Spezia-Rimini* 線の重要さに関しては、特にイタリアにおいて)変容され、固定され、その後にゲルマン人により、また西ローマ帝国の崩壊後のゲルマン人による国の設立の結果として、安定することになる。ゲルマン人の影響は、ある場合には、北ガリアなどでは非常に根本的なものであった (この北ガリアではケルト-ラテン人とフランク人などの民族の実質的に混ざり合い、ラテン語-ゲルマン語という2言語併用状態を招来した)。また単に外的なものであったが言語的前線の定義のためには重要なものであった (新しい作られたゲルマン国家内ではそれぞれことばの平準化がなされ、言語的前線と政治的範囲が合致することになった)。ゲルマン人による色々な影響力の種類としては、フランス語の特有性を旨く説明するものである。それでその領地 (北ガリア) では、ゲルマン人 (フランク人) は民族として認められるようになる一方で、ガリアの南、イスパニア、イタリアでは政治的-軍事的指導階級となったにすぎない。古代ガリアでの *langue d'oïl* と *langue d'oc*<sup>133</sup> との間の前線は、概略ではあるが、フランク人の植民地の南限に対応している。この言語前線の南側ではフランク

---

<sup>133</sup> El occitano, o lengua de oc es una lengua romance que se hablaba en todo el tercio sur de lo que hoy es Francia (al sur del río Loira), así como en algunos valles alpinos de Italia y el valle de Arán (en el noroeste de Cataluña, España). Hoy el número de hablantes es mínimo, aunque tiene carácter cooficial en el valle de Arán, junto con el español o castellano y el catalán.

El nombre del idioma viene de la palabra oc que en occitano medieval significa 'sí', en contraste con el francés del norte o lengua de oïl (pronunciado uí, ancestro del francés moderno oui). La palabra oc provenía del latín hoc, en tanto que oïl se derivó del latín hoc ille. La palabra occitano se desprende del nombre de la región histórica de Occitania, que a su vez viene de Aquitania, antigua región administrativa romana.

人は、小さな国を多く作ることになる、また他の部族に属するゲルマン人（ゴート人<sup>134</sup>）は、その首都を Tolosa, Barcelona, Toledo と次々に移すが、種族が真に混ざり会うということにはならなかった。このような状況によって、現在のイベリアとか南ガリアが一体となって、北ガリア地域と対立するような保守的等語線を説明することができる。

Wartburg によって示されたロマンス語のグループ分けは、基本的には、西方ロマニアと東方ロマニアという伝統的な区分に当てている。しかし別の歴史的な等語線と取り上げてみると、その最初の等語線は、前ロマンス語時代にまで遡るものであり、別のグループ分けとも合致するようなものでもある、例えば、a) **ダキアと西部+イタリア**（ダキアのロマンス語の特有な母音組織を考慮し、また更にこの属州が他の属州から分離した後に、イタリアとか西部地域のロマンス語が参入したような平準化とかまた変革には参入しなかった）。b) **南部地帯**：この地域は、特にオスク基層語またはオスク方言語法によって特徴付けられる（イベリア、中部-南部イタリア、ダキア）、また北部地帯（ガリア、Recia, 北部イタリア）などは、ケルト語基層語によって特徴付けられる。まだ同じく西部地区内で、次のものが区別できる：a) **大西洋地域**（ガリシア語-ポルトガル語、フランス語）と **地中海地域**（スペイン語、カタルーニャ語、プロバンス語、ティレニア海のイタリア語）またイタリアは別にされる。b) **根本的に革新的地域**（北ガリア、またはまさにフランス語と呼ばれる地域）、また **かなり革新的な地域**（イベリア、南部ガリシア：ガリシア語-ポルトガル語、アストリア-レオン語、カスティーリャ語、ナバラ-アラゴン

---

<sup>134</sup> Los Godos eran un pueblo de origen germánico, posiblemente procedentes de Escandinavia y que en el siglo I a.C. lograron alcanzar las costas polacas, moviéndose posteriormente hacia el sur y el este del continente.

語、カタルーニャ語、ガスコーニュ語、プロバンス語)。この後者の区分に関しては、アラゴン語、カタルーニャ語、プロバンス語（これらの言語が話されていた地域の方言は、古代アキタニア（aquitano<sup>135</sup>）が占領していた地域にほぼ対応する）の間の類似性（近親性）は、**G. Rohlfs** により強調されている。また特に保守的なものの類似性に関して言えば、ガリシア語-ポルトガル語、またアストリア-レオン語などを同じグループに（しかしアキタニア語基層語とは関連しない）組み入れることができる。そしてこれらの言語を、（フランス語に関連させて比較したときに）保守的言語の内の最も革新的方言とすることができる。このような考え方は、**Ramón Menéndez Pidal** の *Orígenes del español* で示した基本的な見解である。また **Amado Alonso** は、カタルーニャ語のロマンス語での下位グループ分類を研究するに際して、類似の結論に到達している。**Amado Alonso** によると、西部ロマニアの全地域では、純粹の区分線は、フランスにのみ存在している、としている。この区分線は、いわゆるフランス語の方言といえるものと、*langue d'oc* の諸方言を区別している等語線の周辺の縁に対応する。一方ではその他の方言の中では（イベリア半島のレコンキスタ地域を除いて）、言語的变化径路は段階的なものであり、ほぼ違いが感じられないほどのものである。それでフランス語は、特有の性格を示しているので、西部ロマンス語全体の中では別のものであると考えなければならない。フランス語は、“俗”ラテン語から受け継いだ母音組織を根本的に変容し、様々な母音を発展させたことによって、開音節または閉音節になるこ

---

<sup>135</sup> Aquitania: Nombre recibido a lo largo de la historia por diversas partes del sudoeste de la actual Francia.

Durante la conquista romana de la Galia por Julio César, se llamaba así al territorio al sur del Garona, habitado por un pueblo de jinetes que el propio César califica de íberos. El mismo topónimo puede derivar de la palabra latina para jinete: "equites".

ともある。例えば母音+子音・鼻音は、母音を鼻音化し、子音が消失することになる。それによって、鼻音を除けばすべての母音間の有声音を失うことになり、*v*として保存される (cf. *maduro-mûr*, *seguro-sûr*, *vida-vie*, しかしながら、*saber-savoir*)。これらの音声変化は、特徴的なもので、他の西部ロマンス諸語（プロバンス語も含めて）と明確に区別できるものである。

。 。 。

27. 前ロマンス語という時期から、イスパニア特有の性格というものを幾つか区別することができる。

先ず最初に、イベリア半島は、ガリアよりも、また北ガリアよりも、ケルト語法に抵抗してきた。このような“ケルト語法に対する抵抗”（または一般的に、前ラテン語時代の基層語に対する抵抗）というものは、この地方では、ガリアよりもより深くローマ化された、またガリア北部よりもより根源的にローマ化されたという意味で理解しておかなければならない。

第2に、イベリア半島は、他の西部ロマニアよりも一般的に保守的のようであり（イスパニアのラテン語に何らかの影響を及ぼしたアフリカより来たラテン語に合致している）、このことは、特に語彙の中で論証することができる（例：*avis*, *comedere*, *metus*, *formosus*, *fabulare* [ cl. *fabulari* ], *fervere*, しかしイベリア半島のロマンス語は、フランス語とかイタリア語のような最近の語形とか俗語形を受け入れることはなかった (*aucellus*, *manducare*, *pavor*, *bellus*, *parabolare*, *bullire*)。また文法の体系的な現象として見られる（例えば、3つの指示代名詞の区別 *éste*, *ése*, *aqué* を保持し、一方でフランス語では、保存されず、イタリア語では部分的に保持している、という事実が指摘できる）。

Jud が指摘しているように、イベリア半島は、ガリアとかイタリアに対立する特有な個別性というものが古い時代より（ラテン時代にすでに）見られ、語彙に現われている。これは多分 Wartburg が“イベリアの個別性”と呼ぶものの結果であろう。しかしこの表現、イベリアの個別性は、このことの唯一の理由を示しているものではなく、一連の特有性の事後的定義として理解する方が好ましい。

28. 総体としては一般に保守的であるとされるイベリアのロマンス諸語の中で、カスティーリャ語は、より革新的な方言のようである（フランス語と比較したときにはそれほど革新的であるとは云えないが）。その理由として、カスティーリャ語の初源の地域の東方、西方、南方に位置している（言語変化拡散の）中心地からやってきたものとは関係のない革新形式を受け入れ、多くの側面で独自に変革させてきた、ということが指摘できる。しかしながら、一般的イスパニアロマンス語からカスティーリャ語を区別しなければならない。またスペイン語と同一視してはならない。スペイン語の体系は、すべての位置で開音の *e* と *o* を二重母音化し、また俗ラテン語のアクセントを保持している方言の総体として定義することができ、またアストリア-レオン語、ナバラ-アラゴン語などのより保守的な方言をも包含している。またイベリア半島の中部と南部地域では、カスティーリャ語よりもむしろポルトガルと、アストリア-レオン語、ナバラ-アラゴン語、またカタルーニャ語などど合致するような保守的な性質を、レコンキスタ時期まで保持していた。つまり、“スペイン語”に移行する前のカスティーリャ語、つまり初源的カスティーリャ語は、イスパニア半島のごく限られた狭い地域の方言であった。つまりカンタブリア地方のロマンス系の方言であり、またその後にはデュエ

ロ河とエブロ河上流に挟まれたブルゴス地方<sup>136</sup>のカスティーリャ語化された地域の方言であったにすぎない。カスティーリャ語の特有性（語末音の保存、また他の変革形式などのような現象によって定義することができる）は、Amado Alonso が強調しているところであるが、古い時代の歴史的理由によって説明することができる。実際に、カスティーリャ語の発祥の地にあたる地域は、不完全にローマ化が行われ、また非常に緩慢に進められた場所であった。ローマは、この地域を完全に征服するためにほぼ200年を要したのである。紀元前56年、カンタブリア人は、バスク族と共にローマと戦い、紀元前29年にカンタブリア人とアストリア人の新たな大反乱を起こした。ローマによる彼等に戦いは、紀元前26、25年に Augusto に指揮された。この August は勝利したが、この反乱は、血みどろの戦いを経て Agripa によって平定される紀元前19年まで続いたのである。また紀元16年にも別の反乱が起り、この地域はやっとネロの治世時代にローマ帝国に組み込まれることになる。この高地の多い地域は、ゲルマン人に占領された後にもある程度の自治権を保持していた。実質的に（Leovigildo<sup>137</sup>が574年に西ゴート王国に組み込まれるまでの）150年余り独立していたといえる。またその後も、少なくとも反抗の精神というものを保持していた。

今日、“スペイン”という呼称は、まさに初期にカスティーリャ化された地域のカスティーリャであり、**ブルゴス地帯のカスティーリャ**であり、10世紀においてもローマが不完全であり、また一部の地域ではバスク人が再入植したような地域である。つま

<sup>136</sup> Burgos, ciudad española, capital de la provincia de Burgos al nordeste de la Comunidad Autónoma de Castilla y León

<sup>137</sup> Leovigildo, rey de los Visigodos de 572 a 586. Obtuvo el reinado después de la muerte de su hermano Liuva I. Casó por tres veces; su primera esposa fue Teodosia, de quien tuvo a su heredero Recaredo I; su segunda mujer fue Riquilda, hija de Chilperico I rey de Neustria; y su tercera esposa fue Gosvinda, viuda de Atanagildo.

りカスティーリャとは、“イベリア半島のロマンス語の中で最もイベリア的なもの”である。Amado Alonso の結論は、“イベリアの精神(mens)が、カスティーリャ語の発展を主宰していた”ということである。このことは大げさな表現ではない、というのは、カスティーリャ語は、多分イベリア的調音習慣を保持していた。しかしながら実質的には、言語にとっての有意味な体系（特に文法体系）というものには、なんら影響を及ぼしてはいない。スペイン語の中の“イベリア的なもの”は、表現的側面にだけ限られているので、この Amado Alonso の言明の中の“精神”(mens)とは、“音韻的意識”と同じことを指しているとすれば、受け入れることができるようなものである。

。 。 。

## 基本的参考書

- A. Meillet – *Equisse d'une histoire de la langue latine*, 5a. ed. Paris, 1948.
- J. Cousin - *Evolution et structure de la langue latine*. Paris, 1944.
- C.H. Grandgent – *An introduction to Vulgar Latin*. Boston, 1907.  
Trad. esp.: “Introducción al estudio del latín vulgar”  
2a. ed. Madrid. 1952
- W. A. Baehrens – *Skizz der lateinischen Volkssprache*, Leipzig, 1925.
- J. B. Hofmann - *Lateinische Umgangssprache*, 2a. ed. Heidelberg, 1951.
- M. Bartoli - *Per la storia del latino volgare* ( ahora en “Saggi di linguistica spaziale”. Turín, 1945)
- M. Bartoli – *Caratteri fondamentali delle lingue neolatine* (ibid).
- C. Battisti - *La crisi del latino*. Florencia, 1946.
- C. Battisti - *Avviamento allo studio del latino volgare*, Bari, 1949
- K. Vossler - *Neue Denkformen im Vulgärlatein* ( en “Hauptfragen der Romanistik. Festschrift für Philipp August Becker”. Heidelberg, 1922.)
- W. A. Baehrens – *Sprachlicher Kommentar zur vulgärlateinischen Appendix Probi*. Halle, 1922.
- E. Löfstedt – *Philologischer Kommentar zur Peregrinatio Aetheriae*. Uppsala, 1911.
- S. Silva Neto – *Fontes do latim vulgar* ( O Appendix Probi).  
Río de Janeiro, 1946.
- M.C. Díaz y Díaz – *Antología del latín vulgar*. Madrid, 1950.
- W. Meyer-Lübke – *Introducción a la lingüística románica*. Trad. esp. de la 3a. ed. alemana. Madrid, 1927.
- E. Bourciez – *Eléments de linguistique romane*, 4a. ed. Paris, 1946.
- A. Zauner – *Romanische Sprachwissenschaft*, 4a. ed. 2t. Leipzig,

1921-1926

W. Meyer-Lübke – Grammaire des langues romanes. 4t. Paris

1890-1906

P. Savj-Lopez – Le origini neolatine, reimpr. Milán, 1948. Trad. esp.:

“Orígenes neolatinos”, Barcelona, 1935.

C.Tagliavini – Le origini delle lingue neolatine, 2a. ed. Bolonia, 1952.

W. Meyer-Lübke – Die lateinische Sprache in den romanischen  
Ländern (Grundriss Gröber, I, 3, A).

W. von Wartburg – Die Entstehung der romanischen Völker. Halle,  
1939. Trad. fr.: “Les origines des peuples romans”,  
Paris, 1941.

W. von Wartburg – Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume.  
Berna, 1950. Trad. esp.: “ La fragmentación lingüística  
de la Romania”, Madrid, 1953.

W. Meyer-Lübke – Das Katalanische, Seine Stellung zum Spanischen  
und Provenzalischen. Heidelberg, 1925.

A. Alonso – La subagrupación románica del catalán ( ahora en “Estudios  
lingüísticos. Temas españoles”, Madrid, 1951.

A. Alondo - Partición de las lenguas románicas de Occidente (ibid.)

H. Meier – Beiträge zur sprachlichen Gliederung der Pyrenäenhalbinsel.  
Hamburg, 1930.

H. Meier - Die Entstehung der romanischen Sprachen und Nationen.  
Frankfurt a. M., 1941.

H. Meier - A formação de língua portuguesa ( en : Ensaio de  
filologia românica”, Lisbon, 1948.

R. Menéndez Pidal – Orígenes del español, 3a. ed. Madrid, 1959.